鼻毛石赤坂遺跡

一般県道宮城前橋線緊急地方道路整備A事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

群馬県勢多郡宮城村教育委員会

序

本書は県道宮城前橋線緊急地方道路整備A事業に伴って、事前の発掘調査が行われた鼻毛石赤坂遺跡の発掘調査報告書です。

今回の調査では縄文時代・歴史時代及び近現代の遺構が検出され、鼻毛石地区の歴史を解明する上で貴重な資料を提示されたものと思います。今後、本書が地域の歴史や文化を解明する上での一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり終始ご指導、ご協力をいただきました多くの関係者の皆様に厚く感謝の意を表すとともに、作業に携わった作業員の方々の労をねぎらい、序にかえさせていただきます。

平成16年3月

宮城村教育委員会
教育長　平　林　　始

例　　言

1．本書は、宮城前橋線緊急地方道路整備A事業に伴い発掘調査を実施した鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡・同Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査時には「鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡」を「鼻毛石弥源司遺跡」とし、「鼻毛石赤坂Ⅱ遺跡」のみを「鼻毛石赤坂遺跡」と呼称していたが、試掘調査や発掘調査の結果、字弥源司地内よりも字赤坂地内に遺跡の分布の中心が認められたため、本報告において遺跡名を変更する。

3．発掘調査及び整理調査は、前橋土木事務所からの委託金により実施した。

4．調査組織は次のとおりである。

群馬県教育委員会文化課	専門員	矢口裕之
宮城村教育委員会事務局	教育長	平林　始
	事務局長	阿久澤市郎(～平成15年3月31日)
		六本木庫一(平成15年4月1日～)
	主　査	内山信也
	主　任	小川卓也

5．本書の編集・執筆は小川が担当した。

6．縄文時代の石器石材の鑑定は阿久澤智和氏(宮城村役場)によるものである。

7．自然科学分析は株式会社古環境研究所に依頼し、分析結果は巻末に収録した。

8．本報告にかかる出土品・調査記録図面及び写真等は宮城村教育委員会が保管している。

9．本書の作成にあたっては次の諸氏・諸機関より貴重な御指導・御教示を賜った。ここに記して感謝の意を表します。　(五十音順、敬称略)

阿久澤智和、杉山真二、鈴木徳雄、関根慎二、早田勉、谷藤保彦、富田孝彦、中島直樹、細野高伯、諸星良一、矢口裕之、山口逸弘、山下歳信

㈱古環境研究所、群馬県教育委員会文化課、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、勢多郡社会教育部会文化財分会、前橋土木事務所、宮城村役場建設課

10．発掘調査作業員・整理作業員は次の通りである(五十音順、敬称略)。

青木久子、阿久澤一郎、北爪栄子、前原栄子、吉澤乃里子

凡　　例

1．本書の挿図中の方位記号は座標北を示す。

2．第1図は建設省国土地理院発行1/25,000「鼻毛石」に加筆して使用した。

3．本書に掲載した遺構図・遺物図の縮尺は概ね下記の通りだが、詳細については図版中のスケールを参考にされたい。

遺跡全体図：1/1,200(鼻毛石鎌田Ⅱ・Ⅲ遺跡)　遺構全体図：1/400　住居址・竪穴状遺構・土坑・溝跡：1/60　埋甕：1/20　遺物実測図：1/2～1/4

4．事実記載中の遺物出土量は、接合関係にあるものは1点とカウントし、同一個体でも接合関係のないものはそれぞれ1点とカウントした。

5．土製品・石器の観察表中の法量は現存値を表す。

6．図版中の表示は次のことを意味し、この他の表示については図中にその意味を記した。

【遺構平面図】 ● 土器・▲ 石器　　【遺構断面図】 土器・ 石器・ 地山

【土器実測図】 ● 繊維混入　　【石器実測図】 磨滅・磨面

目　　次

序
例　言
凡　例
第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境 …… 1
　第１節　遺跡の位置 …… 1
　第２節　周辺の遺跡 …… 1
第３章　鼻毛石赤坂遺跡 …… 7
　第１節　調査の方法 …… 7
　第２節　基本層序 …… 7
　第３節　鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡の遺構と遺物 …… 8
　　第１項　縄文時代の遺構と遺物 …… 8
　　第２項　近現代及び時期不明の遺構と遺物 …… 10
　第４節　鼻毛石赤坂Ⅱ遺跡の遺構と遺物 …… 12
　第５節　まとめ …… 14
第４章　鼻毛石鎌田遺跡 …… 15
　第１節　調査の方法 …… 15
　第２節　基本層序 …… 15
　第３節　鼻毛石鎌田Ⅱ遺跡の遺構と遺物 …… 18
　　第１項　調査の概要 …… 18
　　第２項　住居址 …… 18
　　第３項　土坑 …… 18
　　第４項　埋甕 …… 20
　　第５項　遺物包含層 …… 20
　第４節　鼻毛石鎌田Ⅲ遺跡の遺構と遺物 …… 32
　　第１項　調査の概要 …… 32
　　第２項　竪穴状遺構 …… 34
　　第３項　土坑 …… 34
　第５節　まとめ …… 45
第５章　自然科学分析 …… 46
　Ⅰ．鼻毛石鎌田遺跡の地質とテフラ …… 46
　Ⅱ．鼻毛石鎌田遺跡の植物珪酸体分析 …… 52

挿図目次

第1図　鼻毛石赤坂遺跡と周辺の遺跡…… 3
第2図　鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡・同Ⅱ遺跡遺構全体図…… 5
第3図　鼻毛石赤坂遺跡基本土層…… 7
第4図　第2・6・7・10・11・21号土坑…… 9
第5図　第1・3・4・5・12・13号土坑……11
第6図　第1～3号溝址……13
第7図　鼻毛石鎌田遺跡基本土層……15
第8図　鼻毛石鎌田Ⅱ遺跡全体図……16
第9図　鼻毛石鎌田Ⅱ遺跡遺構全体図……17
第10図　第1号住居址及び同出土遺物……19
第11図　第1号土坑及び同出土遺物……20
第12図　第1号埋甕及び同出土遺物……21
第13図　包含層出土土器①……23
第14図　包含層出土土器②……24
第15図　包含層出土土器③……26
第16図　包含層出土土器④……27
第17図　包含層出土土器⑤……29
第18図　包含層出土土製品……31
第19図　包含層出土石器……31
第20図　鼻毛石鎌田Ⅲ遺跡全体図……33
第21図　鼻毛石鎌田Ⅲ遺跡遺構全体図……35
第22図　第1号竪穴状遺構……37
第23図　第1～4号土坑……38
第24図　第5～9号土坑……39
第25図　第10～18号土坑……41
第26図　第19～23号土坑……43
第27図　第24・25号土坑……44
第28図　地点①の土層柱状図……50
第29図　地点②の土層柱状図……50
第30図　地点②のテフラ組成ダイヤグラム……51
第31図　地点①の植物珪酸体分析結果……56
第32図　地点②の植物珪酸体分析結果……57

挿表目次

第1表　第1号住居址出土石器観察表……18
第2表　第1号土坑出土石器観察表……20
第3表　包含層出土土製品観察表……30
第4表　包含層出土石器観察表……32
第5表　地点②の火山ガラス比分析ダイヤグラム…49
第6表　地点②の重鉱物組成ダイヤグラム……49
第7表　鼻毛石鎌田遺跡の植物珪酸体分析結果…55

写真図版目次

PL－1　1．A区完掘状況
　　2．B区完掘状況
PL－2　1．第2号土坑土層観察状況
　　2．第2号土坑完掘状況
　　3．第6号土坑土層観察状況
　　4．第6号土坑完掘状況
　　5．第7号土坑土層観察状況
　　6．第7号土坑完掘状況
　　7．第10号土坑土層観察状況
　　8．第10号土坑完掘状況
PL－3　1．第11号土坑土層観察状況
　　2．第11号土坑完掘状況
　　3．第21号土坑完掘状況
　　4．第3号土坑完掘状況
　　5．第4号土坑完掘状況
　　6．第5号土坑完掘状況

7．第13号土坑完掘状況
8．第１号土坑完掘状況
ＰＬ－４　１．第12号土坑土層観察状況
２．第12号土坑完掘状況
３．第１号溝完掘状況
４．第２・３号溝完掘状況
ＰＬ－５　１．第１号住居址完掘状況
２．第１号住居址土層観察状況
３．第１号住居址炉址完掘状況
４．第１号土坑完掘状況
５．第１号埋甕遺物出土状況
ＰＬ－６　１．遺物出土状況①
２．遺物出土状況②
３．遺物出土状況③
４．遺物出土状況④
５．遺物出土状況⑤
６．遺物出土状況⑥
７．遺物出土状況⑦
ＰＬ－７　第１号住居址出土遺物
第１号土坑出土遺物
包含層出土土器①
ＰＬ－８　第１号埋甕出土遺物
包含層出土土器②
ＰＬ－９　包含層出土土器③
ＰＬ－10　包含層出土土器④
ＰＬ－11　包含層出土土器⑤
ＰＬ－12　包含層出土土器⑥
ＰＬ－13　包含層出土土器⑦
包含層出土土製品
ＰＬ－14　包含層出土石器
ＰＬ－15　１．第１号竪穴状遺構完掘状況
２．第２号土坑土層観察状況
３．第２号土坑完掘状況
４．第３号土坑土層観察状況
５．第３号土坑完掘状況
６．第４号土坑土層観察状況
７．第４号土坑完掘状況
ＰＬ－16　１．第７号土坑土層観察状況
２．第７号土坑完掘状況
３．第16号土坑完掘状況
４．第21号土坑土層観察状況
５．第21号土坑完掘状況
ＰＬ－17　地割れ痕調査風景・同完掘状況
ＰＬ－18　植物珪酸体の顕微鏡写真①
ＰＬ－19　植物珪酸体の顕微鏡写真②

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯と経過

鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡・鼻毛石赤坂Ⅱ遺跡は、いずれも県道宮城前橋線緊急地方道路整備Ａ事業に伴って調査が行われたものである。平成14・15年度実施の事業予定地の内、試掘調査の可能な箇所を対象に、当村教育委員会立会のもと、群馬県教育委員会文化課による試掘調査が行われた(平成14年６月11日～14日)。その結果縄文時代の所産とみられる陥し穴等の遺構が検出され(鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡)、この結果を受けて、同年８月14日に群馬県教育委員会文化課・前橋土木事務所・村教育委員会の３者による協議を行い、遺構の検出された箇所を中心に記録保存を前提とした発掘調査を実施し、調査は村教育委員会が行うことで合意した。同年９月20日に前橋土木事務所長と宮城村長の間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結して事業に着手し、同年12月27日に事業を完了した。

残りの事業予定地についても前回の試掘調査と同様な体制により、平成15年２月７日及び同年３月18日～20日に試掘調査が行われた。２月に実施した試掘調査により溝址が検出されたため(鼻毛石赤坂Ⅱ遺跡)、３月に実施した試掘調査と併行して、群馬県教育委員会文化課・村教育委員会の合同調査を実施した。また上記２遺跡の整理調査は平成15年度に行うことで合意した。そして平成15年12月に前橋土木事務所長と宮城村長との間で、整理調査に関する委託契約を締結し、平成15年12月～平成16年３月にかけて整理調査を実施して、発掘調査報告書を刊行した。

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置

群馬県勢多郡宮城村は、群馬県の中央部に聳える赤城山南麓の中央に位置し、西～南西で大胡町と、東～南東で粕川村と、北で富士見村とそれぞれ接している。東西5.5km・南北18.0kmで総面積は48.15km²である。標高は、赤城火山の外輪山の一つである荒山山頂(1,571.9m)を最高点として急傾斜をもって南下する。三夜沢赤城神社の鎮座する標高550m付近を傾斜転換点として傾斜が緩やかになり、大字鼻毛石地内の宮城村役場付近で標高255.0m、大字大前田地内の最低点では標高180m程である。

宮城村の地形は、標高550m付近の傾斜転換点を境として、河川による浸食がさかんに行われて急傾斜をなす山腹部と、火砕流堆積面と火山麓扇状地により形成されて緩傾斜をなす山麓部とに大別される。火山麓扇状地を形成した河川としては、カルデラ内の小沼より流出して宮城村と粕川村の境界を南下する粕川(粕川扇状地)や、荒山下から流出する荒砥川(荒砥川扇状地)があり、大穴川や芳見沢川、神沢川等の小河川が開析谷を形成して、これらの河川に流れ込む。これらの扇状地の内、鼻毛石赤坂Ⅰ・Ⅱ遺跡及び鼻毛石鎌田Ⅱ・Ⅲ遺跡はともに荒砥川扇状地に立地し、荒砥川の支流である神沢川の右岸の台地上に占地する。

第２節　周辺の遺跡

本村では、相沢忠洋氏により発見された桙形遺跡の調査をはじめとして、群馬大学尾崎研究室による発掘調査や群馬県遺跡台帳作成に伴う分布調査、そして昭和62年度に行われた土地改良事業に伴う市之関前田遺跡の発掘調査を皮切りに、村内遺跡発掘調査事業がスタートし、現在までに多くの遺跡が次々と発見・調査されている。ここでは本遺跡周辺の歴史環境を構成する遺跡を概観したい(第１図

参照)。

【旧石器時代】

旧石器時代の遺跡としては、故相沢忠洋氏により発見され、学史的にも著名な桙形遺跡(5)をはじめとして、苗ヶ島大畑遺跡(6)、市之関吉ヶ沢遺跡(9)、柏倉芳見沢遺跡(8)、市之関前田遺跡(7)等がある。いずれも旧石器時代最終末の細石器文化の遺跡である。

【縄文時代】

本村では縄文時代の遺跡が最も多く、生活域として、また陥し穴猟を中心とした狩猟域として、本村が活発に利用されていたことが窺える。以下時期を追って代表的な遺跡を概観してみたい。

草創期の遺跡としては、爪形文土器や柳葉形の槍先形尖頭器が出土している市之関前田遺跡(7)がある。

早期の代表的な遺跡としては、苗ヶ島大畑遺跡(6)や柏倉落合遺跡(8)が挙げられる。前者は、条痕文系土器期の住居址や炉穴・袋状土坑・集石土坑・陥し穴等が検出され、田戸下層式土器等の沈線文系土器や押型文土器、鵜ガ島台式～茅山上層式の条痕文系土器が多量に出土している。また後者では、包含層遺物ながら鵜ガ島台式土器等の条痕文系土器が多量に出土している。その他市之関前田遺跡(7)や苗ヶ島白山遺跡(11)・同II遺跡(12)等で沈線文～条痕文期の土器が少量ながら出土している。

前期前葉の二ツ木式期では柏倉芳見沢遺跡(8)等があり、該期の住居址が検出されている。後続する関山式期では、村指定史跡で学史上著名な市之関遺跡(指定名称：市之関縄文前期遺跡/13)や、その南方に位置する市之関前田遺跡(7)等があり、それぞれ住居址等が検出されている。黒浜・有尾式期では、該期の住居址や土坑等が検出された柏倉大沢遺跡(14)がある。

中期の遺跡としては、中期前半～中葉の環状集落である鼻毛石中山遺跡(16)がある。翡翠製の大珠が検出された中央広場を中心として、土坑群が環状に配置され、その外側に住居址が巡る構成をとる。また遺跡の南半部において、盛土遺構も確認されている。中期後葉の遺跡としては市之関前田遺跡(7)があり、加曽利EIII～EIV式期の住居址が24軒検出され、拠点的な集落の一つと考えられる。その他大前田上十二遺跡(17)からも中期の土坑等が検出されている。

後期になると遺跡数は減少するが、馬場東矢次遺跡(18)より、包含層遺物ながら堀之内式～加曽利B式土器の遺物が多量に出土している。また、市之関前田遺跡(7)や鼻毛石中山遺跡(16)からも後期の遺物が少量出土している。後期後半～晩期にかけての遺跡は発見されていない。

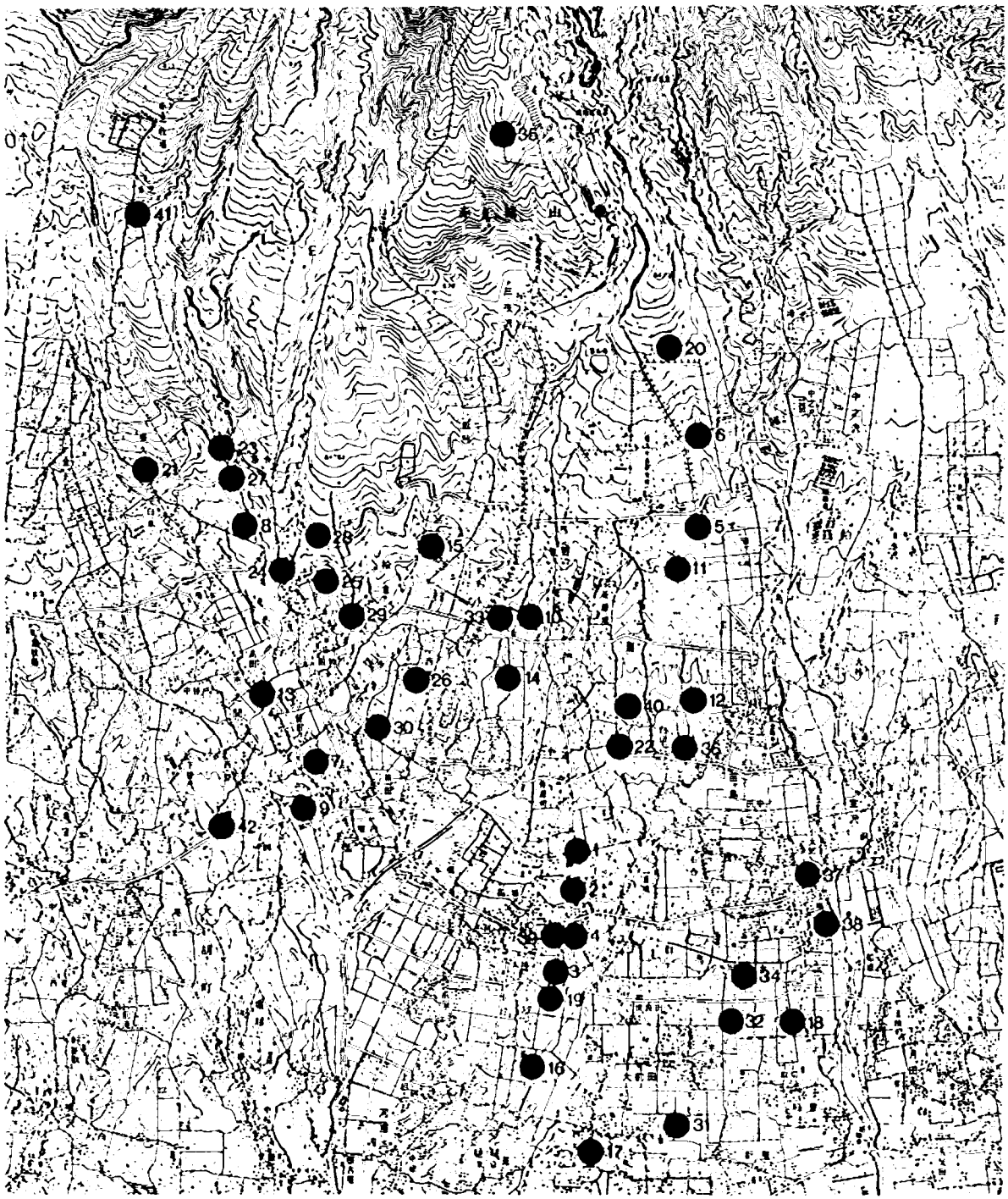
なお縄文時代の所産と見られる陥し穴は村内各地で検出されており、上述の苗ヶ島大畑遺跡(6)を筆頭に、苗ヶ島大畑II遺跡(20)・苗ヶ島白山II遺跡(12)・柏倉遺跡群(8)・柏倉相吉遺跡(23)・柏倉下石倉遺跡(24)・柏倉大沢遺跡(14)・市之関前田遺跡(7)・市之関吉ヶ沢遺跡(9)・鼻毛石弥源司遺跡(22)・鼻毛石鎌田I遺跡(19)・鼻毛石中山遺跡(16)等多くの遺跡で検出されている。

【弥生時代】

弥生時代の遺跡は発見されておらず、柏倉芳見沢遺跡(8)で樽式土器片が検出されたのみである。

【古墳時代】

古墳時代に入っても遺跡数はあまり増加しないが、中期の祭祀遺跡であり、群馬県指定史跡である槙石遺跡(35)では、手捏ね土器や滑石製模造品等の祭祀遺物が豊富に出土している。また古墳として



1：鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡　2：鼻毛石赤坂Ⅱ遺跡　3：鼻毛石鎌田Ⅱ遺跡　4：鼻毛石鎌田Ⅲ遺跡
5：桝形遺跡　6：苗ヶ島大畑遺跡　7：市之関前田遺跡　8：柏倉遺跡群(芳見沢・落合・掘久保)
9：市之関吉ヶ沢遺跡　10：柏倉大沢Ⅱ遺跡　11：苗ヶ島白山遺跡　12：苗ヶ島白山Ⅱ遺跡
13：市之関遺跡　14：柏倉大沢遺跡　15：柏倉殿林遺跡　16：鼻毛石中山遺跡
17：大前田上十二遺跡　18：馬場東矢次遺跡　19：鼻毛石鎌田Ⅰ遺跡　20：苗ヶ島大畑Ⅱ遺跡
21：十文字遺跡　22：鼻毛石弥源司遺跡　23：柏倉相吉遺跡　24：柏倉下石倉遺跡
25：柏倉新井橋遺跡　26：柏倉西房遺跡　27：№2227遺跡　28：№2228遺跡　29：№2229遺跡
30：№2230遺跡　31：№2236遺跡　32：№2237遺跡　33：№2239遺跡　34：№2250遺跡
35：槙石遺跡　36：白山古墳　37：新山Ⅰ・Ⅱ号墳　38：古屋敷古墳　39：一本木土師遺跡
40：苗ヶ島片並木遺跡　41：№2238遺跡　42：№2251遺跡

第1図　鼻毛石赤坂遺跡と周辺の遺跡

は、白山古墳(36)・新山Ⅰ・Ⅱ号墳(37)・古屋敷古墳(38)があり、いずれも小古墳ではあるが、白山古墳では佐波理鋺や和同開珎・蕨手太刀等の特異な遺物が出土している。

【奈良・平安時代】

奈良・平安時代になると遺跡数は若干ながら増加し、再び生活域・生産域として本村が利用されるようになる。集落遺跡としては、市之関(柏倉)十文字遺跡(21)や市之関前田遺跡(7)・苗ヶ島片並木遺跡(40)等があり、いずれも9～10世紀を中心とした集落である。また市之関(柏倉)十文字遺跡は、付近で小金銅仏が表面採集されているなど、その集落の性格に特異性が見られる。その他一本木土師遺跡(39)でも住居址1軒が検出されている。生産址遺跡としては、県内の生産址遺跡の先駆的調査ともなった、村指定史跡の苗ヶ島片並木遺跡(指定名称：片並木製鉄跡/40)があり、製鉄炉や住居址等が検出されている。また柏倉芳見沢遺跡(8)でも炭窯2基が検出されている。

【中近世】

中近世の遺跡としては市之関前田遺跡(7)があげられ、中近世の所産と見られる堀跡・溝跡や近世の掘立柱建物跡等が検出されている。また村内数箇所で城跡・砦跡等が発見されている。

引用・参考文献

群馬県教育委員会　1973　『群馬県遺跡地図』
群馬県教育委員会　1991　『柏倉大沢遺跡』
群馬県史編さん委員会　1986　『群馬県史　資料編2　原始古代2』
群馬県史編さん委員会　1988　『群馬県史　資料編1　原始古代1』
群馬県史編さん委員会　1990　『群馬県史　通史編1　原始古代1』
群馬県埋蔵文化財調査事業団　1992　『年報11』
群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993　『年報12』
宮城村誌編集委員会　1966　『宮城村の古墳』
宮城村誌編集委員会　1969　『片並木遺跡―赤城山南面の製鉄遺跡―』
宮城村　1973　『宮城村誌』
宮城村教育委員会　1954　『市之関遺跡』
宮城村教育委員会　1981　『桝形遺跡調査報告書』
宮城村教育委員会　1991　『市之関前田遺跡Ⅰ』
宮城村教育委員会　1992　『市之関前田遺跡Ⅲ』
宮城村教育委員会　1994　『苗ヶ島大畑遺跡』
宮城村教育委員会　1996　『鼻毛石中山遺跡』

第2図　鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡・同Ⅱ遺跡遺構全体図

第３章　鼻毛石赤坂遺跡

第１節　調査の方法

①鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡

調査は、まず重機を使用して表土除去を行い、その後ジョレンがけにより遺構検出・プランの確認につとめ、土層観察用のベルトを設定して各遺構の調査を行った。なお縄文時代以降の調査終了後、旧石器時代の文化層の有無を確認するため、試掘坑を設定して遺物の検出に努めたものの、該期の遺物は検出されなかった(第２図)。

遺跡の記録図面は、遺構の実測図はＳ＝１：20、調査区の全体図はＳ＝１：100で作成した。なお測量にあたっては国家座標Ⅸ系に準拠した10m×10mのグリッドを設定して行ったが、グリッド名は付さなかった。遺構の記録写真は35mmのモノクロ・カラースライドの２種類のフィルムを用いて逐次撮影を行った。

②鼻毛石赤坂Ⅱ遺跡

調査は重機を使用して表土除去を行い、ジョレンがけによる遺構検出・プランの確認後、各遺構の調査を行った。遺跡の記録図面はＳ＝１：20ないし１：30で作成したが、測量にはグリッドを設定せず、任意の基準杭を設置して行った。遺構の記録写真は35mmのモノクロ・カラースライドの２種類のフィルムを用いて撮影を行った。

第２節　基本層序

鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡Ｂ地点にて基本土層を確認した。試掘調査時の所見とあわせて作成した基本層序を第３図に示す。

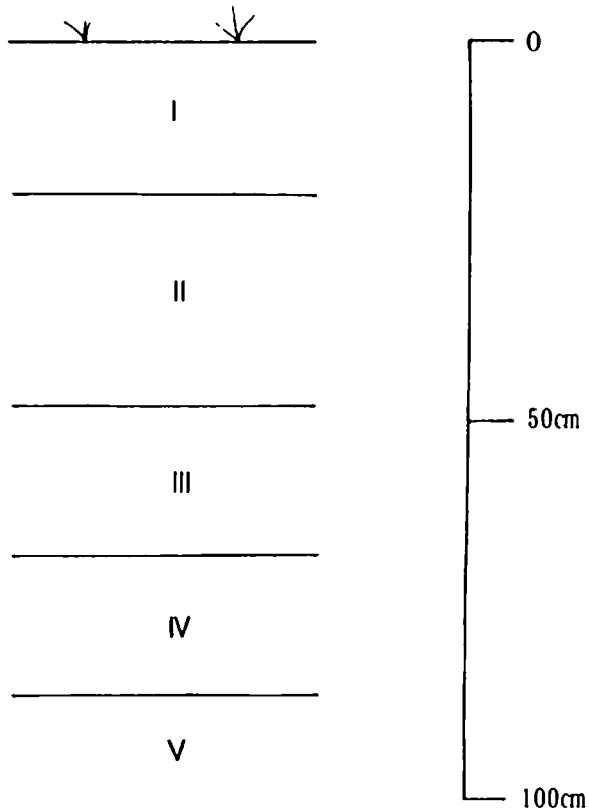
Ⅰ層　褐灰色土層で、耕作土である。

Ⅱ層　黒褐色土層で、白色軽石・黄色軽石粒(浅間Ｃ軽石)を多量に含む。

Ⅲ層　いわゆる淡色黒ボク土である。

Ⅳ層　いわゆる黒ボク土である。下層にゆくにつれて色調がやや明るくなる。

Ⅴ層　橙褐色ローム層で、少量の黄色軽石粒と多量の白色軽石粒が混在する。



第３図　鼻毛石赤坂遺跡基本土層

第３節　鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡の遺構と遺物

本遺跡の調査区は南北２地点に分かれており、便宜上北側の調査区をＡ区、南側の調査区をＢ区とする(第２図)。Ａ区－Ｂ区間は直線距離にして180m程離れている。検出された遺構はＡ・Ｂ両区で土坑21基、ピット４基である。なおＢ区北側は耕作による攪乱が著しい。

第１項　縄文時代の遺構と遺物

本遺跡では遺物は検出されなかったものの、その形状や覆土の観察より縄文時代の所産と見られる遺構が検出されている。土坑はその形状から陥し穴状土坑と円形土坑とに分けられる。

Ａ　陥し穴状土坑

第２号土坑(第４図)

位　置－Ａ区北東隅に位置し、第３・４号土坑に隣接する。**重複関係**－なし。**遺存状態**－良好。　**覆　土**－暗褐色土を基調として自然堆積を示す。**規模・形状**－主軸方向はほぼ南北方向にとる。長軸140cm・短軸101cmを測り、平面形は開口部が楕円形、底面が隅丸長方形を呈する。深さは103cmを測り、底面は平坦である。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は箱状を呈する。

第６号土坑(第４図)

位　置－Ｂ区中央部に位置し、第15号土坑に隣接する。また南東方向約12mのところに第７号土坑がある。**重複関係**－なし。**遺存状態**－良好。**覆　土**－暗褐色土を基調として自然堆積を示すが、第10・11号土坑と同様に、非常に締まりが強く硬質である。**規模・形状**－主軸方向は北西－南東方向にとり、長軸168cm・短軸129cmを測る。開口部は楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。深さは98cmを測り、底面は中央部に向かって若干くぼむ。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は箱状を呈する。

第７号土坑(第４図)

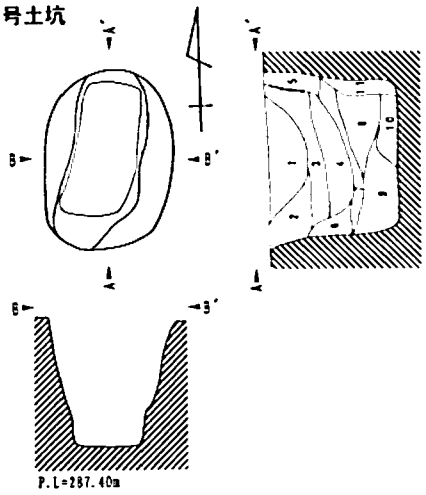
位　置－Ｂ区中央部東側調査区壁際に位置する。北西方向約12mのところに第６号土坑がある。**重複関係**－なし。**遺存状態**－南西壁を一部攪乱により切られる。また東壁上面は崩落している。**覆　土**－暗褐色土を基調とし、自然堆積を示す。**規模・形状**－主軸方向は北東－南西方向にとる。上述のように東壁上面は崩落しているが、長軸はおよそ155cm・短軸は106cmを測り、平面形は開口部・底面とも隅丸長方形を呈する。深さは116cmを測り、底面は平坦である。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は箱状を呈する。

Ｂ　円形土坑

第10号土坑(第４図)

位　置－Ｂ区北東部に位置する。北西方向約11mのところに第11号土坑がある。**重複関係**－なし。**遺存状態**－耕作による攪乱が著しく、遺存状態は悪い。**覆　土**－暗褐色土を基調として自然堆積を示すが、第６・11号土坑と同様に、非常に締まりが強く硬質である。**規模・形状**－攪乱によりその規模や形状は判然としないが、長軸約110cm・短軸94cmを測り、平面形は円形を呈すると考えられる。底面中央には浅い楕円形のピットが掘り込まれ、このピットに向かって底面は若干くぼむ。深さは89cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は箱状を呈する。

第2号土坑



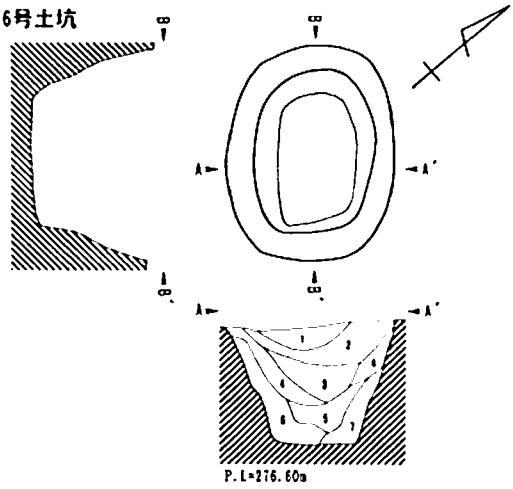
第2号土坑土層説明(A・A')

1　黒褐色土：締まり・粘性あり。やや多量の褐色土ブロックを含む。
2　暗褐色土：締まり・粘性あり。少量のローム粒・微量のロームブロック・多量の褐色土ブロックを含む。
3　暗褐色土：締まり・粘性あり。やや多量のローム粒・微量のロームブロック・やや多量の褐色土ブロックを含む。
4　暗褐色土：締まり・粘性あり。多量のローム粒・少量のロームブロックを含む。
5　暗褐色土：締まり・粘性あり。ごく多量のローム粒・微量のロームブロックを含む。
6　暗褐色土：締まり・粘性あり。ごく多量のローム粒・やや多量のロームブロックを含む。
7　暗褐色土：締まり・粘性あり。少量のローム粒・やや多量のロームブロックを含む。
8　暗褐色土：締まり・粘性あり。ごく多量のローム粒・多量のロームブロックを含む。
9　暗褐色土：締まり・粘性あり。ロームブロック主体。
10　暗褐色土：締まり・粘性あり。多量のローム粒・微量のロームブロックを含む。
11　暗褐色土：締まり・粘性あり。ごく多量のローム粒・少量のロームブロックを含む。

第7号土坑土層説明(A・A')

1　黒褐色土：締まり・粘性あり。やや多量のローム粒を含む。
2　暗褐色土：締まり・粘性あり。少量のローム粒・微量のロームブロック・多量の褐色土ブロックを含む。
3　暗褐色土：締まり・粘性あり。ごく多量のローム粒・少量のロームブロックを含む。
4　暗褐色土：締まり・粘性あり。少量のローム粒を含む。
5　暗褐色土：締まり・粘性あり。多量のローム粒・やや多量のロームブロックを含む。
6　暗褐色土：締まり・粘性あり。多量のローム粒を含む。
7　暗褐色土：締まり・粘性あり。やや多量のローム粒及びロームブロックを含む。
8　暗褐色土：締まり・粘性あり。やや多量のローム粒・微量のロームブロックを含む。
9　暗褐色土：締まり・粘性あり。ロームブロック主体。
10　暗褐色土：締まり・粘性あり。やや多量のローム粒を含む。
11　暗褐色土：締まり・粘性あり。ごく多量のローム粒を含む。
12　暗褐色土：締まり・粘性あり。多量のローム粒・微量のロームブロックを含む。
13　暗褐色土：締まり・粘性あり。多量のローム粒・ごく多量のロームブロックを含む。
14　暗褐色土：締まり強。粘性あり。やや多量のローム粒を含む。

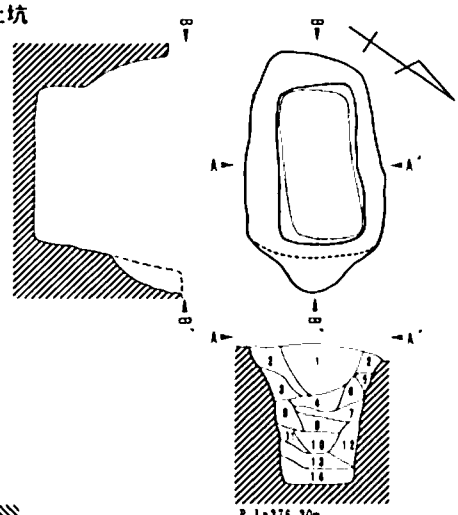
第6号土坑



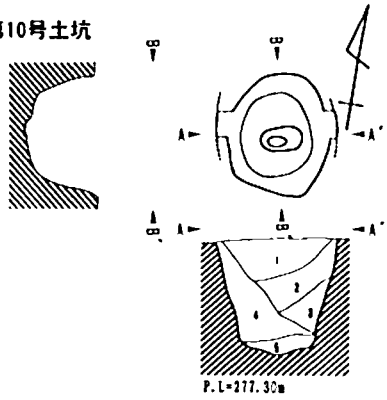
第6号土坑土層説明(A・A')

1　暗褐色土：締まり強。粘性あり。少量の褐色土ブロックを含む。
2　暗褐色土：締まり強。粘性あり。やや多量の褐色土ブロックを含む。
3　暗褐色土：締まり強。粘性あり。多量の褐色土ブロックを含む。
4　暗褐色土：締まり強。粘性あり。少量のローム粒及びロームブロック・やや多量の褐色土ブロックを含む。
5　暗褐色土：締まり強。粘性あり。多量の褐色土ブロックを含む。
6　暗褐色土：締まり強。粘性あり。ロームブロック主体。
7　暗褐色土：締まり強。粘性あり。やや多量のロームブロックを含む。

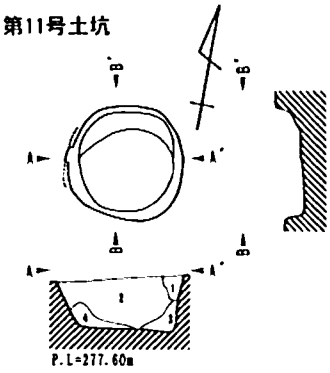
第7号土坑



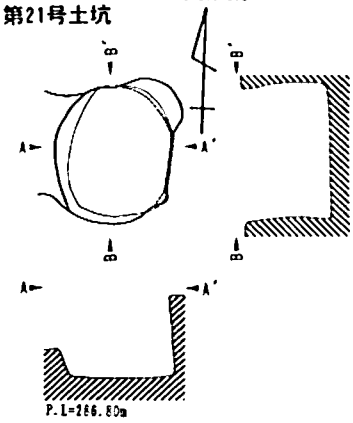
第10号土坑



第11号土坑



第21号土坑



第10号土坑土層説明(A・A')

1　暗褐色土：締まり強。粘性あり。微量の褐色土ブロックを含む。
2　暗褐色土：締まり強。粘性あり。少量のロームブロック及び褐色土ブロックを含む。
3　暗褐色土：締まり強。粘性あり。やや多量の褐色土ブロックを含む。
4　暗褐色土：締まり強。粘性あり。褐色土ブロック主体。
5　暗褐色土：締まり強。粘性あり。多量のロームブロック及び褐色土ブロックを含む。

第11号土坑土層説明(A・A')

1　褐色土：締まり強。粘性あり。多量のローム粒を含む。
2　暗褐色土：締まり強。粘性あり。少量のローム粒及び褐色土ブロックを含む。
3　暗褐色土：締まり強。粘性あり。多量のローム粒及びロームブロックを含む。
4　暗褐色土：締まり強。粘性あり。ロームブロック主体。

0　2m

第4図　第2・6・7・10・11・21号土坑

第11号土坑(第4図)

位　置―B区北端部の中央に位置する。南東方向約11mのところに第10号土坑がある。**重複関係**―なし。**遺存状態**―耕作による攪乱が著しく、遺存状態は悪い。**覆　土**―暗褐色土を基調として自然堆積を示すが、第6・10号土坑と同様に、非常に締まりが強く硬質である。**規模・形状**―攪乱によりその規模や形状は判然としないが、長軸約90cm・短軸80cmを測り、平面形は円形を呈すると考えられる。北側に幅狭の段を持ち、底面は南側に向かって若干傾斜している。深さは46cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は箱状を呈する。

第21号土坑(第4図)

位　置―A区中央部に位置し、第1号土坑と重複するが、その切り合い関係は不明である。**遺存状態**―第1号土坑と切り合い、崩落もみられるが、遺存状態は概ね良好である。**覆　土**―暗褐色土を基調とする。**規模・形状**―長軸107cm・短軸約90cmを測り、南東壁及び北東壁は崩落しているものの平面形は円形を呈すると考えられる。深さは69cmを測り、底面は南側に向かって若干傾斜している。壁面は直立して立ち上がり、部分的にオーバーハングしており、断面形は若干袋状を呈する。

第2項　近現代及び時期不明の遺構と遺物

A　長方形土坑

本遺跡では長方形の平面形と箱状の断面形を持ち、長軸方向は東西方向にとる土坑が4基検出されている。A区で3基、B区で1基である。地元の方々から話を伺ったところ、作物を貯蔵するためにこのような形状の土坑を多く掘ったとされ、終戦後に多く掘ったという(地元では「イモガマ」と呼ばれる)。また覆土も表土と同様な褐灰色土を基調としているため、ここではこのような形状・覆土を持つ土坑を近現代の貯蔵穴として捉えた。なお遺構確認面をⅣ層の下層にしたため本来は検出された以上の数の長方形土坑が存在していた可能性も考えられる。

第3号土坑(第5図)

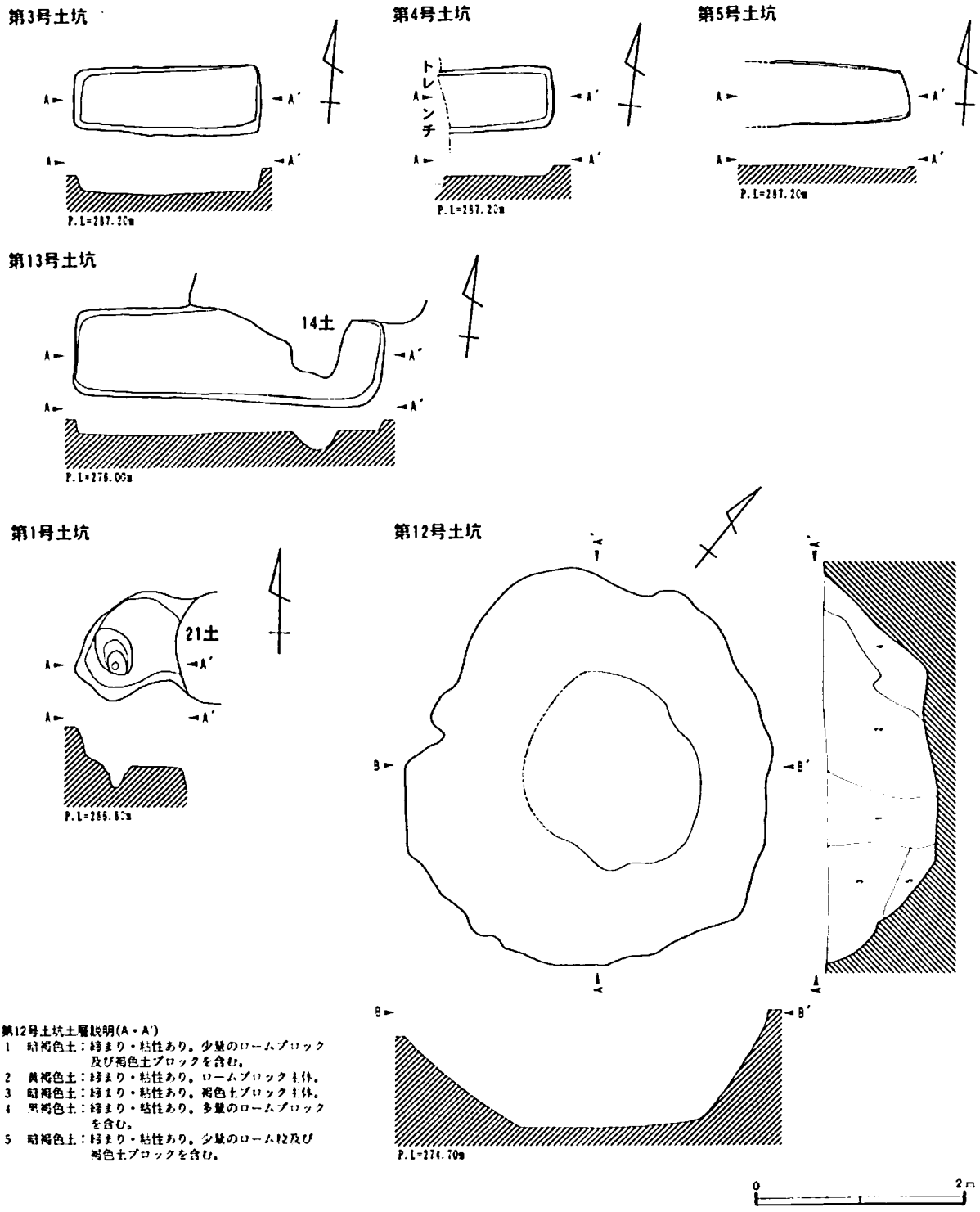
位　置―A区北東部に位置し、第4号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好。**覆　土**―褐灰色土を基調とする。**規模・形状**―東西方向に長軸をとり、長軸180cm・短軸66cmを測り、平面形は長方形を呈する。深さは25cmを測り、底面は平坦である。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は箱状を呈する。

第4号土坑(第5図)

位　置―A区北側中央部に位置し、第3・5号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―西側をトレンチに切られる。**覆　土**―褐灰色土を基調とする。**規模・形状**―東西方向に長軸をとり、長軸規模は不明だが第3号土坑と同様180cmほどと考えられる。短軸は61cmを測り、平面形は長方形を呈すると考えられる。深さは13cmを測り、底面は西側に向かって若干傾斜している。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は箱状を呈する。

第5号土坑(第5図)

位　置―A区北西部に位置し、第4号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―西側を切られる。**覆　土**―褐灰色土を基調とする。**規模・形状**―東西方向に長軸をとり、長軸規模は不明だが第3号土



第5図　第1・3・4・5・12・13号土坑

坑と同様180cmほどと考えられる。短軸は57cmを測り、平面形は長方形を呈すると考えられる。深さは3cmを測り、底面は東側に向かって若干傾斜している。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は箱状を呈する。

第13号土坑(第５図)

位　置―Ｂ区中央部西壁際に位置する。**重複関係**―第14号土坑と重複するが切り合い関係は不明である。**遺存状態**―良好。**覆　土**―褐灰色土を基調とする。**規模・形状**―第３～５号土坑と同様に東西方向に長軸をとるが、Ａ区の長方形土坑に比べて規模は大きく、長軸293cm・短軸は87cmを測り、平面形は長方形を呈する。深さは21cmを測り、底面は西側に向かって若干傾斜している。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は箱状を呈する。

Ｂ　倒木痕

倒木痕と見られる落ち込みはＢ区を中心として多く検出されている。第１・８・９・12・14～20号土坑がこれに該当する。またピットとしたものも植物の根によるものと考えられる。本報告ではこれらのうち第１・12号土坑を取り上げる。

第１号土坑(第５図)

位　置―Ａ区中央部に位置し、第21号土坑と重複するものの、切り合い関係は不明である。**規模・形状**―長軸方向は不明だが、短軸87cm・深さ42cmを測り、平面形・断面形とも不整形を呈する。底面には凹凸がみられる。

第12号土坑(第５図)

位　置―Ｂ区南西部に位置し、第17・19号土坑に隣接する。**規模・形状**―長軸373cm・短軸345cmを測り、平面形は不整円形を呈する。深さは110cmほどを測り、底面には凹凸がみられる。断面形は不整形を呈する。

第４節　鼻毛石赤坂Ⅱ遺跡の遺構と遺物

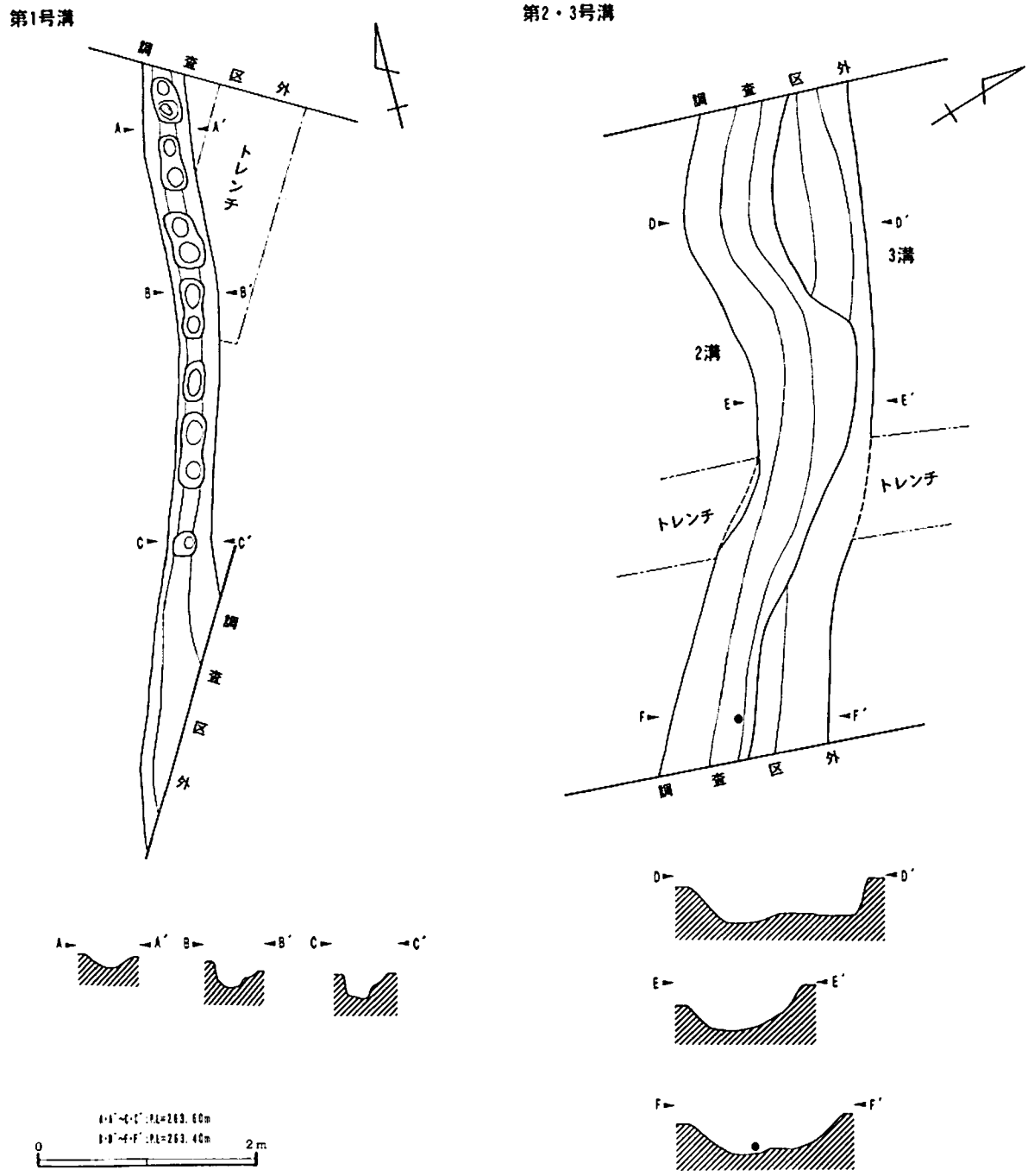
本遺跡は既存道路をはさんで調査区が東西２地点に分かれており、便宜上東側の調査区をＡ区、西側の調査区をＢ区とする(第２図)。本遺跡で検出された遺構は溝址３条である。Ａ区で１条、Ｂ区で２条検出されている。Ⅱ層上面を遺構確認面として調査を行った。

第１号溝(第６図)

位　置―Ａ区東側に位置し、南北方向に走向するが、調査区中央部にて若干西にふれる。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好。**覆　土**―暗灰色土を基調とし、下層には礫混じりの砂層が堆積している。**規模・形状**―幅は37～56cm、深さは11～22cmを測り、断面形は逆台形を呈する。底面の標高は北から南に向かって低くなる。なお底面には溝を掘削する際の工具痕と見られるピットが掘り込まれている。**遺　物**―北端部底面近くにて自然礫１点が検出された。

第２号溝(第６図)

位　置―Ｂ区中央部に位置する。**重複関係**―第３号溝と重複し、調査時の所見ではこれを切っていると考えられた。**遺存状態**―良好。**覆　土**―暗灰色土を基調とし、下層には礫混じりの砂層が堆積している。**規模・形状**―蛇行しながら東西方向に走向する。溝上面の幅は現状で60～98cmを測るが、100～120cmほどであったと推測される。深さは26～33cmを測り、断面形は「Ｕ」字状を呈する。底面の標高は西より東に向かって低くなる。**遺　物**―溝東側下層にて、酸化焔焼成の土器の口縁部片１点が検出さ



第6図　第1～3号溝址

れた。備　考―本溝址は自然流路と考えられる。

第3号溝(第6図)

位　置―B区中央部に位置する。重複関係―第2号溝と重複し、これに切られていると考えられる。遺存状態―良好。覆　土―暗灰色土を基調とし、下層には礫混じりの砂層が堆積している。規模・形状―東西方向に走向する。溝上面の幅は不明だが100cmほどであったと推測される。深さは約30cmほど

で、断面形は「U」字状を呈する。遺　物ーなし。備　考ー第2号溝と同様に本溝址も自然流路と考えられる。

第5節　まとめ

鼻毛石赤坂I遺跡では縄文時代の所産とみられる陥し穴状土坑3基と円形土坑3基が検出されている。本遺跡で検出されたこれらの土坑の特徴を列挙すると、陥し穴状土坑は、①開口部の平面形は楕円形ないし隅丸方形を呈し、②底面の平面形はいずれも隅丸長方形を呈する。③いずれの陥し穴状土坑も底面にはピットはみられない。円形土坑は、①規模約1m、②深さ45～90cmほどで、③いずれの平面形も円形を呈する。第21号土坑は部分的に断面袋状を呈する。また第10号土坑の底面には楕円形の浅い掘り込みが見られる。なお円形土坑の機能・用途は不明である。

これらの土坑の覆土は大きく2種類に分けられ、①締まりがあるもの(第2・7・21号土坑)と②締まりが強く硬質のもの(第6・10・11号土坑)とに分けられる。また色調はいずれも暗褐色を基調とするが、②の覆土の色調は①の覆土の色調に比べて若干明るい。これらのような締まりや色調等の特徴は、①が基本土層IV層上・中位のものに、②が同IV層下位のものにそれぞれ近似することから、これらの覆土の相違は時期差と考えたい。このような仮定の下に立てば、本遺跡は縄文時代にも複数次の利用が想定され、活発にこの場所を利用していたことが伺える。また周辺地域では生活域の存在も推測されよう。

鼻毛石赤坂II遺跡では3条の溝址が検出された。第2・3号溝は自然流路と考えられるが、第1号溝については底面にみられる工具痕から人為的に掘り込まれたものと考えられる。その所属時期についてであるが、第1～3号溝はいずれも浅間Bテフラ(As-B)ブロックを下層に含むI層の下位にて検出され、II層以下を掘り込んでつくられていた。しかしこのテフラもプライマリーな状態ではなく二次的な堆積と考えられ、所属時期は古代より新しい時期の可能性もあるため、ここでは古代～中世の所産と捉えておきたい。周辺地域の遺跡としては一本木土師遺跡で奈良時代の住居址1件が検出されているのみで、本地域の古代以降の様相は判然としないのが現状である。

今回の調査では検出された遺構数や遺物量も極めて少なく不明な点も多いものの、本地域における縄文時代及び古代～中世における本地域の様子の一端を垣間見ることができた。今後周辺地域の調査が進展してゆくにつれて、この地域の様相も少しずつ明らかになってゆくと考えられる。

第４章　鼻毛石鎌田遺跡

第１節　調査の方法

調査にあたっては、国家座標Ⅸ系に準拠した５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。グリッド名は、各遺跡毎に、南北方向ではAa・Ab～At・Ba・Bb～Bt・Ca…のように大文字アルファベット＋小文字アルファベットを組み合わせて設定し、東西方向では１・２・３…のように算用数字を用いて設定した。そして北西コーナーの杭をもって呼称した。従ってグリッド名は（大文字アルファベット＋小文字アルファベット）－（Ｙ軸状の算用数字）、Ar－３のように表現した。このように、それぞれの調査区に対して同様なグリッドを設定したため、鼻毛石鎌田Ⅱ遺跡のAq－１と鼻毛石鎌田Ⅲ遺跡のAq－１が存在することとなる。

調査は、まず重機を使用して表土除去を行い、その後ジョレンがけにより遺構検出・プランの確認につとめ、土層観察用のベルトを設定して各遺構の調査を行った。

遺跡の記録図面は、遺構の実測図はＳ＝１：20を基本とし、必要に応じてＳ＝１：10の詳細図を作成した。また、調査区の全体図はＳ＝１：40で作成した。

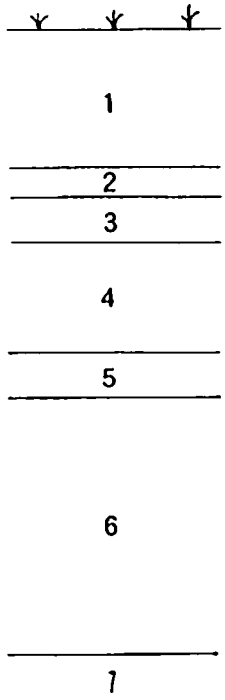
遺構の記録写真は、35㎜のモノクロ及びカラースライドの２種類のフィルムを用いて、逐次撮影を行った。

なお各調査区は発掘調査時には名前を付さなかったが、便宜上の理由から、鼻毛石鎌田Ⅱ遺跡については北からＡ区・Ｂ区・Ｃ区、鼻毛石鎌田Ⅲ遺跡についてはａ区・ｂ区・ｃ区と調査区名を付した（第８・20図参照）。

また本遺跡の性格やその内容をより具体化させることを目的として、鼻毛石鎌田Ⅲ遺跡においてテフラ組成分析及び植物珪酸体分析を行った。なお分析対象地点は、ａ区Bm-18グリッド内の東壁（地点①）及びｂ区Ce-９グリッド内の西壁（地点②）である。分析結果報告は第５章に掲載した。

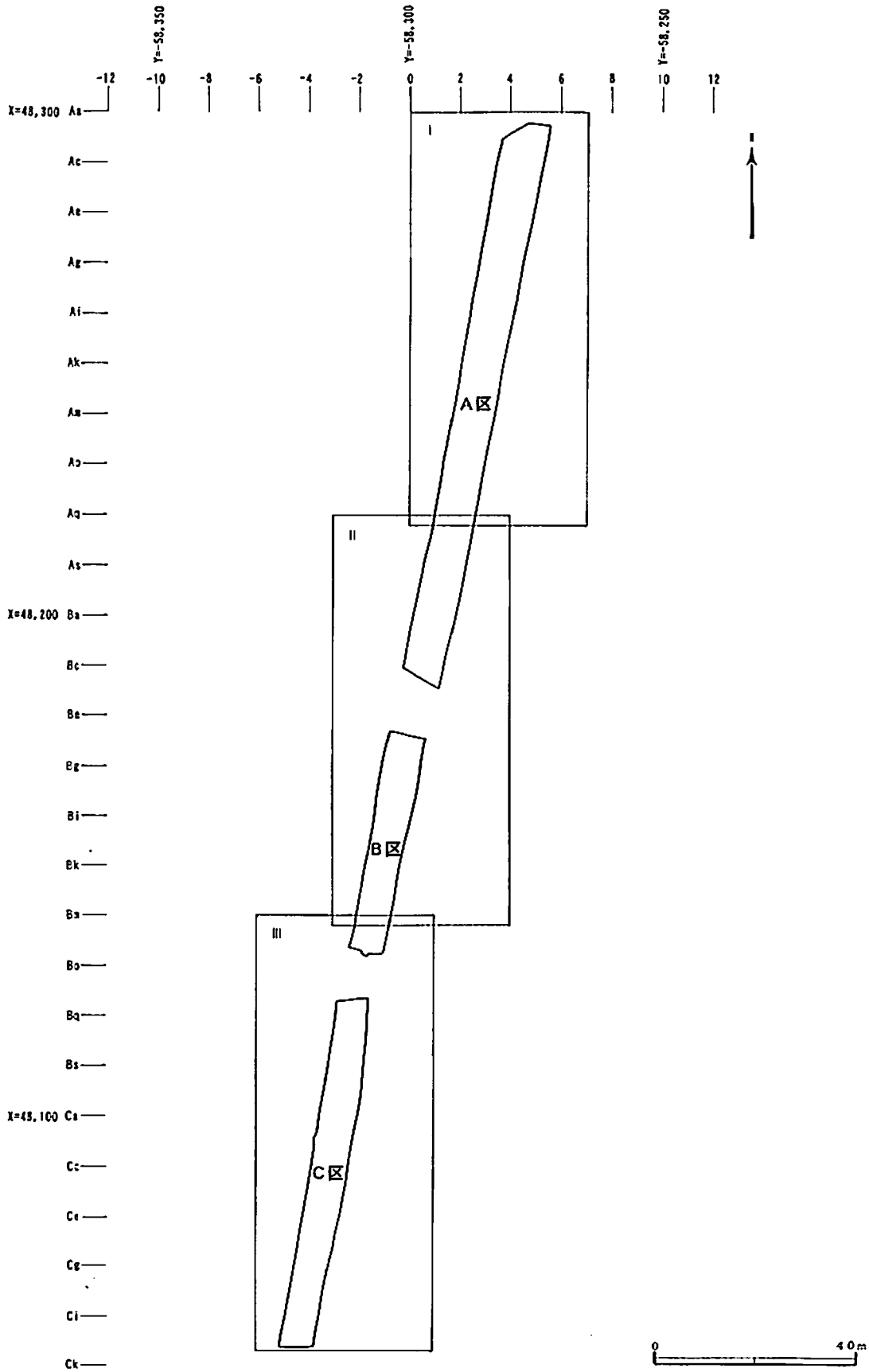
第２節　基本層序

鼻毛石鎌田Ⅲ遺跡調査区内の地点②の土層柱状図を基に、㈱古環境研究所による自然科学分析を参考にして作成した、本遺跡の基本層序を第７図に示す。鼻毛石鎌田遺跡において検出されたのは縄文時代以降の遺構・遺物であるため、ここではローム層より上位の層序について記すことにする。詳細については第５章を参照されたい。

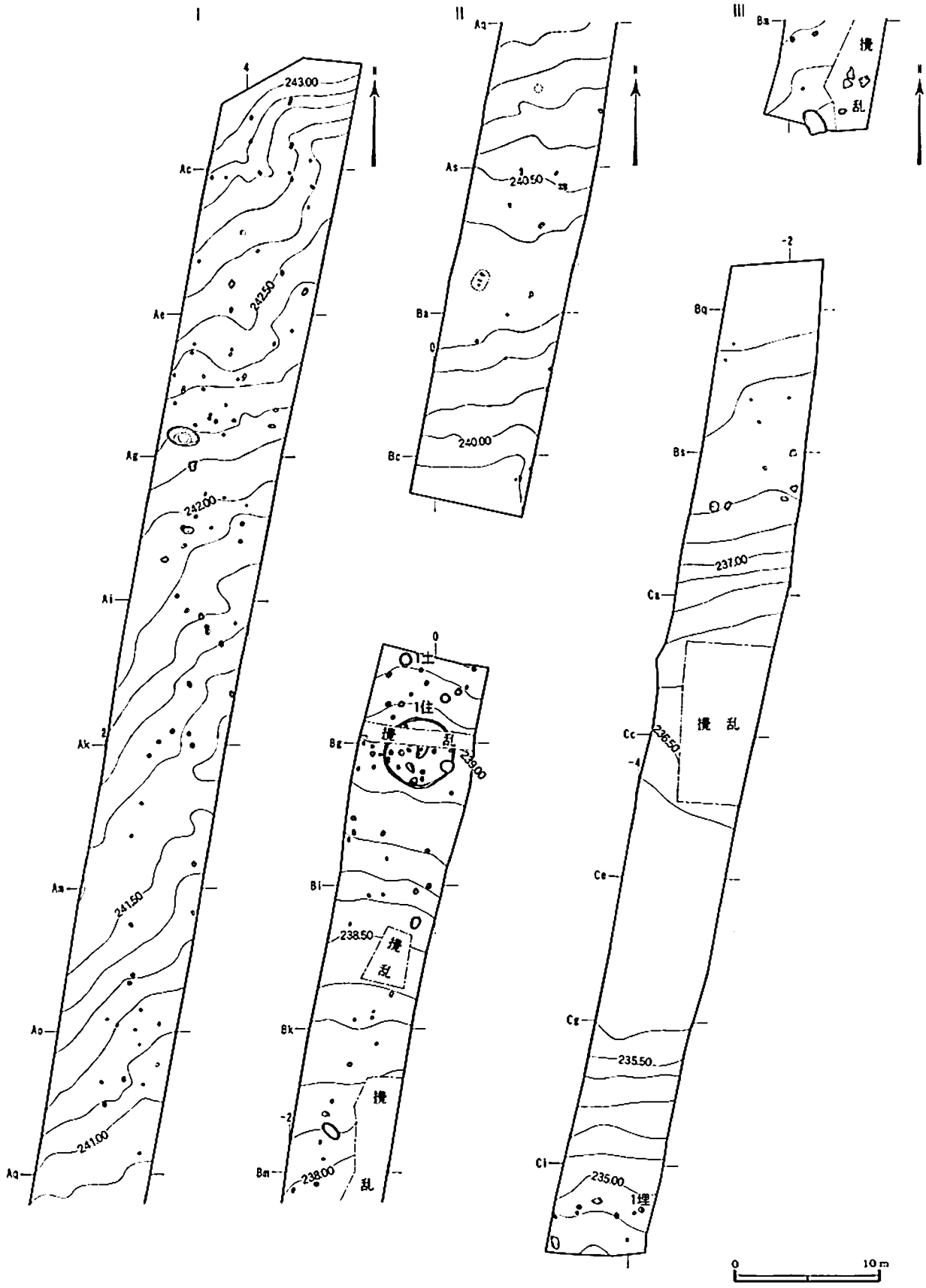


１層　暗褐色土層。いわゆる表土である。
２層　暗褐色土層。浅間Ｂテフラ(As-B)を含む。
３層　黒褐色土層。榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)を含む。
４層　黒褐色土層。浅間Ｃ軽石(As-C)を含む。
５層　褐色土層。いわゆる淡色黒ボク土である。
６層　暗褐色土層。いわゆる黒ボク土である。
７層　ローム層。

第７図　鼻毛石鎌田遺跡基本土層



第８図　鼻毛石鎌田Ⅱ遺跡全体図



第9図　鼻毛石鎌田B遺構全体図

第３節　鼻毛石鎌田Ⅱ遺跡の遺構と遺物

第１項　調査の概要

今回の調査の結果、縄文時代中期の住居址１軒・土坑１基・埋甕１基、縄文時代早期～後期の遺物包含層が検出された。住居址と土坑はいずれもＢ区北端部の標高239m前後の台地上に、また埋甕はＣ区南端部の標高235mほどの台地上に、それぞれ単独で占地している。また遺物包含層はＡ区～Ｃ区にかけて検出されているものの、Ａ区南部～Ｂ区及びＣ区南部に集中している傾向が窺え、主体となる時期は中期後半である。なお旧石器時代及び弥生時代以降の遺構や遺物は検出されていない。

第２項　住 居 址

第１号住居址(第10図)

位　置―Ｂ区北側、Bf～Bg―(－１)～０グリッドに位置する。南に向かって緩やかに傾斜してゆく台地上に占地し、標高は約239.0m程である。また北側約７ｍほどのところには第１号土坑がある。**重複関係**―なし。**遺存状態**―住居址北半を攪乱に切られており、遺存状態はあまり良好ではない。**規模・形状**―平面形はほぼ円形を呈し、径4.8～4.9mほどを測る。深さは南半部で０～９cm、北半部で６～15cmを測る。住居址に沿って周溝が全周し、床面からの深さは９～16cmほどである。**柱　穴**―住居址内に15基(Ｐ１～Ｐ15)、住居址周辺に８基(Ｐ16～Ｐ23)のピットが検出されたものの、主柱穴配置は不明である。**炉　址**―住居址中央にて検出された。床面を掘り窪めた地床炉である。北半を攪乱により切られているものの、長軸約140cm・短軸73cmを測り、平面形は楕円形を呈するとみられる。中央部には上半部を欠いた深鉢(第10図１)が正位に据えられており、この炉体土器周辺に焼土の分布がみられた。**遺　物**―土器５点・石鏃１点を図示し得た。なお住居址周辺で出土した遺物も本住居址出土遺物として取り扱う。

出土遺物(第10図)

１は胴部上半を欠損する深鉢である。胴部中位が若干くびれ、胴部下半がわずかに膨らみを持ってすぼまる器形を呈する。２条１対の隆帯を垂下させて６単位に縦位区画し、区画内は隆帯による対弧文と蛇行懸垂文を交互に配す。地文には単節ＲＬ縄文を縦位施文する。２～５は胴部片である。２は沈線を横位に施し、地文に単節ＲＬ縄文を縦位施文する。３は数条の沈線を縦位に施し、地文として単節斜縄文を施す。４は縦位の細沈線を施し、単節ＲＬ縄文を斜位に施文する。５は地文のみで、無節Ｌ縄文を横位施文する。６は黒色安山岩製の平基無茎鏃で、先端部を欠損する。

第１表　第１号住居址出土石器観察表

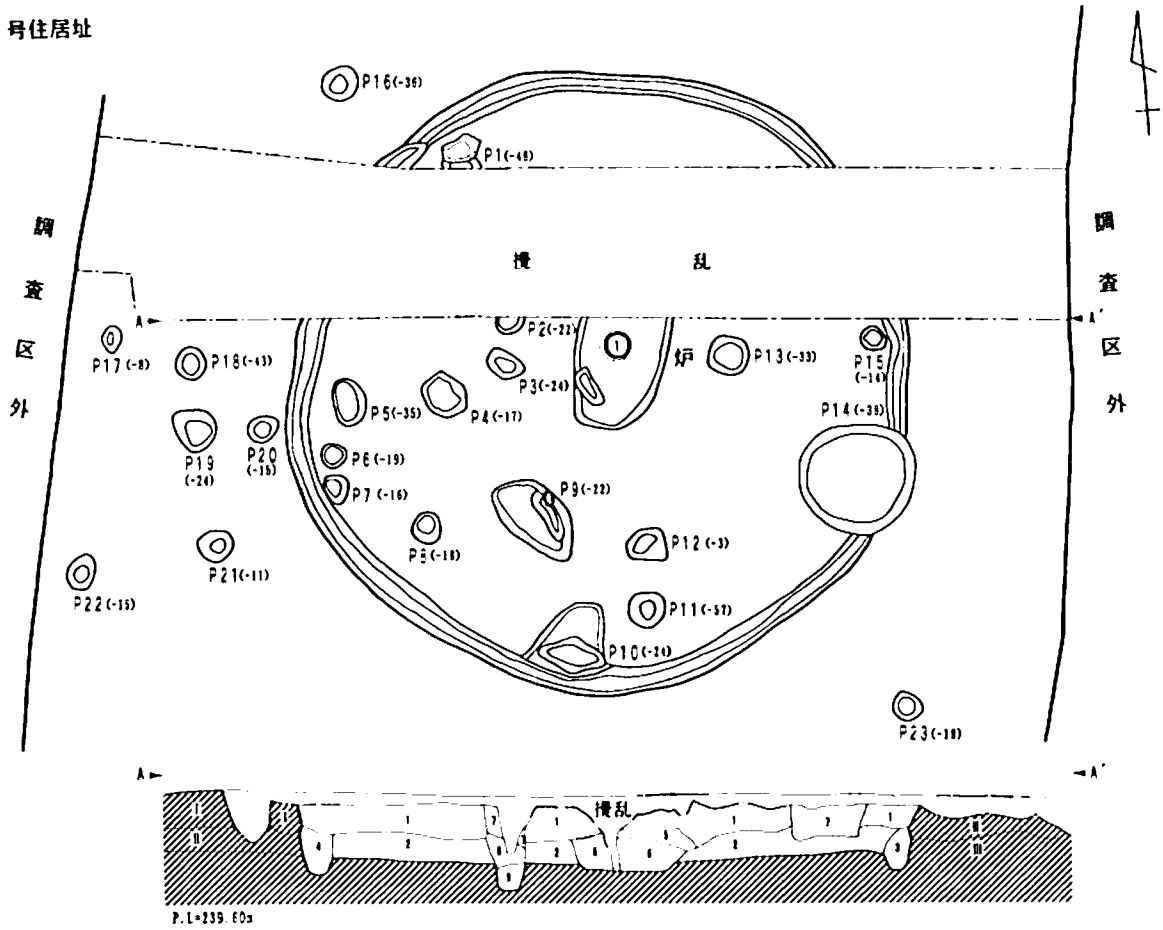
図版番号	種　類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備　考
第10図６	石　鏃	黒色安山岩	2.4	1.7	0.6	1.8	先端部欠損。

第３項　土　　坑

第１号土坑(第11図)

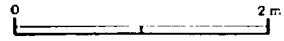
位　置―Ｂ区北西隅、Be―(－１)グリッドに位置する。また南側で第１号住居址に隣接する。**重複関係**

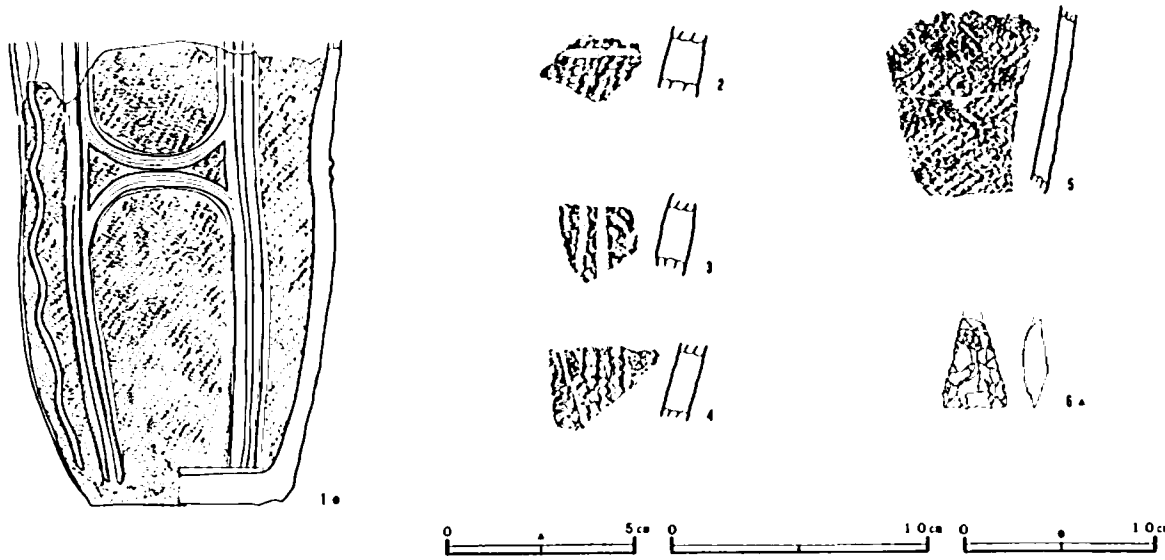
第１号住居址



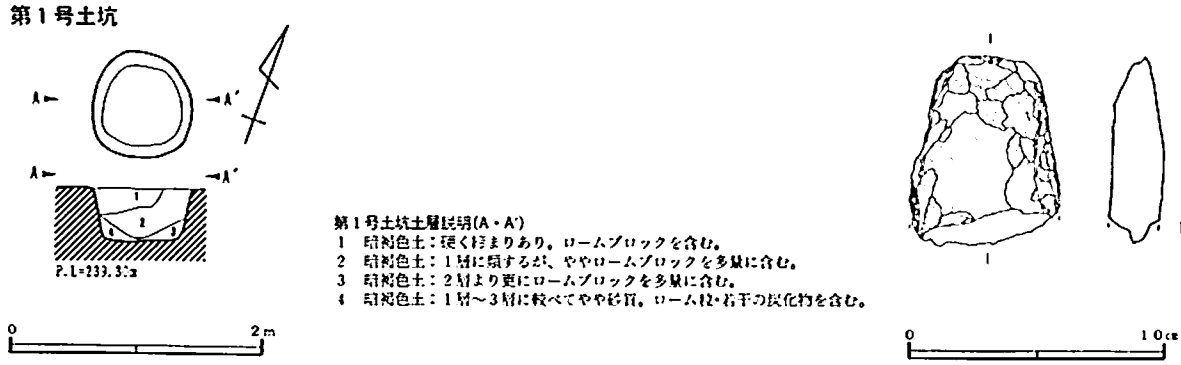
第１号住居址土層説明(A・A')
1　暗茶褐色土：若干色調暗く、ブロック状に３層を含む。
2　暗褐色土：締まりあり。若干２層を含む。
3　暗褐色土：２層及びロームブロックを含む。
4　黒褐色土：締まりあり。２層及びロームブロックを含む。
5　暗褐色土：２層に類するが色調は暗く、締まりがある。３層よりやや軟質。
6　暗褐色土：やや軟質。焼土・炭化物を含む(炉の覆土)。
7　暗茶褐色土：Ⅰ層に類するが、軟質(ピットの覆土)。
8　暗褐色土：軟質。３層に類する(ピットの覆土)。
9　暗褐色土：軟質。４層に類する(ピットの覆土)。

Ⅰ　暗茶褐色土：淡色黒ボク土。
Ⅱ　暗褐色土：黒ボク土。
Ⅲ　褐色土：ハードローム。





第10図　第１号住居址及び同出土遺物



第11図　第１号土坑及び同出土遺物

―なし。遺存状態―良好である。覆　土―暗褐色土を基調とし、自然堆積を示す。規模・形状―平面形はほぼ円形を呈し、径80cmほどを測る。深さは約45cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺　物―打製石斧１点が出土し、これを図示し得た(第11図１)。

出土遺物(第11図１)

１は黒色頁岩製の打製石斧である。尾部のみが残存する。

第２表　第１号土坑出土石器観察表

図版番号	種　類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備　考
第11図１	打製石斧	黒色頁岩	7.5	5.8	2.1	125	尾部のみ残存。

第４項　埋　甕

第１号埋甕(第12図)

位　置―Ｃ区南東隅、Ci―(-４)グリッドに位置する。重複関係―なし。遺存状態―良好である。規模・形状―平面形はほぼ円形を呈し、径35cmほどを測る。深さ及び断面形状は不明である。遺　物―深鉢１点が正位の状態で据えられており、これを図示し得た(第12図１)。

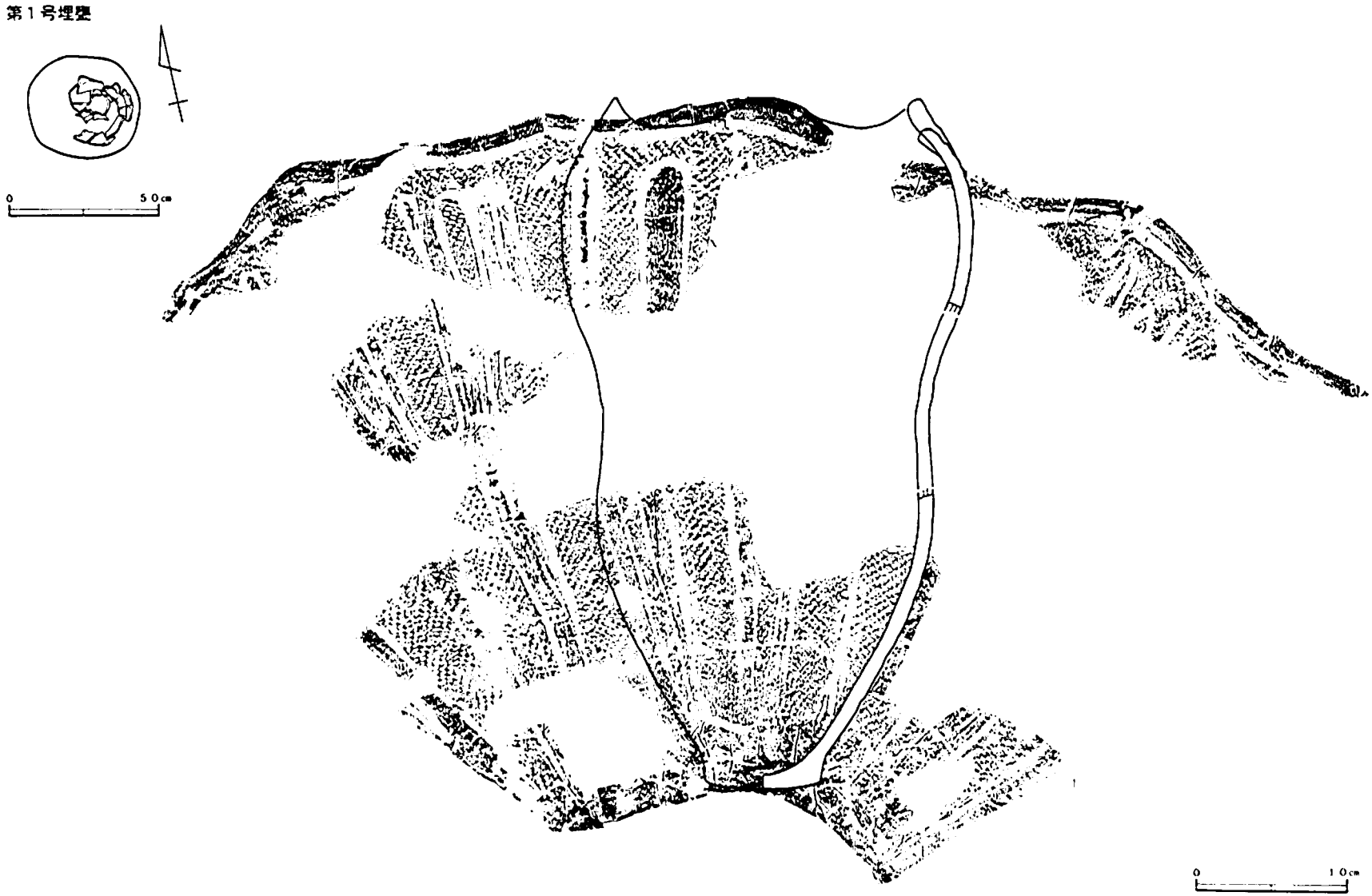
出土遺物(第12図１)

１は口縁部～底部まで遺存する深鉢である。器形はキャリパー形を呈し、口縁部は５単位の波状縁である。口縁部直下には無文帯を有し、その下端は口縁部に沿って施された太沈線により区画される。胴部は沈線により、「U」ないし逆「U」字状に区画される。区画内には単節ＲＬ縄文を施し、無文帯直下は横位、これ以下は縦位施文される。

第５項　遺物包含層

Ａ．分布の概要

本遺跡では遺物包含層が検出されている。その出土量は遺物収納箱で約15箱に及び、本遺跡出土遺物の大半を占める。上述の通りＡ区～Ｃ区にかけて遺物が分布しているものの、Ａ区南半部～Ｂ区全体及びＣ区南半部に集中しており、特にＡ区南部のAqグリッド付近に濃密に分布している。出土遺物



第12図　第１号埋甕及び同出土遺物

としては土器・土製品・石器等があり、早期～後期の資料が出土しているが、中期後半の資料が最も多く、包含層出土遺物の主体を占める。後期前半～後期中葉の資料がこれに次ぐものの、中期後半の資料の出土量に較べると少量である。その他早期中葉～後半・中期中葉の資料も僅かに出土している。各時期の遺物の分布状況を見てゆくと、早期の資料は遺物包含層全体に散在して出土している。中期中葉の資料はB区にてまばらに検出されているのみである。包含層遺物の主体である中期後半の資料は、遺物包含層全体に分布がみられる。後期前半～後期中葉の資料はB区全体に分布しているものの、B区南部のBk～Bnグリッドにやや集中する傾向が窺える。なお前期の資料は出土していない。

B．遺　物(第13図～第19図)

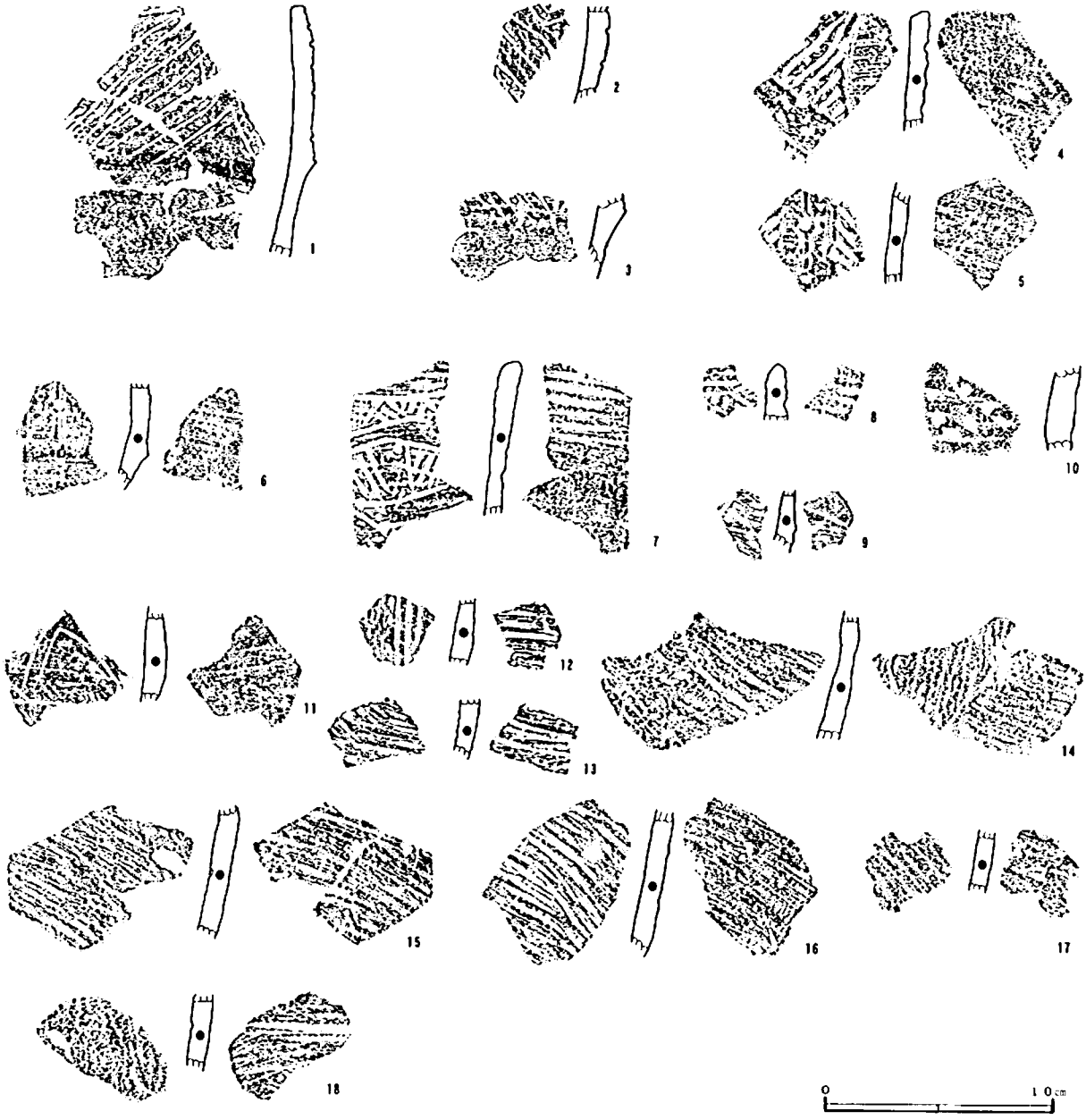
①土器(第13図～第17図1～100)

1～18は早期の土器である。早期中葉沈線文系土器や早期後葉条痕文系土器が出土している。出土量はあまり多くない。1～3は早期中葉の所産で、いずれも同一個体である。底部から丸みを持って立ち上がり、胴部上半で屈曲部を持ち、若干内湾しながら開く器形を呈するとみられる。口唇部形状は角頭状を呈する。口縁部～屈曲部を文様帯とし、口縁部直下には沈線を横位に巡らせて文様帯の上端を区画する。文様帯内は、貝殻腹縁文を充填した集合沈線による山形文を施し、部分的に2に見られるような渦巻文(?)を施す。屈曲部以下及び内面にはナデ調整を施す。胎土には砂粒を多量に含む。

10を除いた4～18は内外面に条痕文を施す土器で、早期後半の所産である。10以外いずれも胎土には微量の繊維を含む。4は内削ぎ状の口唇部を有し、細隆線による「い」字状等の幾何学文を施し、太沈線を充填する。区画文の交点を中心に刺突を施す。5・6は刺突を伴う細隆線を3条垂下させて文様帯内を縦位区画していると見られ、5は縦位区画内に施された幾何学状区画文内に太沈線を充填していると考えられる。また6は下半に屈曲部が見られる。7・8は内削ぎ状の口唇部を有し、口唇部外側には刻みを施す。口縁部直下には幅狭の無文帯を持つ。口縁部文様帯はその上端を太沈線により区画し、文様帯内には太沈線による襷状を基本とした区画文を施すが、文様構成はやや崩れた印象を受ける。区画文内には太沈線を充填し、区画文の交点には刺突を施す。9は中位に屈曲部を有し、屈曲部上には沈線を巡らせ、部分的に刻みを施す。屈曲部の上位には沈線による幾何学文を施し、その交点には刺突を施す。10は摩滅が著しく、内外面とも条痕文は見られない。刺突を伴う沈線を横位に数条施す。文様構成より早期後半の所産と捉えたが、異なる時期の所産の可能性もある。11は2条1対の沈線を横位に巡らせ、その上位には同様の沈線による山形文を施す。下半には緩やかな屈曲が見られる。12～18は内外面に幅広で粗雑な条痕文のみを施す胴部片で、いずれも器形上の屈曲は見られない。

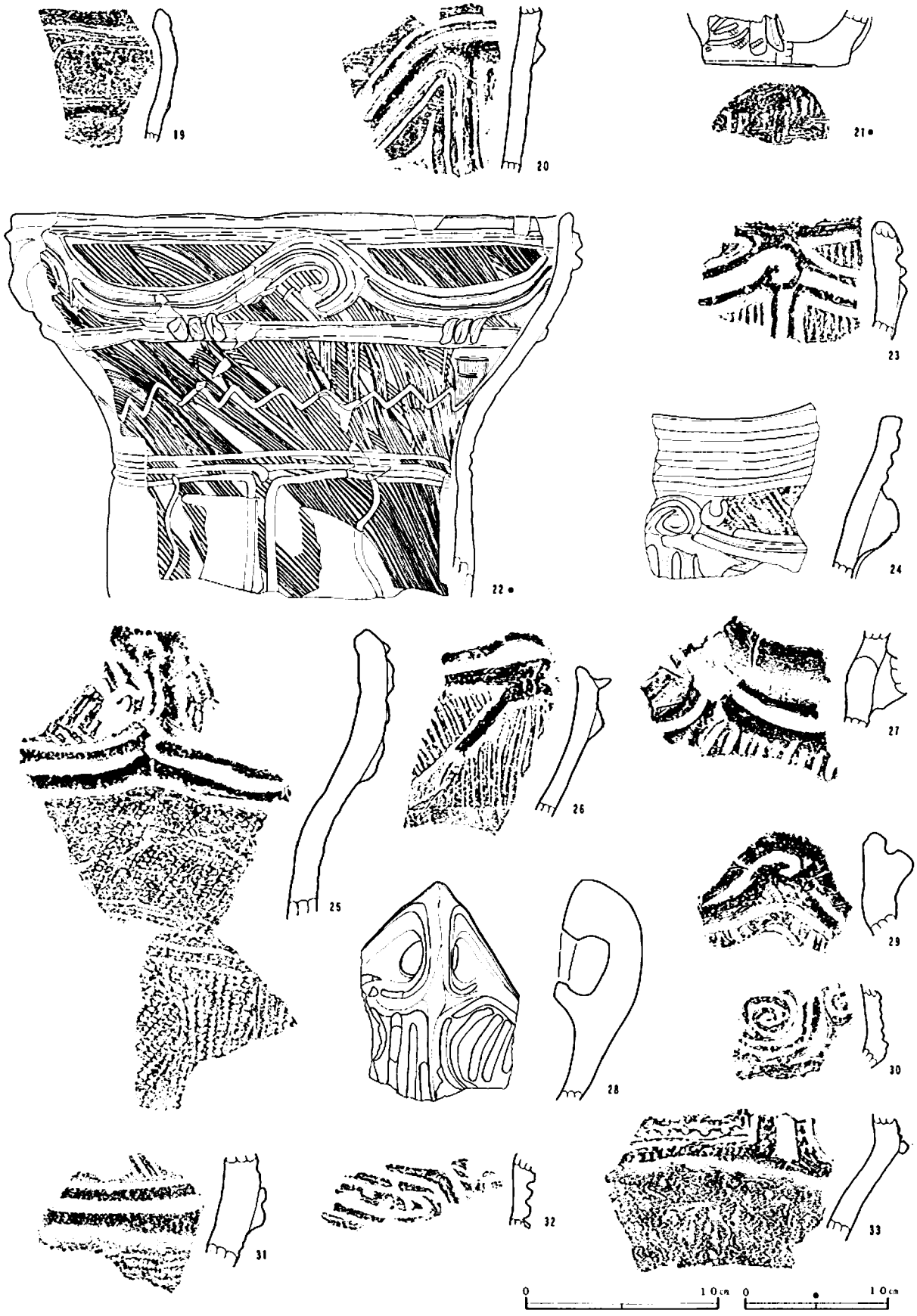
19～68は中期の土器である。19～21は中期中葉の所産である。19は頸部で括れて、内湾して開く器形を呈する口縁部片で、口唇部内面には稜が見られる。口縁部文様帯は、上端を2条1対の沈線により、下端を隆帯により区画し、文様帯内には沈線による楕円状の区画文を施す。胎土には雲母及び砂粒を含む。20は、両脇に2条1対の沈線を沿わせた断面三角形の隆帯により、斜位・横位・縦位の連続した文様を施し、文様の内側には三叉文を施す。地文には細かい単節LR縄文を施す。21は底部片で、単節RL縄文を地文とする。2条1対の隆帯を垂下させ、沈線による斜位・弧状の文様を施す。底面には網代痕を有する。

22～68は中期後半～末葉の所産である。上述の通り遺物包含層全面より出土し、出土遺物の主体を占める。22は口縁部～胴部中位の復元個体で、キャリパー形の器形を呈する。隆帯ないし沈線により口縁部・頸部・胴部の各文様帯が区画される。口縁部文様帯には、背割り隆帯による渦巻文を4単位ほど配し、同様の隆帯による弧状文によりそれぞれが連結される。弧状文の下端には3個1単位の棒



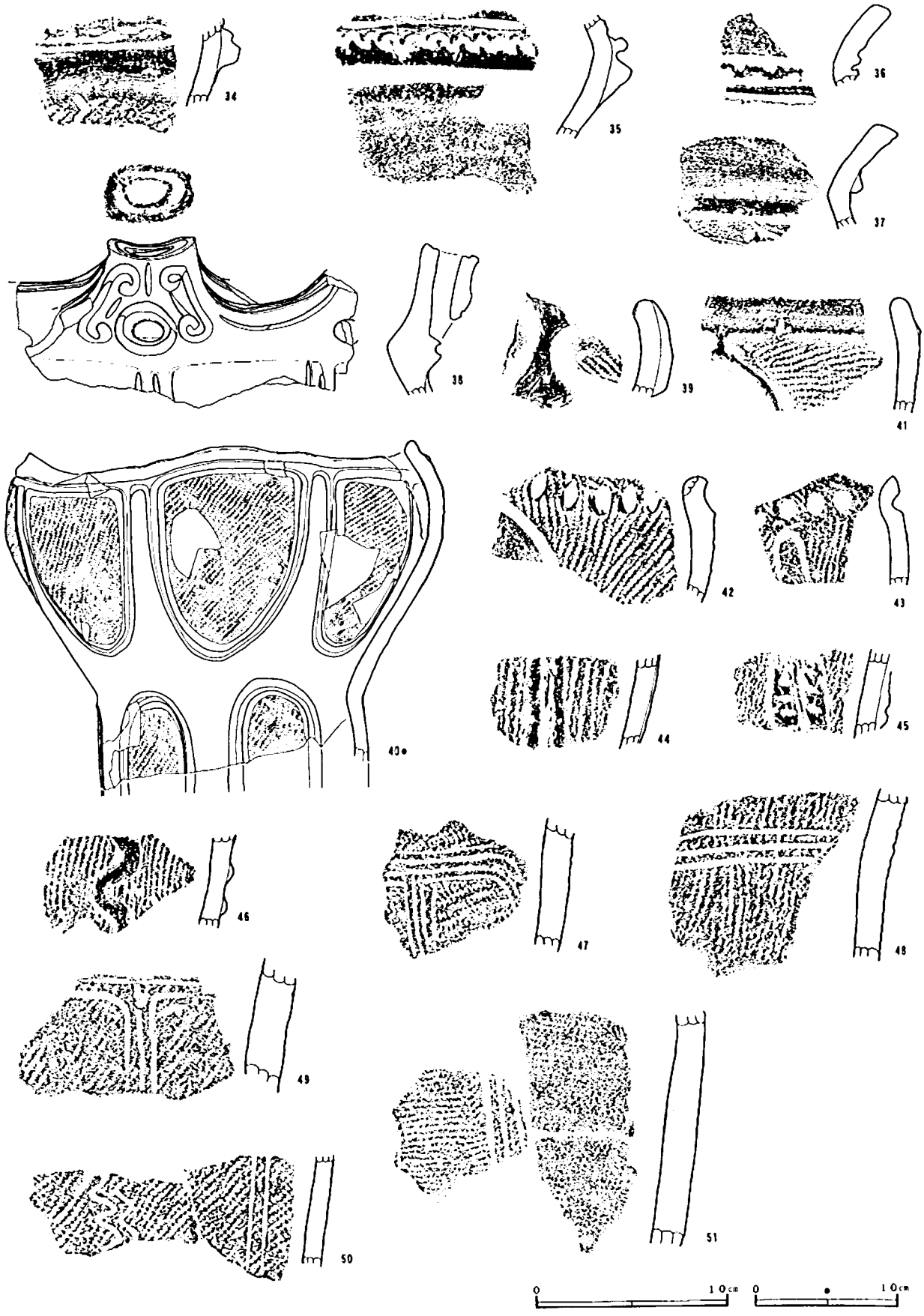
第13図　包含層出土土器①

状短隆帯を貼付する。頸部文様帯には波状沈線を１条横位に巡らせる。胴部文様帯は２条１対の沈線を垂下させて縦位区画し、区画内には沈線による蛇行懸垂文を１条垂下させる。地文は斜位の条線文である。23は内湾して開く口縁部片で、背割り隆帯により弧状に連結された渦巻文を施し、渦巻文より同様の隆帯を垂下させる。撚糸Ｌを地文とする。24は波状を呈する口縁部片で、口縁部直下には４条１単位の沈線を横位に巡らせた文様帯を有す。以下は渦巻文を施した突起を付し、突起部からは、背割り隆帯による弧状文や懸垂文を施す。弧状区画内は縄文を地文とし、突起部脇に沈線による「Ｕ」字状の文様を施す。25はキャリパー形の器形を呈し、背割り隆帯や４条ほどを１単位とする沈線を横位に巡らせて、口縁部・頸部・胴部の各文様帯を区画する。口縁部文様帯内は背割り隆帯により楕円形等に区画され、区画内には矢羽状の沈線を充填する。頸部は無文帯とし、胴部には数条を１単位と

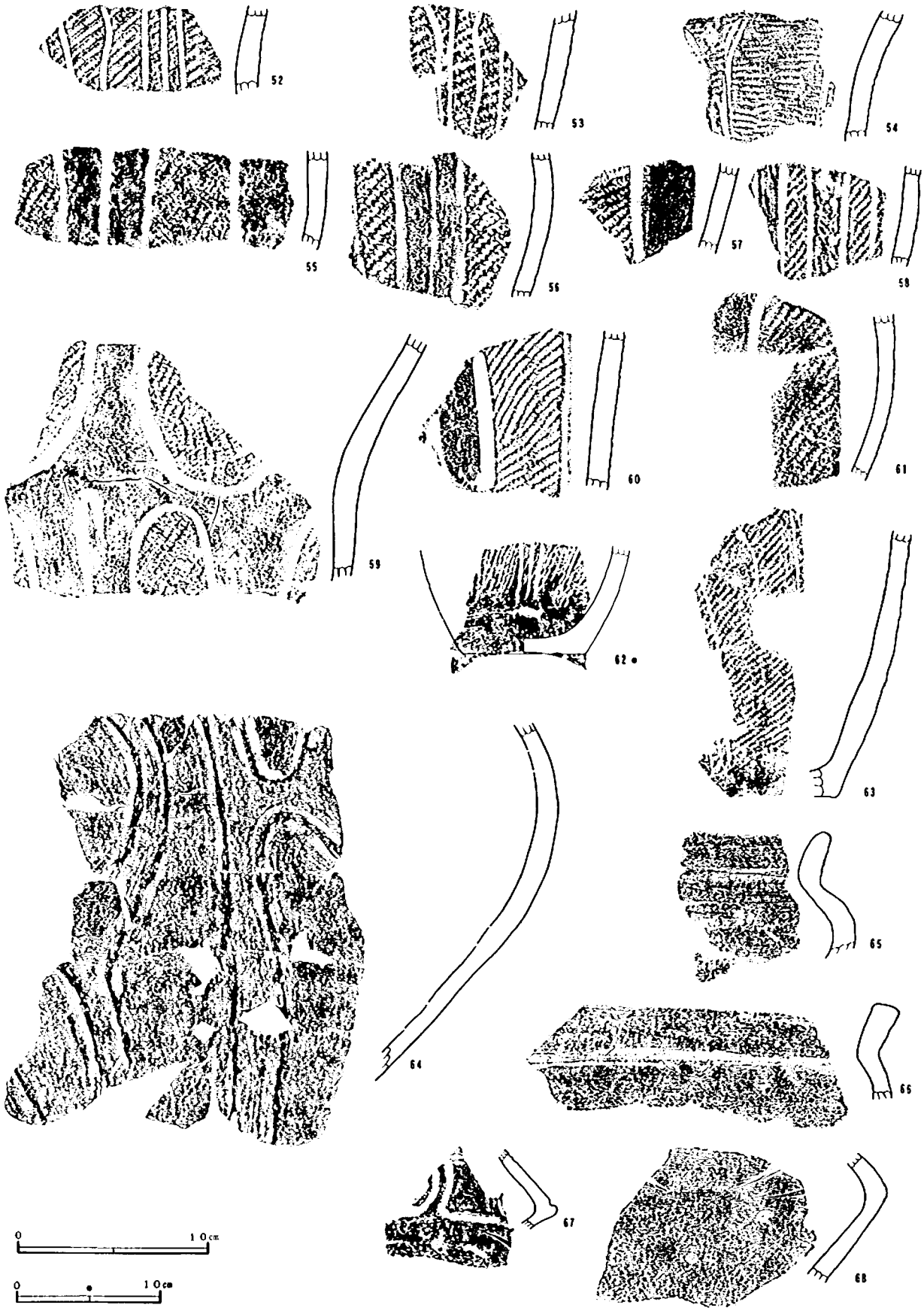


第14図　包含層出土土器②

する沈線を垂下させる。頸部以下は単節ＲＬ縄文を地文とする。26は波状を呈する口縁部片で、内湾して開く器形を呈する。上下に隆帯を巡らせて口縁部文様帯を区画する。波頂部下には、頂部に渦巻文を施した舌状の突起を有し、隆帯により弧状に連結される。隆帯による区画内には縦位・斜位の沈線を充填する。27は波状を呈する口縁部片で、波頂部には環状把手を有するとみられる。把手下端より背割り隆帯を口縁部に沿って弧状に巡らせ口縁部文様帯の上端を区画する。区画内には斜位の沈線を充填する。28は波状を呈する口縁部片で、波頂部には眼鏡状突起を有す。突起部側面には円孔に沿って沈線を環状に巡らせ、口唇部上に施した沈線に連結させる。口縁部文様帯内は、隆帯により楕円状に区画され、区画内には沈線を充填する。29は波状を呈する口縁部片で、波頂部下は突起状に肥厚する。波頂部には渦巻文を施し、口縁部直下に巡らせた沈線に連結する。口縁部文様帯は内側に沈線を沿わせた隆帯によりその上端を区画する。文様帯内には沈線による弧状の文様を施し、沈線を充填する。30は口縁部片とみられ、下端には屈曲部が看取される。口縁部文様帯内には背割り隆帯により弧状に区画され、区画内には沈線による渦巻文を施す。弧状区画文脇にも沈線による小渦巻文を施す。31～35は口縁部～頸部破片である。31は背割り隆帯により口縁部文様帯を区画しているとみられる。区画内には斜位の沈線を充填し、頸部には単節ＲＬ縄文を斜位施文する。32は刻みを施した隆帯により楕円状に区画し、区画内にも３条の沈線を楕円状に巡らせる。楕円区画中央には交互刺突文を施す。33は半截竹管による刺突を施した隆帯を巡らせて口縁部文様帯の下端を区画し、文様帯内には、同様の隆帯により、縦位・弧状の区画文を施す。区画文内には交互刺突文を施す。頸部は無文である。34は隆帯により口縁部文様帯の下端を区画し、文様帯内には交互刺突文を施す。頸部は単節ＬＲ縄文を地文とし、沈線による蛇行懸垂文を１条垂下させる。35は背割り隆帯により口縁部文様帯の下端を区画し、文様帯内には、半截竹管による「U」・逆「U」字状の刺突を交互に施す。頸部は無文である。38は膨らみを持った胴部から頸部でくびれ、外反して開く器形を呈するとみられる。口縁部は二重口縁で、６～８単位ほどの波状縁とみられ、波頂部には台形状の突起を持つ。口唇部～突起部側面には沈線を巡らせる。突起部上面及び突起下部には、周囲に沈線を環状に巡らせた円孔を有する。突起部前面には、突起部下部に穿たれた円孔を挟むように、端部が渦巻状を呈する斜位の沈線を１対施す。突起部間には、突起部を連結する弧状の沈線を１条施す。突起部直下には２条１対の隆帯を垂下させる。地文は施されない。39は波状を呈する口縁部片で、隆帯により楕円状の区画文を施し、区画内には単節ＲＬ縄文を横位施文する。40は口縁部～胴部中位の復元個体で、キャリパー形の器形を呈する。口縁部は４単位の波状縁とみられ、口縁部直下には幅狭の無文帯を有する。無文帯直下には隆帯を巡らせて、その下端を区画する。胴部上半には隆帯により「U」字状文を、胴部下半には逆「U」字状文をそれぞれ施す。いずれも区画内には単節ＲＬ縄文を縦位施文する。41は内湾する器形を呈する口縁部片で、口縁部直下には幅狭の無文帯を有する。無文帯直下には隆線を巡らせてその下端を区画する。この区画線より隆線を短く垂下させ、胴部上半に施した隆線による弧状文と連結する。地文は斜位施文した単節ＬＲ縄文である。42・43は波状を呈する口縁部片で、内湾して開く器形を呈する。口縁部直下には棒状工具による円形刺突を施し、胴部上半には沈線による弧状の区画文を施す。縄文を地文とし、区画内は無文である。44・45は胴部片で、撚糸Ｌを地文とする。いずれも２条１対の隆帯を垂下させるが、45の隆帯には刻みを施す。46は撚糸文を地文とし、隆帯による蛇行懸垂文を１条垂下させる。47は半截竹管腹を用いた３条１対の沈線により、逆「L」字状等の幾何学文を施す胴部片で、斜位施文した単節ＲＬ縄文を地文とする。48は撚糸Ｌを地文とし、３条１対の沈線を横位に施す胴部片である。49は数条の沈線を横位に巡らせ、３条１対の沈線を垂下させる。沈線の交差部には逆「C」字状の刺突文を施し、地文は縦位施文した単節ＲＬ縄文である。50は２条１対の沈線を垂下さ



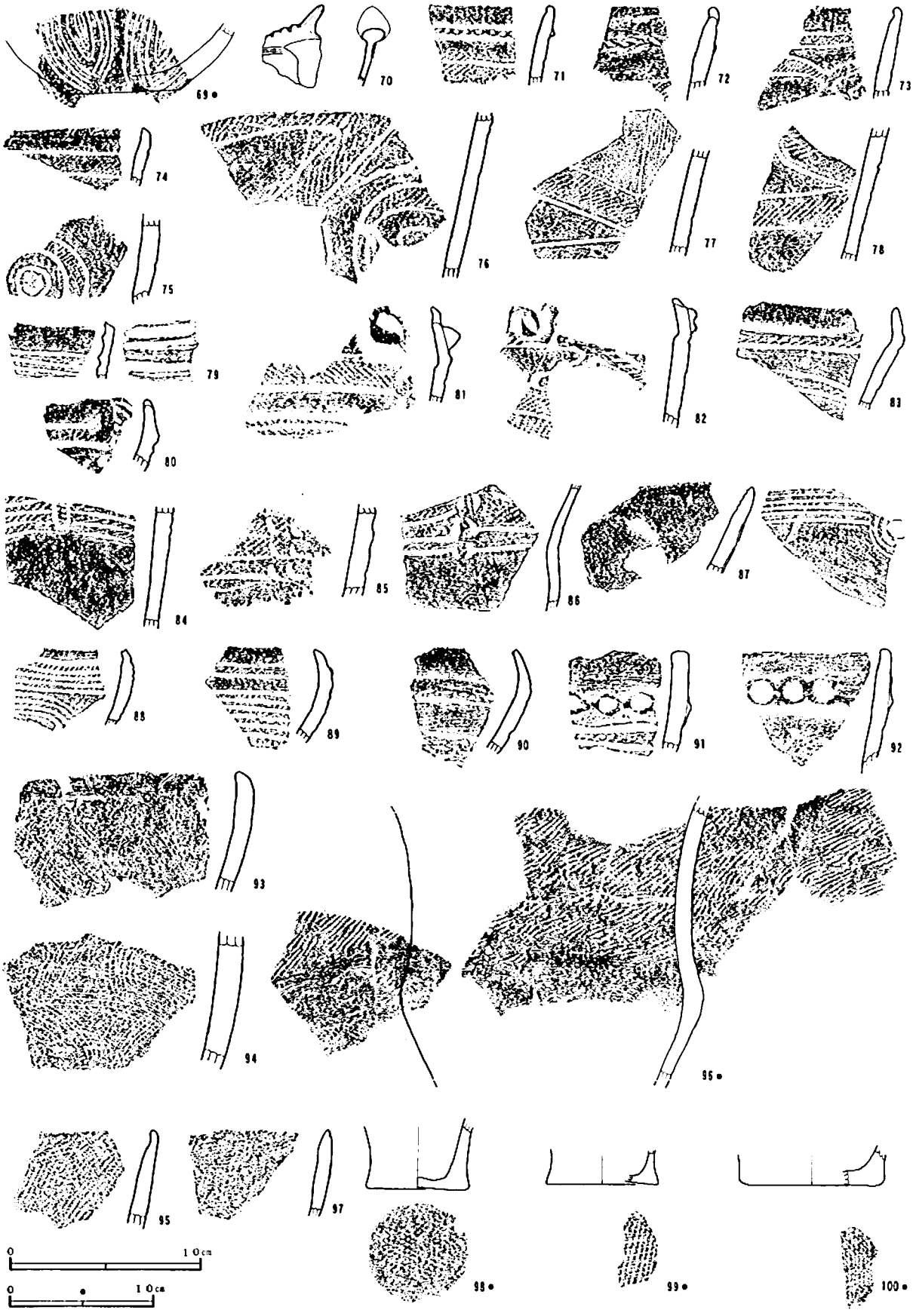
第15図　包含層出土土器③



第16図　包含層出土土器④

せて縦位区画し、縦位区画内には同じく２条１対の蛇行懸垂文を垂下させる。地文は縦位施文した単節ＲＬ縄文である。51は斜位施文した単節ＲＬ縄文を地文とし、３条１対の沈線を垂下させる胴部片である。52は、縦位施文した単節ＲＬ縄文を地文とし、３条１対の沈線を垂下させて縦位区画し、区画内には沈線による蛇行懸垂文を１条垂下させる。53は縦位施文した単節ＲＬ縄文を地文とし、沈線を垂下させて縦位区画し、区画内に蛇行懸垂文等を施す。54は斜位施文した単節ＲＬ縄文を地文とし、沈線による弧状の文様を施す。55･56は沈線を垂下させて縦位区画し、縄文帯と無文帯を交互に持つ。無文帯には沈線による懸垂文を垂下させ、縄文帯には単節ＲＬ縄文を縦位施文する。57・58も沈線を垂下させて縦位区画し、縄文帯と無文帯を交互に持つ。縄文帯にはいずれも単節ＲＬ縄文を縦位施文する。59は胴部中位で括れる器形を呈し、上半には沈線による弧状文を、下半は逆「Ｕ」字状文を施す。区画文内には単節ＲＬ縄文を施す。下半の文様間には蕨手状の懸垂文を垂下させる。60・61は沈線による「Ｕ」字状ないし逆「Ｕ」字状の文様を施すもので、区画文内にはいずれも単節ＲＬ縄文を縦位施文する。62・63は底部片である。62は撚糸Ｌを地文とし、３条１対の沈線を垂下させる。63は数条１単位の細沈線を垂下させて縦位区画し、区画内には同じく細沈線による蛇行懸垂文を施す。地文は縦位施文した単節ＲＬ縄文である。64は大型の鉢形土器とみられ、底部より直線的に開き、胴部上半で強く内湾して開く器形を呈するとみられる。地文は施されず、隆帯による曲線的な文様を施す。36・37・65～68は浅鉢形土器である。36・37・65・66は膨らみを持つ胴部から頸部で括れ、外反して開く器形を呈する。36は屈曲部に隆帯を巡らせ、その直上には交互刺突文を巡らせる。37も屈曲部に隆帯を巡らせ、以下は縄文を地文とし、隆帯及び沈線による文様を施す。65・66は無文である。67・68は胴部片で、67は屈曲部上位に沈線による弧状文等を施す。68は無文である。

69～100は後期の土器である。後期前半～中葉のもので、後期初頭や後期後半のものはみられない。69は底部片で、底部より大きく開いて立ち上がる器形を呈し、集合沈線による対弧状の文様を施す。70は波状を呈する口縁部片で、波頂部には耳朶状の突起を持つ。突起部側面には円形刺突及び短沈線を施す。刻みを施した口唇部直下には、刻みを施した細隆線を横位に巡らせる。また口縁部内面には沈線を１条巡らせる。71は平縁の口縁部片で、口縁部内面には沈線を１条巡らせる。外面には刻みを施した隆線を１条巡らせ、以下は沈線による直線的な区画文を施し、区画内には単節ＬＲ縄文を充填する。72も平縁の口縁部片で、口端部は内折する。口縁部直下には斜位の刻みを施した細隆線を１条巡らせる。以下は沈線による直線的な区画文を施し、単節斜縄文を充填する。73も平縁の口縁部片で、口縁部内面には１条の沈線を巡らせる。口縁部直下には２条１対の沈線を横位に巡らせ、以下は沈線による弧状等の幾何学文を施す。区画文内には単節斜縄文を充填する。74は平縁の口縁部片で、口縁部直下で若干内湾して開く器形を呈する。口唇部は外削ぎ状を呈する。口縁部直下には沈線による直線的な文様を施し、単節斜縄文を充填する。75～78は沈線により曲線や直線等の幾何学状の区画文を施す胴部片で、いずれも単節ＬＲ縄文を充填する。79は波状を呈する口縁部片で、口唇部は外削ぎ状を呈する。外面は口縁部直下に無文帯をもち、以下は数条の沈線を横位に巡らせる。内面には隆線及び沈線を横位に巡らせる。80は内湾して開く器形を呈する口縁部片である。口唇部には小突起を有し、突起部及び突起部直下には沈線による弧状文を施す。また口縁部直下には２条１対の沈線を巡らせて縄文帯とする。81・82は波状を呈する口縁部片で、内面に施した稜で内折して開く。81は波頂部に環状を呈する突起を有し、突起中央には円孔を施す。口縁部～胴部上半には単節ＲＬ縄文を充填した数段の縄文帯を有し、波頂部下には弧状の区切り文を施す。82は波頂部に斜位の刻みを施した突起を有す。口縁部直下には斜位の刻み列を充填した平行沈線を施して、突起部に連結させる。その直下には三角形等の幾何学文を施す。以下は単節ＬＲ縄文を充填した縄文帯を施す。83は口縁部直下にて内折



第17図　包含層出土土器⑤

して開く器形を呈する口縁部片で、口唇部には突起を付す。口縁部直下には幅狭の無文帯を有し、屈曲部には単節ＬＲ縄文を充填した平行沈線を巡らせ、以下は対弧状の縄文帯を施す。84・85は直線的に立ち上がる胴部片で、数条の沈線を横位に巡らせた縄文帯を有し、84の縄文帯内には「Ｕ」字状の区切り文を、85の縄文帯内には２条１対の弧状の区切り文を、それぞれ施す。以下は無文である。86は胴部中位に括れを持ち、外反して立ち上がる器形を呈する胴部片で、沈線による弧状等の縄文帯を数段有し、対弧状の区切り文を施す。87は鉢形土器の口縁部片で、内面の口縁部直下には５条１対の集合沈線を横位に巡らせ、３条１対の集合沈線による円形文に連結させる。円形文の中央には焼成前の穿孔を施す。外面はケズリ調整である。88は内湾して開く器形を呈する鉢形土器の口縁部片である。口縁部は波状を呈し、口唇部には斜位の刻みを施す。内面及び外面の口縁部直下には１条の沈線を横位に巡らせ、外面は沈線直下に刻み列を持つ。以下は４条１対の集合沈線による縄文帯を横位に巡らせ、縄文帯直下には同様の集合沈線による弧状の縄文帯を持つ。89は内湾して開く鉢形土器で、口縁部直下に斜位の刻みを充填した平行沈線を横位に巡らせる。以下は数条の沈線を横位に巡らせた縄文帯を有す。90も内湾して開く鉢形土器で、口唇部は内削ぎ状を呈する。口縁部直下には幅狭の無文帯を有し、無文帯直下には横位の刺突列を充填した平行沈線を横位に巡らせる。以下は刺突を充填した平行沈線を横位に巡らせる。91・92は若干内湾して開く口縁部片で、91の口唇部は丸みを帯びた角頭状を、92の口唇部は丸みを帯びた外削ぎ状を、それぞれ呈する。口縁部直下には幅狭の無文帯を有し、指頭圧痕を施した隆帯によりその下端を区画する。91は以下に数条の沈線を横位に巡らせた縄文帯を持つ。93は若干内湾して立ち上がる口縁部片で、櫛歯状工具による条線文を斜格子状に施す。94は胴部片で、櫛歯状工具による条線文を弧状等に施す。95は平縁の口縁部片で、内面の口縁部直下には沈線を１条巡らせる。外面には単節ＬＲ縄文を横位施文する。96は胴部片で、胴部下位が張り出し、胴部中位で括れて、外反して開く器形を呈する。胴部上半～括れ部には単節ＬＲ縄文を横位施文し、以下は無文である。97は口縁部片で、内外面とも粗雑なケズリ調整を施す。98～100は底部片で、いずれも底面には網代痕を有す。また98・99は底部直上で括れ、底面は若干開いて底部に至る器形を呈する。

②土製品（第18図101）

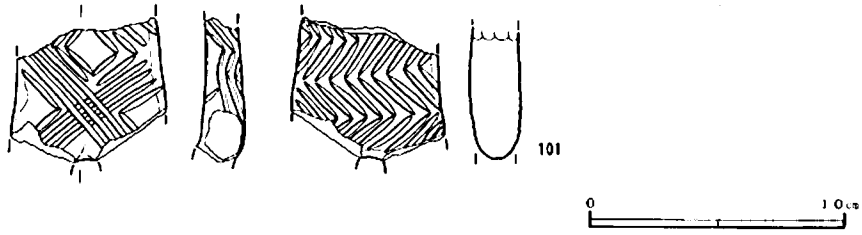
101は板状土偶の腹部～腰部片で、胴部上半及び脚部を欠損する。前面には集合沈線による菱形文を、側面及び背面には集合沈線による矢羽状文を施す。

第３表　包含層出土土製品観察表

図版番号	種　類	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備　考
第18図101	土　偶	5.7	6.0	2.0	73	胴部上半及び脚部欠損。

③石器（第19図102～121）

包含層出土の石器は、土器の遺物量に較べて少量であるが、スクレイパー・磨製石斧・打製石斧・棒状石製品が出土している。打製石斧の出土量が最も多く、スクレイパーがこれに次ぐ。スクレイパーはいずれも黒色頁岩を石材とした小型のものである。磨製石斧は１点で、刃部のみ残存する。打製石斧の石材は黒色頁岩が最も多く、デイサイトがこれに次ぐ。形状には短冊形・撥形・分銅形等がある。



第18図　包含層出土土製品

第19図　包含層出土石器

第４表　包含層出土石器観察表

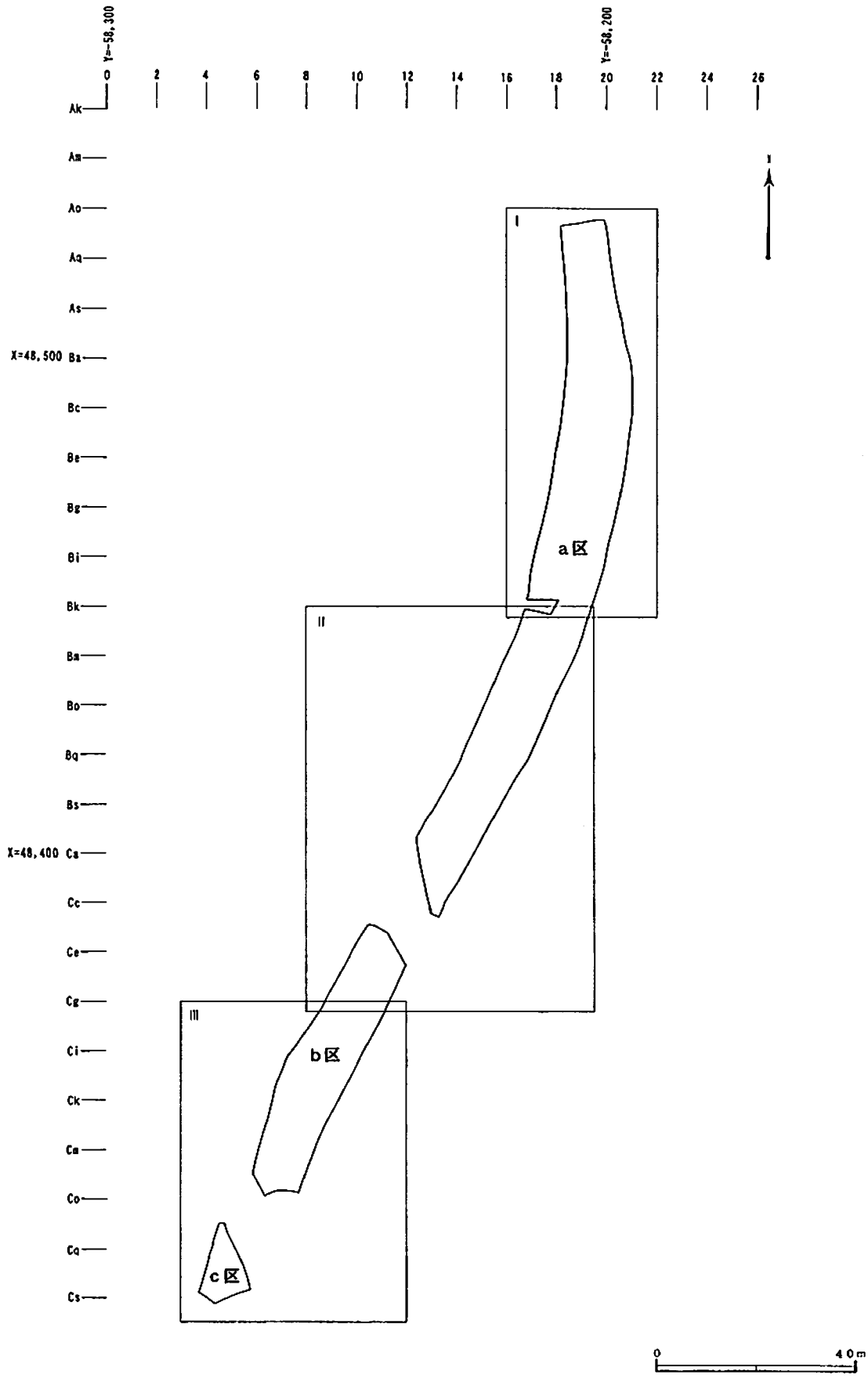
図版番号	種　類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備　考
第19図102	スクレイパー	黒色頁岩	6.4	4.0	1.2	26	完形。
第19図103	スクレイパー	黒色頁岩	5.7	1.9	0.6	6.9	完形。
第19図104	磨製石斧	不　明	5.6	3.4	2.0	20	刃部のみ残存。
第19図105	打製石斧	黒色頁岩	5.3	4.5	1.0	33	完形。
第19図106	打製石斧	泥　岩	11.6	4.5	1.6	78	完形。
第19図107	打製石斧	デイサイト	11.5	5.0	2.1	151	完形。
第19図108	打製石斧	黒色頁岩	11.9	5.5	2.8	151	完形。
第19図109	打製石斧	黒色頁岩	8.7	4.8	1.4	77	完形。
第19図110	打製石斧	デイサイト	10.4	4.5	1.6	104	完形。
第19図111	打製石斧	黒色頁岩	7.9	4.2	1.2	47	刃部一部欠損。
第19図112	打製石斧	砂　岩	9.3	4.3	1.5	53	刃部一部欠損。
第19図113	打製石斧	黒色頁岩	10.1	4.7	1.5	87	刃部一部欠損。
第19図114	打製石斧	デイサイト	12.0	4.0	1.9	109	尾部欠損。
第19図115	打製石斧	黒色頁岩	7.3	3.7	1.8	70	刃部欠損。
第19図116	打製石斧	黒色頁岩	6.7	4.7	1.8	62	刃部欠損。
第19図117	打製石斧	不　明	11.1	4.3	2.4	140	両端部欠損。
第19図118	打製石斧	頁　岩	7.1	4.2	1.5	59	刃部を欠損か？
第19図119	打製石斧	泥　岩	7.6	4.0	1.6	65	刃部を欠損か？擦痕あり。
第19図120	打製石斧	硬質砂岩？	10.1	6.8	2.5	202	完形。分銅型。
第19図121	棒状石製品	結晶片岩	13.4	4.4	1.6	137	完形。

第４節　鼻毛石鎌田Ⅲ遺跡の遺構と遺物

第１項　調査の概要

今回の調査により、竪穴状遺構１基及び陥し穴や倒木痕等の土坑25基が検出された。竪穴状遺構はｃ区北東部の、南東方向に入っている埋没谷に向かって緩やかに傾斜してゆく、標高243.4mほどの台地上に占地する。また陥し穴は５基検出され、いずれもａ区内に散漫に分布している。平面形は隅丸長方形ないし楕円形を呈し、第２・３・４・21号土坑は底面に１基のピットを持つものの、第７号土坑は底面にピットを持たない。また今回の調査区内からは、遺構内･遺構外とも遺物は検出されなかった。このため各遺構の帰属時期については、その多くは縄文時代の所産と考えられるものの、判断の付きかねるものもある。

この他２カ所で地割れ痕が確認されており、いずれもａ区で検出されている。一カ所はａ区中央部の、Bk～Bn－16～18グリッドにて確認され、蛇行しながら北西－南東方向に走向する。もう一カ所はａ区南端部の、Bs～Cb－12～13グリッドにて検出され、南北方向に延び、途中で分岐して南南東及び南南西方向にそれぞれ走向する。これらの地割れ痕の形成時期については不明である。またｂ区北端部からｃ区南東部にかけて埋没谷が検出されている。ｂ区北端部から中央部を抜けて、ｃ区南東部を一部かすめるようにして南北方向に埋没谷が入っている。



第20図　鼻毛石鎌田III遺跡全体図

第２項　竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構(第22図)

位　置―ｃ区北側の東壁寄りの、Cp～Cq―５グリッドに位置し、標高は243.4m程である。また北側で第11号土坑に、南側で第12・13・15号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―概ね遺存状態は良好である。**規模・形状**―東半が調査区外にあるため、全体の規模・形状は不明だが、現状で長軸３ｍを測り、平面形は不整形を呈する。深さは北壁で11cm、西壁で８cm、南壁で５cmを測る。**柱　穴**―遺構内に９基(Ｐ１～Ｐ９)のピットが検出されたものの、その配置は不明である。**炉　址**―検出されなかった。**遺　物**―なし。

第３項　土　　坑

第１号土坑(第23図)

位　置―ａ区北側のBb―19グリッドに位置する。また北側で第９号土坑に、東側で第10号土坑に、南側で第２号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆　土**―黒褐色土及び褐色土を基調とする。**規模・形状**―平面形はほぼ円形を呈し、径300cmほどを測る。深さは約110cmを測り、断面形は皿状を呈する。**遺　物**―なし。**備　考**―本土坑はその形状や覆土から倒木痕と考えられる。

第２号土坑(第23図)

位　置―ａ区北側のBd―20グリッドに位置する。また北側で第１・10号土坑に、南側で第３号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆　土**―暗褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**―長軸137cm・短軸107cmを測り、平面形は、東壁に張り出し部を持つものの、開口部・底面ともほぼ隅丸長方形を呈する。深さは約90cmを測り、断面形は箱状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部にて径15cm・深さ52cmを測るピット１基が検出された。**遺　物**―なし。**備　考**―本土坑はその形状や覆土から陥し穴と考えられる。

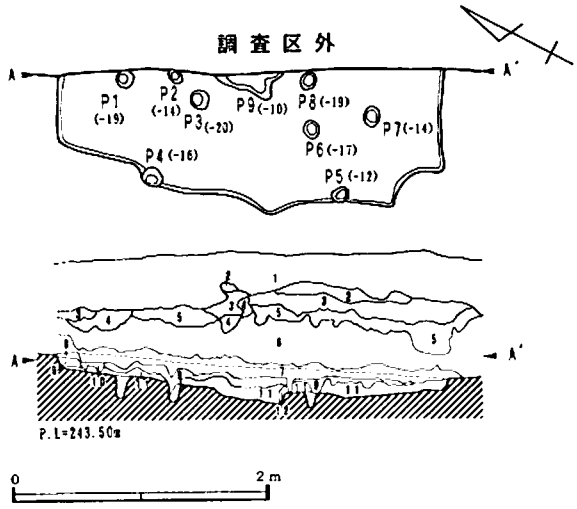
第３号土坑(第23図)

位　置―ａ区中央部北寄りのBf―18グリッドに位置する。また北側で第２号土坑に、南側で第４号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆　土**―暗褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**―長軸179cm・短軸119cmを測り、平面形は、開口部は楕円形を、底面は隅丸長方形を呈する。深さは約96cmを測り、断面形は箱状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部にて径18cm・深さ35cmを測るピット１基が検出された。**遺　物**―なし。**備　考**―本土坑はその形状や覆土から陥し穴と考えられる。

第４号土坑(第23図)

位　置―ａ区中央部のBh―17グリッドに位置する。また北側で第３号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆　土**―暗褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**―長軸122cm・短軸82cmを測り、平面形は、開口部・底面ともに楕円形を呈する。深さは約87cmを測り、断面形は箱状を呈する。底面には若干の凹凸が見られる。底面南側にて径・深さとも14cmほどを測るピット１基が検出された。**遺　物**―なし。**備　考**―本土坑はその形状や覆土から陥し穴と考えられる。

第21図　鼻毛石鎌田III遺跡遺構全体図



第1号竪穴状遺構土層説明(A・A')

1 表　土
2 暗褐色土：硬く締まりあり。粘性なし。白色粒子(径0.5～3㎜)を多量、黄色粒子(径0.5～2㎜)を少量含む。
3 暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色粒子(径0.5～3㎜)を部分的に少量、ローム粒(径0.5～1㎜)を微量に含む。
4 暗褐色土＋褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)及びロームブロック(径5～30㎜)を全体に含む。
5 暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色粒子(径0.5～2㎜)を少量、ローム粒(径0.5～4㎜)を微量に含む。
6 暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色粒子(径0.5～1㎜)を少量、ローム粒(径0.5～1㎜)を微量に全体に含む。
7 暗褐色土：締まり・粘性なし。ローム粒(径0.5～2㎜)及び白色・黄色粒子(径0.5～5㎜)を少量全体に含む(この土層から遺構覆土)。
8 暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を全体に、ローム粒(径0.5～1㎜)を少量含む。
9 暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～5㎜)を多量に、ローム粒(径0.5～5㎜)を全体に含む。
10 暗褐色土：締まりややなし。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量、径1～3㎝ほどのブロック状に纏まったローム粒を含む。
11 褐色土：締まりあり。粘性なし。黄色粒子(As-YP：径0.5～10㎜)を多量、白色粒子を極微量、ブロック状に纏まったロームを含む。
12 暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を全体に、ローム粒(径0.5～10㎜)を部分的に含む。

第22図　第1号竪穴状遺構

第5号土坑(第24図)

位　置―a区最北部のAp―18グリッドに位置する。また南側で第6・8号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**規模・形状**―西半部が調査区外にあるため全体の規模や形状は不明であるが、現状で短軸約114cmを測り、平面形は不整形を呈すると見られる。底面は2段に掘り込まれ、深さは上段で約33cm、下段で約66cmを測る。**遺　物**―なし。

第6号土坑(第24図)

位　置―a区北側のAr―18～19グリッドに位置する。また北側で第5・8号土坑に、南側で第7号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆　土**―褐色土を基調とする。**規模・形状**―長軸277cm・短軸263cmを測り、平面形は不整形を呈する。深さは約71cmを測り、断面形は皿状を呈する。**遺　物**―なし。**備　考**―本土坑はその形状や覆土から倒木痕と考えられる。

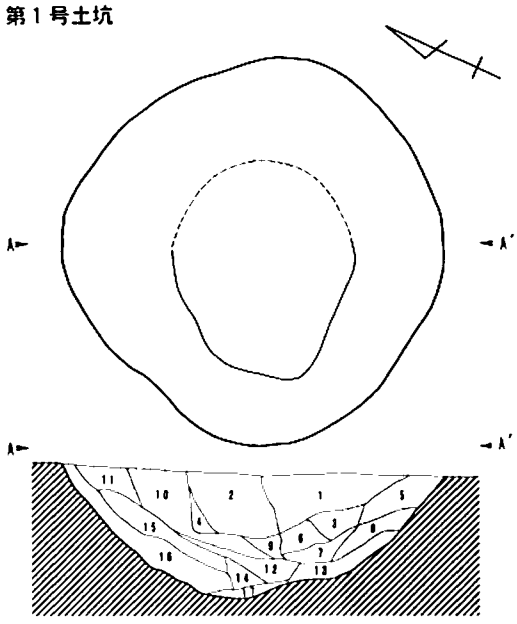
第7号土坑(第24図)

位　置―a区北側のAr―19グリッドに位置する。また北側で第6号土坑に、南側で第9号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆　土**―暗褐色土及び褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**―長軸194cm・短軸126cmを測り、平面形は、開口部は楕円形を、底面は中央部が若干括れた隅丸長方形を呈する。深さは約126cmを測り、断面形は箱状を呈する。底面はほぼ平坦である。**遺　物**―なし。**備　考**―本土坑はその形状や覆土から陥し穴と考えられる。

第8号土坑(第24図)

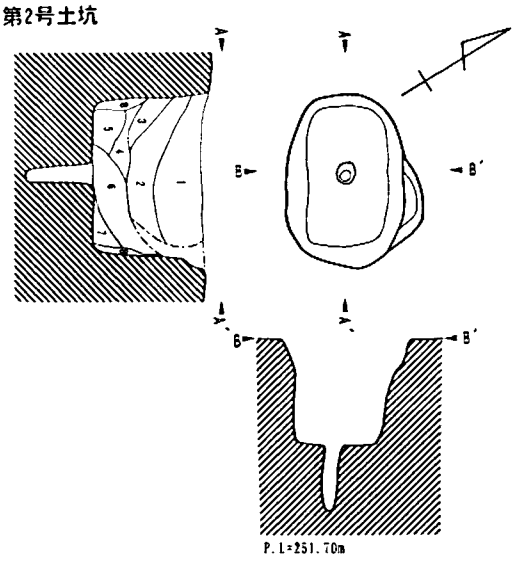
位　置―a区北側西壁際のAq―18グリッドに位置する。また北側で第5号土坑に、南側で第6号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**規模・形状**―西半部が調査区外にあるため全体の規模や形状は不明であるが、現状で短軸約66cmを測り、平面形は不整形を呈すと見られる。底面は2段に掘り込まれ、深さは上段で約35cm、下段で約53cmを測り、東壁はオーバーハングする。**遺　物**―なし。

第１号土坑



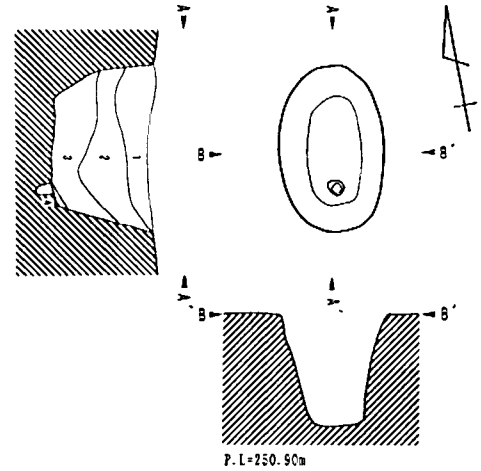
第１号土坑土層説明(A・A′)
1　黒 色 土
2　褐 色 土：YPを含む巨大なロームブロック。
3　黒褐色土：やや色調暗い。
4　褐 色 土：やや軟質。
5　黒褐色土
6　黒褐色土：若干ロームブロックを含む。
7　黒 色 土
8　暗褐色土：ローム粒・ロームブロックを含む。
9　明褐色土：ロームブロック・黒ボク土を含む。
10　褐 色 土：軟質。締まりなし。BP混じりのローム。
11　褐 色 土：ロームブロック。
12　褐 色 土：９層に類するが、９層よりやや締まりなし。
13　黒褐色土：ローム粒を含む。
14　褐 色 土：ロームブロック主体。
15　褐 色 土：ロームブロック・黒ボク土ブロックを含む。
16　暗褐色土：ロームブロックを多量に含む。
17　褐 色 土：14層に類するが、黒ボク土をやや含む。

第2号土坑



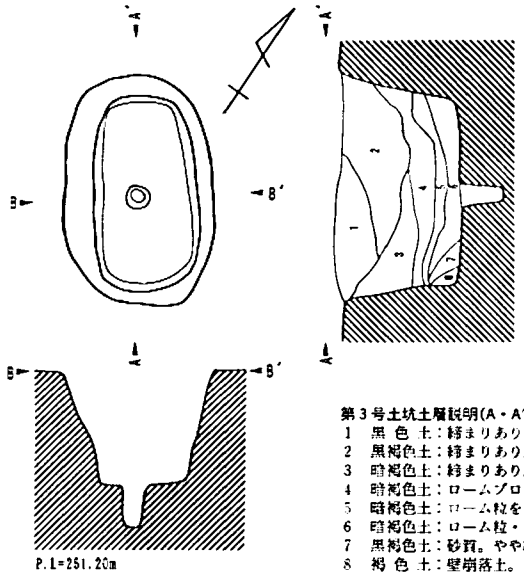
第２号土坑土層説明(A・A′)
1　黒 色 土：締まりあり。
2　黒褐色土：締まりあり。ローム粒を多量に含む。
3　黒褐色土：締まりあり。ロームブロックを含む。
4　暗褐色土：締まりあり。ロームブロック主体。
5　暗褐色土：やや砂質。締まりなし。
6　暗褐色土：４層に類するが、ロームブロックの量は４層より少ない。
7　暗褐色土：６層に類するが、締まりがあり、若干ローム粒を含む。
8　褐 色 土：壁の崩落土。

第４号土坑



第４号土坑土層説明(A・A′)
1　黒褐色土：締まりあり。
2　暗褐色土：締まりあり。ローム粒を含む。
3　暗褐色土：締まりあり。ローム粒・ロームブロックを含む。
4　褐 色 土：壁の崩落土。

第３号土坑

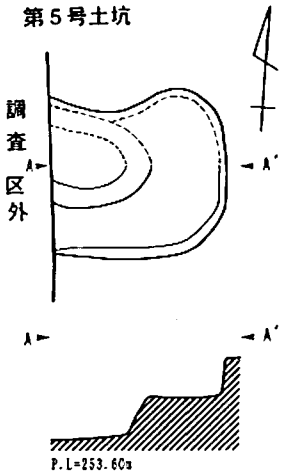


第３号土坑土層説明(A・A′)
1　黒 色 土：締まりあり。
2　黒褐色土：締まりあり。ローム粒を含む。
3　暗褐色土：締まりあり。ローム粒・ロームブロックを含む。
4　暗褐色土：ロームブロック主体。
5　暗褐色土：ローム粒を多量に含むが、ロームブロックは含まない。
6　暗褐色土：ローム粒・ロームブロックを含む。
7　黒褐色土：砂質。やや締まりなし。若干ローム粒を含む。
8　褐 色 土：壁崩落土。

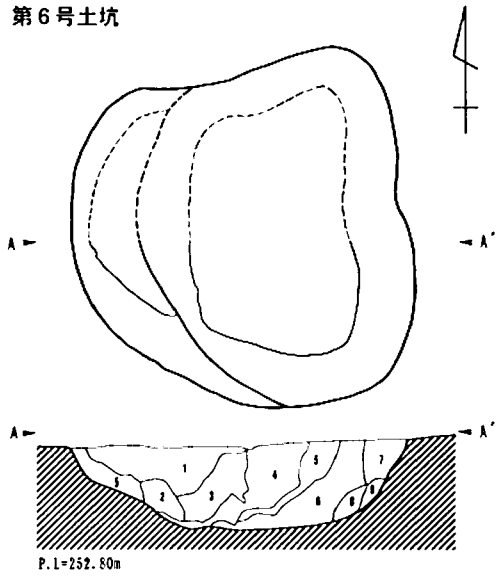
0　2m

第23図　第１～４号土坑

第5号土坑



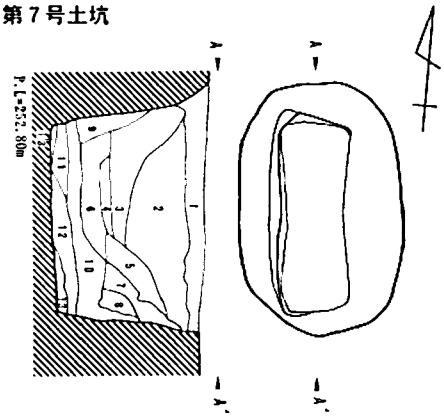
第6号土坑



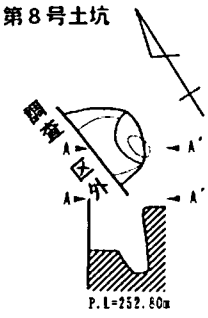
第6号土坑土層説明(A・A′)

1 暗褐色土：締まりややあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を全体に含む(上層に多い)。
2 暗褐色土：締まり・粘性なし。ローム粒子(径0.5～10㎜)を少量及び、ロームブロックを下層に少量含む。
3 黒褐色土：締まり・粘性なし。ローム粒(径1～5㎝)及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を斑に全体に含む。
4 褐色土：締まりややあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～10㎜)を全体に含む。
5 褐色土：締まり・粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～10㎜)及び黒色粒子(径3～5㎝)を少量、橙色粒子(径5～10㎜)を全体に含む。
6 褐色土：締まり・粘性なし。黒色粒子(径0.5～20㎜)を多量に、橙色粒子を斑に全体的に含む。
7 褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を全体に、黒色粒子(径0.5～3㎜)を部分的に、橙色土を球状にそれぞれ含む。
8 褐色土：締まりややあり。粘性なし。6層に類すが、8層の方が締まりあり。黒色粒子(径2～4㎜)を全体的に、橙色粒子を不定形のブロック状に、白色粘土化した土(径2㎝)を部分的に球状に、それぞれ含む。
9 褐色土：締まりややあり。粘性なし。黒色粒子(径0.5～3㎜)を全体に、白色粘土化した土を部分的に少量含む。

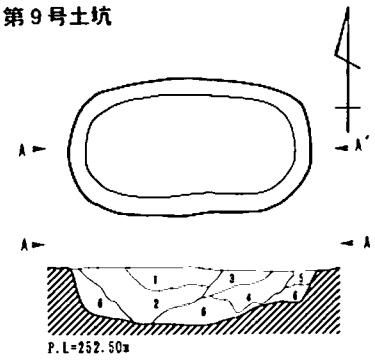
第7号土坑



第8号土坑



第9号土坑



第7号土坑土層説明(A・A′)

1 黒褐色土：締まりややあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～2㎜)及び白色粒子(径0.5～2㎜)、赤色粒子(径0.5㎜・スコリアか?)をそれぞれ少量ずつ全体に含む。
2 黒褐色土：締まりややあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を全体に、ロームブロック(径5～10㎜)及び暗褐色土(径10～20㎜)・白色粒子(径0.5～1㎜)をそれぞれ少量、赤色粒子(径0.5～1㎜)を微量に含む。
3 暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ロームブロック(径5～30㎜)及びローム粒を多量に、白色粒子(径0.5～2㎜)を少量に全体に含む。
4 暗褐色土：締まりややあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)及びロームブロック(径5～10㎝)を多量に、白色粒子(径0.5～2㎜)を少量に全体に含む。
5 暗褐色土：締まりややあり。粘性なし。ローム粒子(径0.5～5㎜)及びロームブロック(径0.5～30㎜)、白色粒子(径0.5～3㎜)をそれぞれ少量全体に含む。
6 暗褐色土：締まり・粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)をブロック状に全体に、ロームブロック(径5～100㎜)を下位に少量、白色粒子(径1～3㎜)を少量全体に含む。
7 暗褐色土：締まりややあり。粘性なし。ローム粒をブロック状に全体に、ロームブロック(径20～30㎜)及び白色粒子(径1～3㎜)を少量含む。
8 暗褐色土：やや締まりあり。粘性なし。ブロック状のローム粒を全体に、ロームブロック(径30～50㎜)を下層に少量、白色粒子(径1～5㎜)を少量含む。
9 褐色土：締まりあり。粘性なし。ロームブロック主体で、暗褐色土を少量含む。
10 褐色土：締まりややあり。粘性なし。ロームブロック主体で、部分的に暗褐色土を含み、白色粒子(径1～3㎜)を少量含む。
11 褐色土：締まりなし。粘性あり。白色粘土化したロームブロック主体で、黒色粒子(径0.5～3㎜)を全体に、黒褐色土ブロックを少量含む。ローム粒(径5㎜)が部分的に斑点状に縛まっている。
12 褐色土：締まりややなし。粘性あり。白色粘土化したロームを主体とする。斑点状に縛まったローム粒(径5㎜前後)及び少量の黒褐色土ブロックを部分的に含む。
13 黒褐色土：締まりなし。粘性あり。黒褐色土が主体。ローム粒を上層にブロック状に含む。白色粒子(径0.5～3㎜)を少量含む。

第9号土坑土層説明(A・A′)

1 黒褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を全体に、褐色土ブロック(径3㎝)を部分的に含む。
2 黒褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～5㎜)を全体的に多量に、ロームブロック(径7㎝以下)を部分的に、それぞれ含む。
3 黒褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～5㎜)を全体に、橙色粒子(径0.5～2㎜)を少量含む。
4 暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～10㎜)を多量に、褐色土を下層に含む。
5 褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を多量に含み、6層を下層に含む。
6 褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム及び白色・黄色粒子(径0.5～5㎜)を多量に、部分的に2層・4層が斑に含まれる。

0 2m

第24図　第5～9号土坑

第９号土坑(第24図)

位　置―ａ区北側のAt―18グリッドに位置する。また北側で第７号土坑に、南側で第１号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆　土**―黒褐色土及び褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**―長軸189cm・短軸107cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは約46cmを測り、断面形は箱状を呈する。断面図より、東壁付近に若干の底面の高まりが看取される。**遺物**―なし。

第10号土坑(第25図)

位　置―ａ区北側のBa―20グリッドに位置する。また西側で第１号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆　土**―暗褐色土及び褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**―長軸167cm・短軸97cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは約42cmを測り、断面形は箱状を呈する。**遺　物**―なし。

第11号土坑(第25図)

位　置―ｃ区最北部のCp―４グリッドに位置する。また南東部で第１号竪穴状遺構に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆　土**―暗褐色土及び褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**―長軸157cm・短軸104cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは約50cmを測り、断面形は箱状を呈する。**遺　物**―なし。

第12号土坑(第25図)

位　置―ｃ区中央部のCq―４グリッドに位置する。また北側で第１号竪穴状遺構に、南側で第13・15号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**規模・形状**―長軸87cm・短軸35cmを測り、平面形は不整形を呈する。底面は２段に掘り込まれ、上段で深さ10～17cm、下段で36cmを測る。**遺　物**―なし。

第13号土坑(第25図)

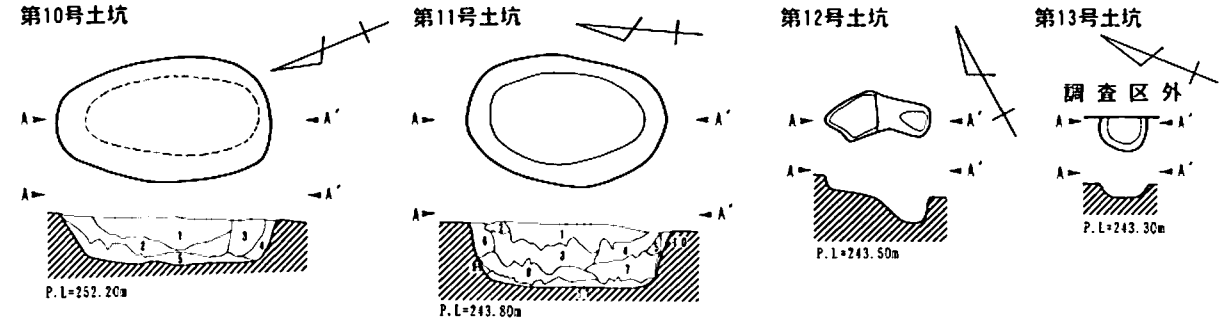
位　置―ｃ区中央部東壁際のCq―５グリッドに位置する。また北西部で第１号竪穴状遺構及び第12号土坑に、西側で第15号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**規模・形状**―南東部が調査区外にあるため全体の規模や形状は不明だが、径37cmほどの円形を呈するものと考えられ、深さは約11cmを測る。**遺　物**―なし。

第14号土坑(第25図)

位　置―ｃ区最南部のCr～Cs―４グリッドに位置する。また北東方向で第13・15号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆　土**―暗褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**―長軸184cm・短軸107cmを測り、平面形は北東壁の張った楕円形を呈する。深さは最深部で42cmを測り、断面形は皿状を呈する。**遺　物**―なし。

第15号土坑(第25図)

位　置―ｃ区中央部東側のCq―５グリッドに位置する。また北側で第１号竪穴状遺構及び第12号土坑に、東側で第13号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**規模・形状**―径

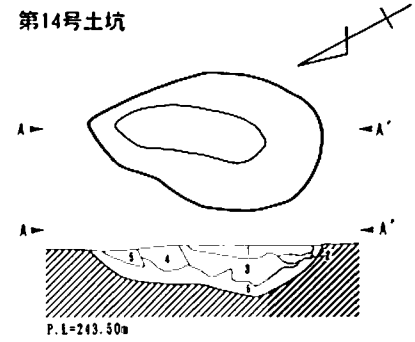


第10号土坑土層説明(A・A')

1　黒褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～5㎜)を全体に含む。
2　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を全体に含む(黄色粒子の方が多い)。ロームが部分的に浮いている。
3　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～5㎜)を全体に含み、下層にロームをブロック状に含む。
4　褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム及び黄色粒子(径0.5～5㎜)を多量に、白色粒子(径0.5～1㎜)を少量含む。
5　褐色土：締まりあり。粘性なし。ロームを主体とし、黄色粒子(径1～2㎜)を多量に、白色粒子(径1～2㎜)を少量含む。部分的に上位の土層が沈んでいる。

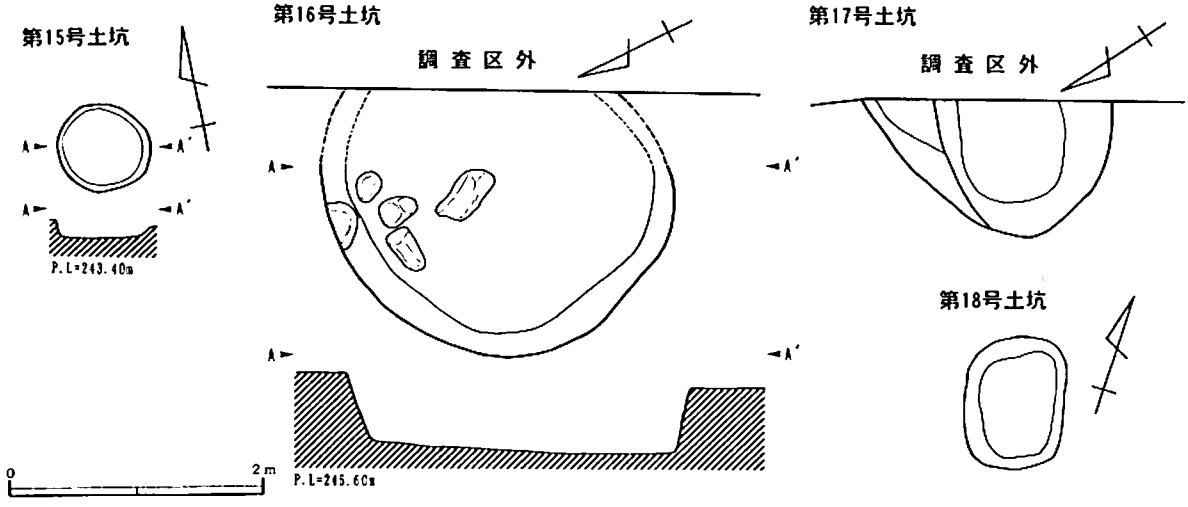
第11号土坑土層説明(A・A')

1　黒褐色土：締まりややなし。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)及び少量のローム粒(径0.5～2㎜)を全体に含む。
2　暗褐色土：締まりややなし。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を多量に、ローム粒(径0.5～1㎜)を少量それぞれ全体に含む。
3　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～5㎜)を2層より多量に、ローム粒(径0.5～2㎜)を全体に含む。
4　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。部分的にブロック状に堆積した白色・黄色粒子(径0.5～4㎜)及びローム粒(径0.5～3㎜)を少量含む。
5　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～3㎜)及び多量の白色・黄色粒子(径0.5～4㎜)を全体に含む。
6　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～3㎜)及び白色・黄色粒子(径0.5～4㎜)を多量に、赤色粒子(径0.5～3㎜)を極少量含む。
7　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム主体。ローム粒(径0.5～5㎜)及び白色・黄色粒子(径0.5～4㎜)を多量に、赤色粒子(径0.5～1㎜、スコリアか？)を極微量に含む。
8　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ロームを多く含む層。部分的にブロック状に堆積したローム粒(径0.5～5㎜)及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を多量に含む。
9　褐色土：締まりややなし。粘性なし。ロームがブロック状に堆積している土層。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量、暗褐色土を若干含む。
10　褐色土：締まりあり。粘性なし。多量の白色粒子(径0.5～1㎜)及び少量の黄色粒子(径0.5～3㎜)を含むローム主体の土層。
11　褐色土：締まりあり。粘性なし。ブロック状のローム粒が全体的に堆積している。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量、暗褐色土を若干含む。



第14号土坑土層説明(A・A')

1　暗褐色土：ローム粒(径0.5～10㎜)を少量、白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を微量、部分的に赤褐色土を斑点状に含む。
2　暗褐色土：締まり・粘性なし。ローム粒(径0.5～20㎜)を少量、白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を微量、部分的に赤褐色の土層を斑点状に含む(1層より少量)。
3　暗褐色土：締まり・粘性なし。ローム粒(径0.5～20㎜)を全体に、白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を微量含む。上層に赤褐色土を斑点状に含む。
4　暗褐色土：締まり・粘性なし。ローム粒(径0.5～10㎜)を多量、ロームブロック(径1～3cm)及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量、上層に赤褐色土を斑点状に含む。
5　暗褐色土：やや灰色味を帯びる。締まりややなし。粘性なし。ローム粒(径0.5～3㎜)を多量、灰色がかったロームブロック(径3～5cm)や上層には赤褐色土を少量、白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を微量含む。
6　褐色土：色調やや暗い。締まりあり。粘性なし。ロームブロック主体。白色・黄色粒子(径0.5～5㎜、軽石)を多量、赤褐色土を斑点状に少量含んだ暗褐色土(締まり・粘性なし)を少量含む。



第25図　第10～18号土坑

70cmほどを測り、平面形は円形を呈する。深さは約８cmを測る。**遺　物**―なし。

第16号土坑(第25図)

位　置―ｂ区中央部東壁際のCf―10グリッドに位置する。周辺では遺構は検出されておらず、単独で占地する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**規模・形状**―東側約１/３ほどが調査区外にあるため全体の規模や形状は不明だが、径270cmほどの円形を呈すると考えられる。深さは約64cmを測り、断面形は箱状を呈する。底面はほぼ平坦で、北側から南側に向かって若干の傾斜が看取される。**遺　物**―土坑中央部から北壁にかけて、大型の自然礫数個が検出された。

第17号土坑(第25図)

位　置―ａ区南側西壁際のBs―12グリッドに位置する。また東側で第18号土坑に、南側で第25号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**規模・形状**―西半部が調査区外にあるため全体の規模や形状は不明だが、長軸200cmほどの楕円形を呈するものであろうか。深さ及び断面形は不明である。**遺　物**―なし。

第18号土坑(第25図)

位　置―ａ区南側東壁寄りのBt―14～15グリッドに位置する。また西側で第17号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**規模・形状**―長軸106cm・短軸78cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。深さ及び断面形は不明である。**遺　物**―なし。

第19号土坑(第26図)

位　置―ａ区南側東壁寄りのBq―16グリッドに位置する。また北側で第20号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**規模・形状**―長軸227cm・短軸137cmを測り、平面形は不整楕円形を呈する。底面は２段に掘り込まれ、上段で深さ37cmほど、下段で53cmほどを測り、下段の底面の平面形は三日月形を呈する。また下段の底面はほぼ平坦で、底面中央部及び西壁寄りのところで長軸方向に列んだ２基のピットが検出された。いずれのピットも径10～12cm・深さ12cmほどを測る。**遺　物**―なし。

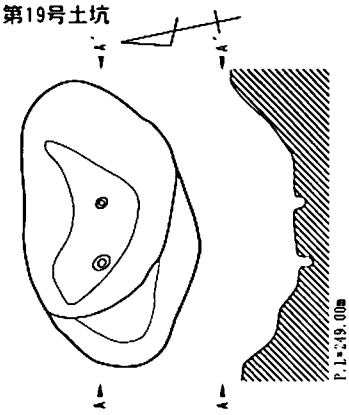
第20号土坑(第26図)

位　置―ａ区南側中央部寄りのBp―16グリッドに位置する。また南側で第19号土坑に隣接する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**規模・形状**―長軸57cm・短軸45cmを測り、平面形は南壁の張った楕円形を呈する。深さ及び断面形は不明である。**遺　物**―なし。

第21号土坑(第26図)

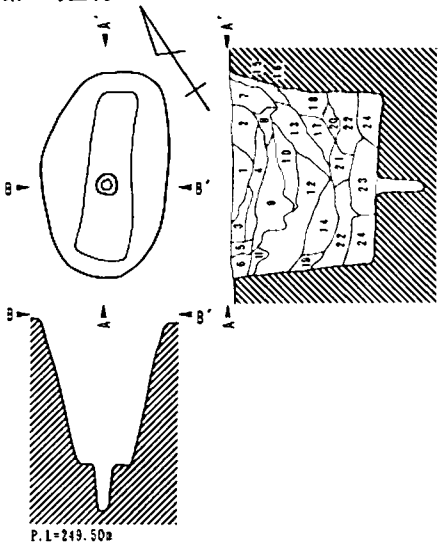
位　置―ａ区中央部南側のBn―15グリッドに位置する。**重複関係**―なし。**遺存状態**―良好である。**覆土**―暗褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**―長軸162cm・短軸100cmを測り、平面形は、開口部が北西壁の張った楕円形を、底面は隅丸長方形を呈する。深さは約118cmを測り、断面形は箱状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部にて径16cm・深さ36cmほどを測るピット１基が検出された。**遺物**―なし。**備　考**―本土坑はその形状や覆土から陥し穴と考えられる。

第19号土坑



第20号土坑

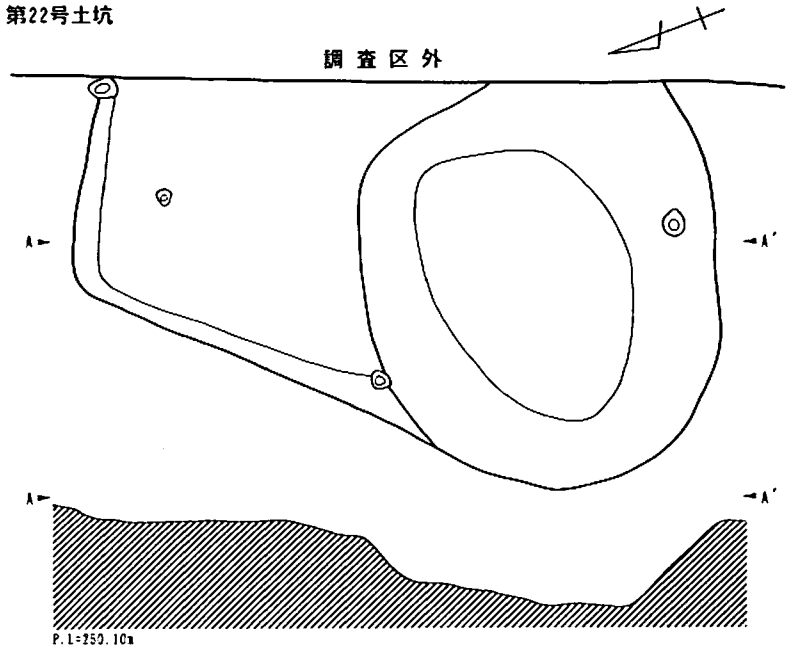
第21号土坑



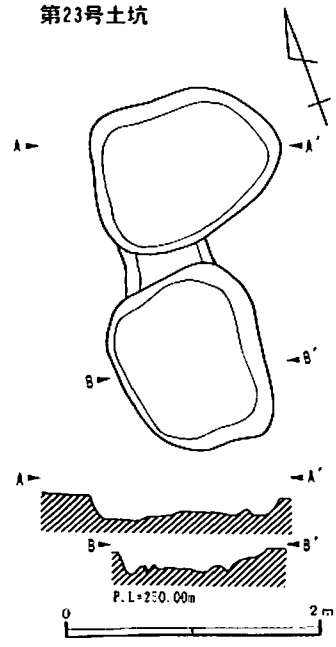
第21号土坑土層説明(A・A')

1　黒褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜、軽石？)を少量、ロームブロック(径1～1.5cm)を微量含む。
2　黒褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量、ローム粒を微量に含む。
3　黒褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量、ロームブロック(径5～10㎜)を微量含む。
4　黒褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～3㎜)及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量含む(1層から3層より少ない)。
5　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を少量、ローム粒(径0.5～2㎜)及び橙色粒子(径0.5～1㎜、スコリア？)を微量に含む。
6　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～3㎜)及び白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を少量、ロームブロック(径1～1.5㎜)を微量含む。
7　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～10㎜)及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を多量、ロームブロック(径1cm)を微量に含む。
8　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～3㎜)を多量、ロームブロック(径1cm)及び白色・黄色粒子(径0.5～1㎜)を微量に含む。
9　暗褐色土：締まりあり。粘性あり。ローム粒(径0.5～5㎜)及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量、橙色粒子(径0.5～3㎜)を微量に含む。
10　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を多量、白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を微量に含む。
11　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～3㎜)を少量、白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を微量に含む。
12　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を多量、ロームブロック(径1～2cm)を少量、白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を微量に含む。
13　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。部分的に纏まったローム粒(径0.5～5㎜)を多量、ロームブロック(径1～1.5cm)及び白色・黄色粒子(径0.5～5㎜)を微量に含む。
14　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を多量、ロームブロック(径1～5cm)を少量、白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)及び橙色粒子(径0.5～2㎜)を微量に含む。
15　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。部分的に纏まったローム粒(径0.5～5㎜)を多量、ロームブロック(径5～10㎜)及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量に含む。
16　暗褐色土＋褐色土：締まりあり。粘性なし。白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量含むローム粒ブロックを多量、ローム粒(径0.5～3㎜)を少量含む。
17　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を多量、白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量、ロームブロック(径5～6cm)を微量に含む。
18　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を多量、ロームブロック(径1～3cm)及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を少量含む。
19　暗褐色土＋褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を多量、白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を少量含む。
20　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～3㎜)を少量、白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を微量含む。
21　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～3㎜)を少量(20層より多い)、白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を微量含む。
22　暗褐色土＋褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を多量、白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を微量含む。
23　暗褐色土：やや灰色味を帯びた土層。締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を多量、白色・黄色粒子(径0.5～2㎜)を少量含む。
24　暗褐色土：締まりあり。粘性なし。ローム粒(径0.5～5㎜)を少量、ロームブロック(径1～3cm)及び白色・黄色粒子(径0.5～3㎜)を微量含む。

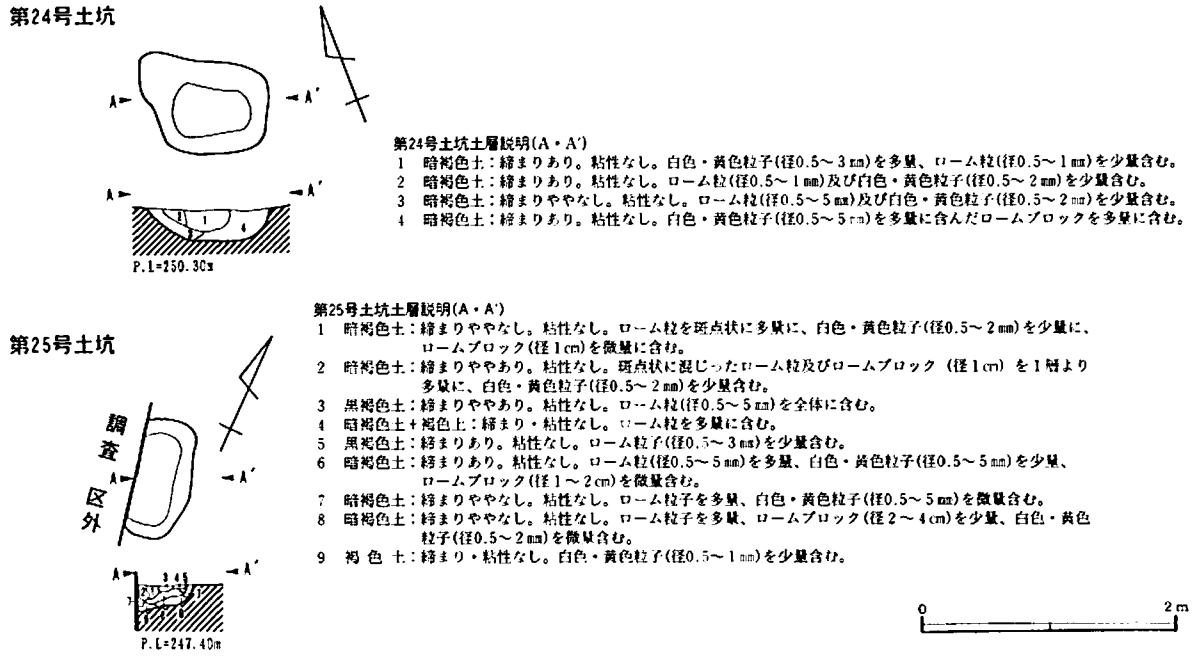
第22号土坑



第23号土坑



第26図　第19～23号土坑



第27図　第24・25号土坑

第22号土坑(第26図)

位　置—a区中央部東壁際のBl—18グリッドに位置する。また北側で第24号土坑に、西側で第23号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**—なし。**遺存状態**—良好である。**規模・形状**—土坑東側が調査区外にあるため全体の規模や形状は不明だが、長軸約500cmを測り、平面形は不整形を呈するものと見られる。底面は2段に掘り込まれ、上下段とも底面には凹凸が見られる。深さは上段で4～28cm、下段の最深部で81cmを測る。**遺　物**—なし。**備　考**—本土坑はその形状から倒木痕と考えられる。

第23号土坑(第26図)

位　置—a区中央部のBl—17グリッドに位置する。また東側で第22号土坑に隣接する。**重複関係**—なし。**遺存状態**—良好である。**規模・形状**—平面形は不整形を呈し、不整形の土坑2基を連結したような形状を呈する。長軸280cm・短軸68～148cmを測る。深さは22cmほどで、底面にはかなりの凹凸が見られ、断面形は不整形を呈する。**遺　物**—なし。**備　考**—本土坑はその形状から倒木痕と考えられる。

第24号土坑(第27図)

位　置—a区中央部のBk—18グリッドに位置する。また南側で第22・23号土坑に隣接する。**重複関係**—なし。**遺存状態**—良好である。**覆　土**—暗褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**—長軸105cm・短軸72cmを測り、平面形は北東隅の張った隅丸長方形を呈する。深さは26cmを測り、断面形は皿状を呈する。**遺　物**—なし。

第25号土坑(第27図)

位　置—a区最南部、南西壁際のCa—12グリッドに位置する。また北側で第17号土坑に隣接する。**重複関係**—なし。**遺存状態**—良好である。**覆　土**—暗褐色土及び黒褐色土を基調とし、自然堆積を呈する。**規模・形状**—土坑西側が調査区外にあるため全体の形状は不明であるが、長軸96cmほどの不整楕

円形を呈するとみられる。深さは21cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺　物ーなし。

第5節　まとめ

鼻毛石鎌田II遺跡及び同III遺跡の調査では、縄文時代の住居址や土坑、そして縄文時代の遺物包含層等が検出された。

鼻毛石鎌田II遺跡は、早期～後期にかけての資料が出土しており、この間断続的ながらもこの地域で生活が営まれていたことが推測される。そして中期後半～末葉に集落としての最盛期を迎えたと考えられ、住居址も検出されている。この住居址は出土遺物こそ少ないものの、炉体土器から加曽利EI式期の住居址と考えられる。現在のところ村内では該期の集落は検出されていないが、包含層出土遺物で第14図22や同図23などをはじめとして、加曽利EI～EII式に比定される遺物が多く検出されていることから、隣接する地域に集落の中心部が存在することも想定される。そして南方800m程のところで中期前半～中葉の環状集落である鼻毛石中山遺跡が存在することから、中期全般にわたって神沢川右岸の地域を生活域として活発に利用していたことが窺える。

また包含層出土遺物で注目されるのは、早期中葉・田戸上層式併行期の土器(第13図1～3)の出土で、本村では初見の資料である。県内でも該期の資料の出土事例が少なく、貴重な資料となろう。

鼻毛石鎌田III遺跡で検出された土坑には、所謂「陥し穴状土坑」が含まれており、第2～4・7・21号土坑がこれに当たる。平面形としては楕円形ないし隅丸長方形を呈し、底面中央にピットを1基持つものが多い。陥し穴状土坑は、苗ヶ島大畑遺跡や柏倉遺跡群で多量に検出されており、標高400m前後の台地上に濃密に分布し、陥し穴猟を目的として活発に利用されていたことが判明しつつある。しかし今回の調査により、標高250m以下の、比較的標高の低い場所で陥し穴状土坑が検出され、周辺でも、鼻毛石赤坂I遺跡や鼻毛石中山遺跡などで検出されていることから、標高550m以下の山麓部全域が、陥し穴猟を目的とした利用が活発になされていたことが窺える。また、鼻毛石赤坂I遺跡や鼻毛石鎌田I・III遺跡、鼻毛石中山遺跡などの神沢川右岸に立地する遺跡で検出されるのは、楕円形や隅丸長方形を基本とする陥し穴状土坑のみで、所謂「Tピット」と呼ばれる長楕円形を呈する土坑は検出されていない。村内で、「Tピット」は苗ヶ島大畑遺跡や同II遺跡などの高標高の場所で検出されているだけでなく、市之関吉ヶ沢遺跡など低標高の場所でも検出されている。このため一概に標高差に起因するとは言えない。細野氏は、「台地の広さ」や「平坦面か傾斜地か」、「水系までの距離」などを陥し穴を構築する際の要因として挙げているものの(細野 1994)、未だ不明な点も多く、その選択性については今後の課題となろう。

引用・参考文献

細野高伯　1994　「赤城山南麓の陥し穴について」　『苗ヶ島大畑遺跡』　宮城村教育委員会

第５章　自然科学分析

宮城村鼻毛石鎌田遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．鼻毛石鎌田遺跡の地質とテフラ

１．はじめに

赤城山南麓荒砥川扇状地上に位置する鼻毛石鎌田遺跡の発掘調査では、火山灰土の良好な土層断面が作成された。そこで地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、テフラ組成分析を合わせて行い、土層の層位や形成年代さらにその形成要因に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、地点①および地点②の２地点である。

２．土層層序

(1)　地点①

ここでは、荒砥川扇状地を覆う火山灰土（いわゆるローム層）をよく観察することができた。この地点では、下位より灰色砂礫層(層厚20cm以上，礫の最大径320mm)、礫混じり褐色砂質土(層厚28cm)、橙色軽石層（層厚５cm，軽石の最大径６mm)、灰褐色土（層厚８cm)、成層したテフラ層（層厚4.7cm)、褐色土（層厚13cm)、橙色軽石層（層厚４cm，軽石の最大径４mm)、褐色土（層厚７cm)、褐色土（層厚15cm)、黄白色軽石に富む褐色土（層厚16cm，軽石の最大径４mm)、黄色軽石混じり褐色土（層厚11cm，軽石の最大径５mm)、黄色軽石に富む褐色土（層厚７cm，軽石の最大径８mm)、暗灰色土（層厚11cm)、暗褐色土（層厚15cm)、褐色土（層厚21cm，いわゆる淡褐色土)、黒褐色土（層厚14cm)、黄色軽石に富む黒色土（層厚９cm，軽石の最大径３mm)、作土（層厚18cm）が認められた（第28図)。

これらの土層のうち、最下位の灰色砂礫層は、荒砥川扇状地を構成する堆積物の最上部に相当すると考えられる。成層したテフラ層は、下部の橙褐色細粒火山灰層（層厚0.7cm）と上部の黒灰色粗粒火山灰混じり橙色軽石層（層厚４cm）から構成される。このテフラを含む下位の３層のテフラ層は、層相などから約1.9-2.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，新井，1962，早田，未公表資料）に由来すると考えられる。その上位の黄白色軽石は、層位や岩相などから約1.8万年前*1に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石(As-Sr，町田ほか，1984)、または1.7万年前*1に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第１軽石(As-Ok1，中沢ほか，1984，町田・新井，1992，早田，1994)に由来すると考えられる。その上位の黄色軽石は、層位や岩相などから約1.3-1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP，新井，1984，町田・新井，1992）に由来すると考えられる。さらに上位より２層目の黄色軽石は、岩相から３世紀終末～４世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As-C，荒牧，1968，新井，1979，友廣，1988，若狭，2000）に由来すると考えられる。

(2)　地点②

この地点では、荒砥川扇状地を構成する堆積物と表層の黒土をよく観察することができた。ここで観察できる堆積物は、下位より灰色土石流堆積物（層厚23cm以上，礫の最大径110mm)、黄褐色土（層厚11cm)、礫混じり黄灰色シルト層（層厚17cm，礫の最大径13mm)、礫混じり黄白色砂質シルト層（層厚11cm)、亜円礫混じり黄白色土（層厚15cm）よりなる（第29図)。

その上位には、下位より黄白色土（層厚８cm）、成層したテフラ層（層厚16cm，11層）、褐色土（層厚16cm，10層）、暗褐色土（層厚９cm，９層）、黒褐色土（層厚24cm，８層）、黄白色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚21cm，７層）、黄白色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚11cm，６層）、黄灰色土のブロックを混じえる黄白色粗粒火山灰混じり褐色土（層厚16cm，５層）、黒褐色土（層厚８cm，４層）、黄色軽石に富む黒褐色土（層厚16cm，軽石の最大径７mm，３ｃ層）、白色軽石混じり黒色土（層厚11cm，軽石の最大径57mm，石質岩片の最大径27mm，３ｂ層）、黒色土（層厚12cm，３ａ層）、成層した火山灰層（２層）、灰褐色土（層厚12cm）、暗褐色表土（層厚26cm，表土）が認められる。

２層の成層したテフラ層のうち下位のテフラ層（11層）は、下部の灰色粗粒火山灰層（層厚12cm）と上部の成層した黄褐色細粒火山灰層からなる。このテフラ層は、層相からAs-YPに同定される。一方、上位の成層したテフラ層（２層）は、下位より青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚３cm）、桃色細粒火山灰層（層厚３cm）の組み合わせからなる。このテフラ層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B，荒牧，1968，新井，1979）に同定される。

また３ｃ層と３ｂ層中に含まれる軽石は、各々その岩相からAs-Ｃおよび６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1979，町田・新井，1992）に由来すると考えられる。

３．テフラ組成分析

(1) 分析試料と分析方法

地点②で認められた上下の土層と比較して若干色調の明るい土層（５層）は、淡色黒ボク土（早田，1990）と呼ばれる土層である。この土層は赤城火山一帯のみならず、群馬県の平野部とその周辺で認められる。それにも関わらず、その成因についてはまだ不明な点が多い。そこで火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を行い、火山ガラスや重鉱物の組成の点から成因に関する資料を収集することにした。分析の対象とした試料は基本的に５cmごとに採取された土壌試料のうち、As-Ｃより下位の５cmおきの試料11点である。分析の手順は次の通りである。

１）試料15ｇを秤量。
２）超音波洗浄装置により泥分を除去。
３）80°Ｃで恒温乾燥。
４）分析篩により１/４－１/８mmの粒子を篩別。
５）250粒子について偏光顕微鏡下で観察し、火山ガラスの形態別組成を求める（火山ガラス比分析）。
６）重鉱物250粒子について偏光顕微鏡下で観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

(2) 分析結果

地点②における分析結果について、テフラ組成ダイヤグラムを第30図に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の内訳を第５表および第６表に各々示す。火山ガラスでは、試料27には、とくに多くの中間型ガラス（18.0%）と軽石型ガラス（12.0%）が認められる。これは、下位のAs-YPに由来する可能性が大きい。一方、淡色黒ボク土の試料11でも中間型や軽石型ガラスが含まれているものの、その火山ガラスの比率は上下の試料と比較して大きくない。

重鉱物組成では、淡色黒ボク土層準の試料11に斜方輝石（66.0%）や単斜輝石（20.0%）が比較的多く含まれている。しかし、これについても上下の試料に比較してとくに違いは認められない。以上

のことから、テフラ組成上、淡色黒ボク土の層準にとくに上下の試料と比較して大きな違いは認められないようである。つまり淡色黒ボク土層準に、特徴的なテフラ粒子が多く含まれることはなく、淡色黒ボク土がテフラの降灰により形成された痕跡は今回の分析では認められない。

4．小　結

鼻毛石鎌田遺跡において、地質調査とテフラ組成分析を合わせて行った。その結果、下位より浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，約1.9-2.4万年前*1）、浅間白糸軽石（As-Sr，約1.8万年前）あるいは浅間大窪沢第1軽石（As-Ok1，約1.7万年前*1）、浅間板鼻黄色軽石（As-YP，約1.3-1.4万年前*1）、浅間C軽石（As-C，3世紀終末～4世紀初頭）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA，6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B，1108年）が認められた。地点②の淡色黒ボク土については、テフラ組成上、テフラの降灰に伴って形成されたという根拠は認められなかった。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代.

文　献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要，自然科学編，10，p.1-79

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.45，65p.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学―考古学研究と関係するテフラのカタログ―．古文化財編集委員会編「文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒斑～前掛期のテフラ層序．第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69-70.

坂口　一（1986）榛名火山二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.

早田　勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.

早田　勉（1990）群馬県の自然と風土．群馬県史通史編，1，p.37-129.

早田　勉（1994）群馬の示標テフラと自然環境．笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会編「群馬の岩宿時代の変遷と特色」，p.20-24.

友廣哲也（1988）古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」，p.325-336.

若狭　徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき．かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く―古墳が成立する頃の土器の交流」，p.41-43.

第5表　地点②の火山ガラス比分析ダイヤグラム

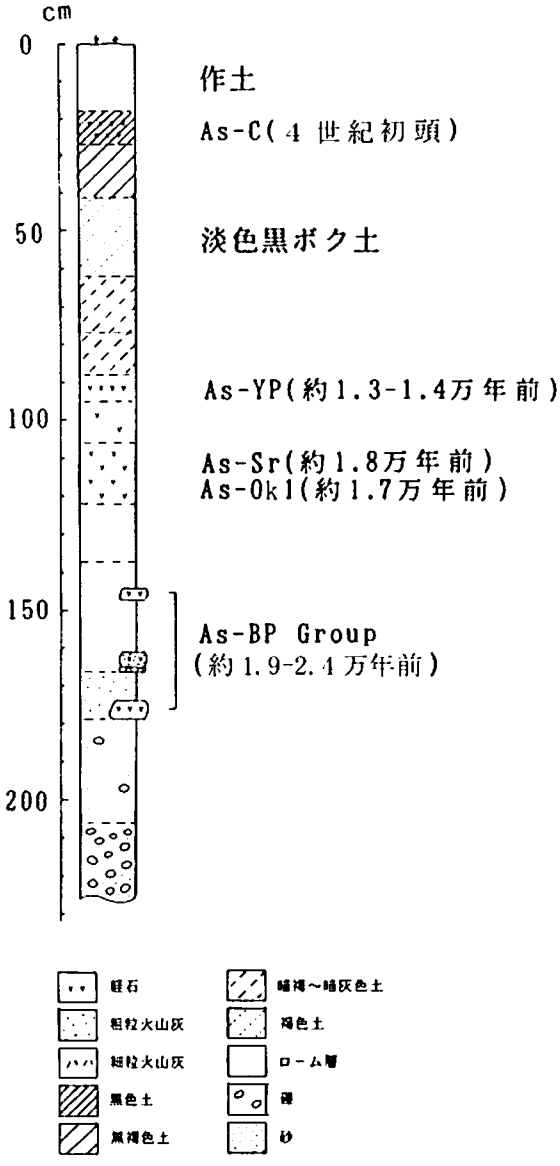
試料	bw	md	pm	その他	合計
7	2	21	11	216	250
9	2	41	16	191	250
11	2	26	7	215	250
13	3	34	9	204	250
15	0	22	15	213	250
17	2	23	7	218	250
19	3	37	9	201	250
21	1	32	17	199	250
23	2	36	16	196	250
25	3	34	14	199	250
27	0	45	30	175	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型．

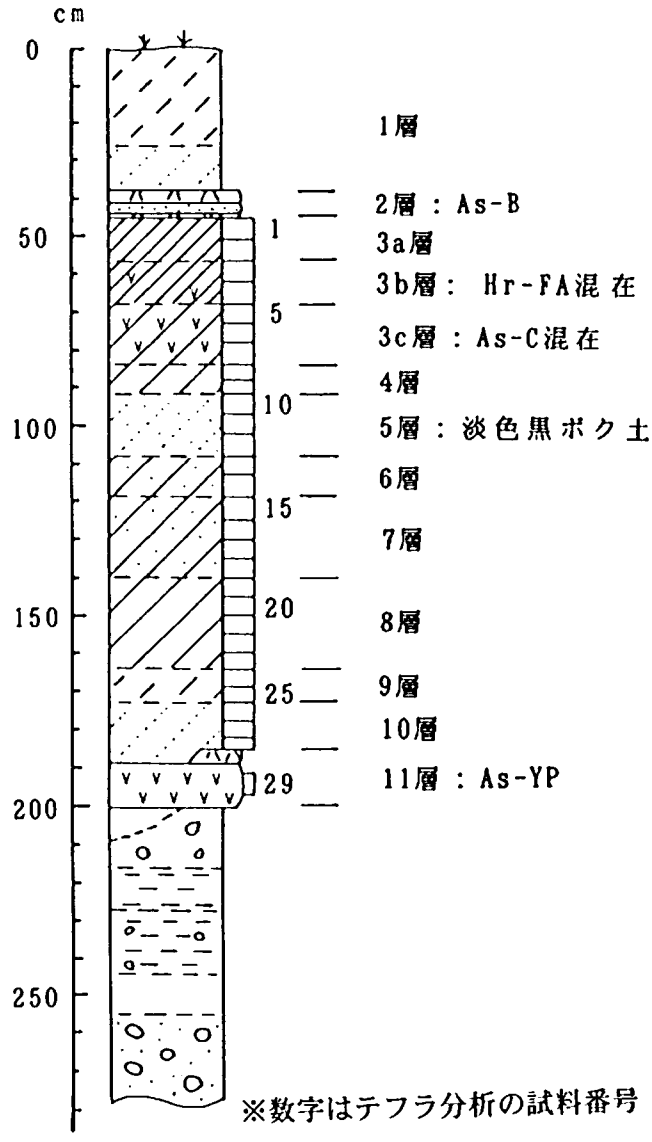
第6表　地点②の重鉱物組成ダイヤグラム

試料	ol	opx	cpx	ho	mt	その他	合計
7	10	181	36	4	13	6	250
9	2	173	52	1	17	5	250
11	2	165	50	3	22	8	250
13	0	174	49	1	21	4	250
15	6	163	48	2	25	4	250
17	5	157	50	0	32	6	250
19	7	170	41	6	21	5	250
21	16	172	33	1	26	2	250
23	20	157	33	2	34	4	250
25	32	146	31	0	39	2	250
27	22	154	23	2	43	6	250

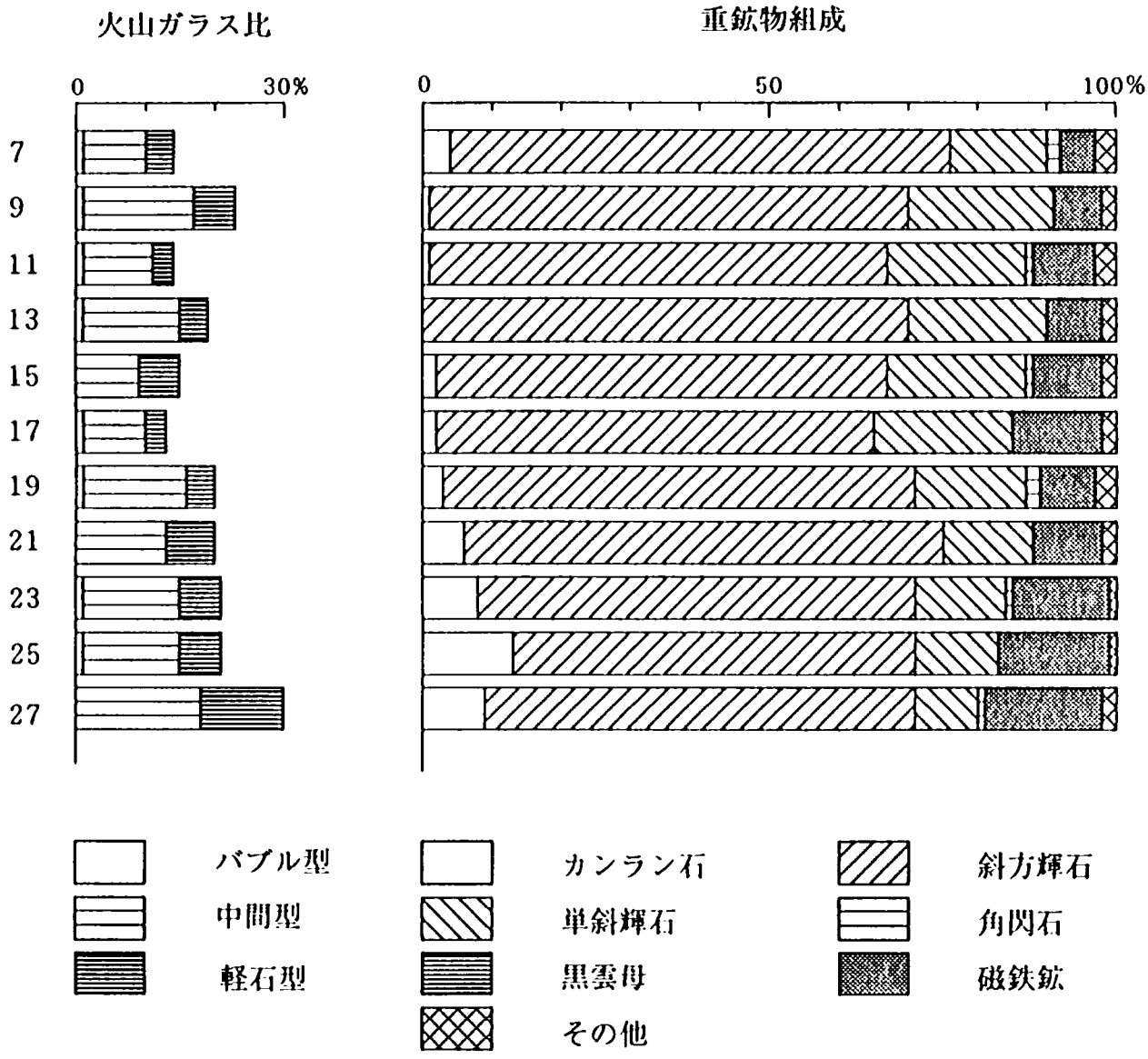
数字は粒子数．ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石，mt：磁鉄鉱．



第28図　地点①の土層柱状図



第29図　地点②の土層柱状図



第30図　地点②のテフラ組成ダイヤグラム

II．鼻毛石鎌田遺跡の植物珪酸体分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

2．試　料

試料は、地点①で８点、地点②で13点の計21点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料の絶乾（105°C・24時間）
2）試料約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02ｇ）
　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量
3）電気炉灰化法による脱有機物処理
4）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
6）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
7）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。

4．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第７表および第31・32図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：キビ族（ヒエ属など）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）、シバ属、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、Ａタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

多角形板状（ブナ科コナラ属など）

(1) 地点①（第31図）

As-BP Groupの下位層（試料８）からAs-YP直上層（試料１）までの層準について分析を行った。その結果、全体的にクマザサ属型が多量に検出された。とくに、As-BP Group直上層（試料５）では密度が約22万個/ｇにも達しており、その上層からAs-YP混層（試料２）にかけても15万個/ｇ前後と極めて高い値である。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、全体的にクマザサ属型が圧倒的に卓越していることが分かる。

(2) 地点②（第32図）

As-YPの下層（試料13）からAs-B直下層（試料１）までの層準について分析を行った。その結果、As-YP直下層（試料12）ではクマザサ属型が約12万個/ｇと多量に検出された。As-YP直上の10層（試料11）ではクマザサ属型が急激に減少し、かわってウシクサ族型が出現・増加している。９層（試料10）から７層（試料８）にかけてはウシクサ族型や棒状珪酸体が比較的多く検出され、クマザサ属型やウシクサ族（ススキ属など）、ヨシ属なども見られた。６層（試料７）から３ａ層（試料１）にかけては、ネザサ節型やウシクサ族型、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族（ススキ属など）やキビ族型なども見られた。クマザサ属型はしだいに減少してほとんど見られなくなっている。３ａ層(試料１）および３ｂ層（試料２）では、キビ族（ヒエ属など）が少量検出された。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、As-YP直下層ではクマザサ属型が圧倒的に卓越しており、６層より上位ではネザサ節型が優勢となっている。

５．植物珪酸体分析から推定される植生・環境

以上の結果から、鼻毛石鎌田遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group，約1.9-2.4万年前*1）の下層から浅間板鼻黄色軽石（As-YP，約1.3-1.4万年前*1）混層にかけては、クマザサ属を主体としたイネ科植生が継続されていたと考えられ、とくにAs-BP Groupの直上層からAs-YP混層にかけてはクマザサ属が繁茂する状況であったと推定される。

このように、最終氷期の最寒冷期とされる約1.8万年前頃にクマザサ属のピークが見られる事例は、群馬県内をはじめ関東周辺の他の遺跡でも一般に認められている(杉山ほか，1992)。クマザサ属は常緑性であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカの重要な食物となっている（高槻，1992)。最も寒冷であった約1.8万年頃にクマザサ属が広い範囲で豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも大きな意味を持っている。

As-YPより上層ではクマザサ属が急激に減少し、ススキ属やチガヤ属、ヨシ属、ウシクサ族型の給源植物などが見られるようになったと考えられる。これらの植物は、日当りの悪い林床では生育が困難であることから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったと推定される。６層から浅間Ｂテフラ（As-B，1108年）直下層の３ａ層にかけては、ネザサ節を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られる草原植生が継続されたと推定される。

As-B直下の３ａ層および榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA，６世紀初頭)混の３ｂ層では、キビ族(ヒエやアワなどが含まれる）が検出されたが、現時点ではこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを完全に識別するには至っていない（杉山ほか，1988)。また、密度も1,000個/ｇ未満と低い値であることから、これらの層でヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は考えられる

ものの、イヌビエなどの野・雑草である可能性も否定できない。

・1　放射性炭素（14C）年代.

文　献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，no.2，p.27-37.
杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，no.31，p.70-83.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用ー古代農耕追究のための基礎資料としてー．考古学と自然科学，20，p.81-92.
杉山真二・前原　豊・大工原　豊（1992）植物珪酸体（プラント・オパール）分析による遺跡周辺の古環境推定．日本文化財科学会第9回大会研究発表要旨集，p.14-15.
高槻成紀（1992）北に生きるシカたちーシカ、ササそして雪をめぐる生態学ー．どうぶつ社.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，9，p.15-29.

第７表　鼻毛石鎌田遺跡の植物珪酸体分析結果

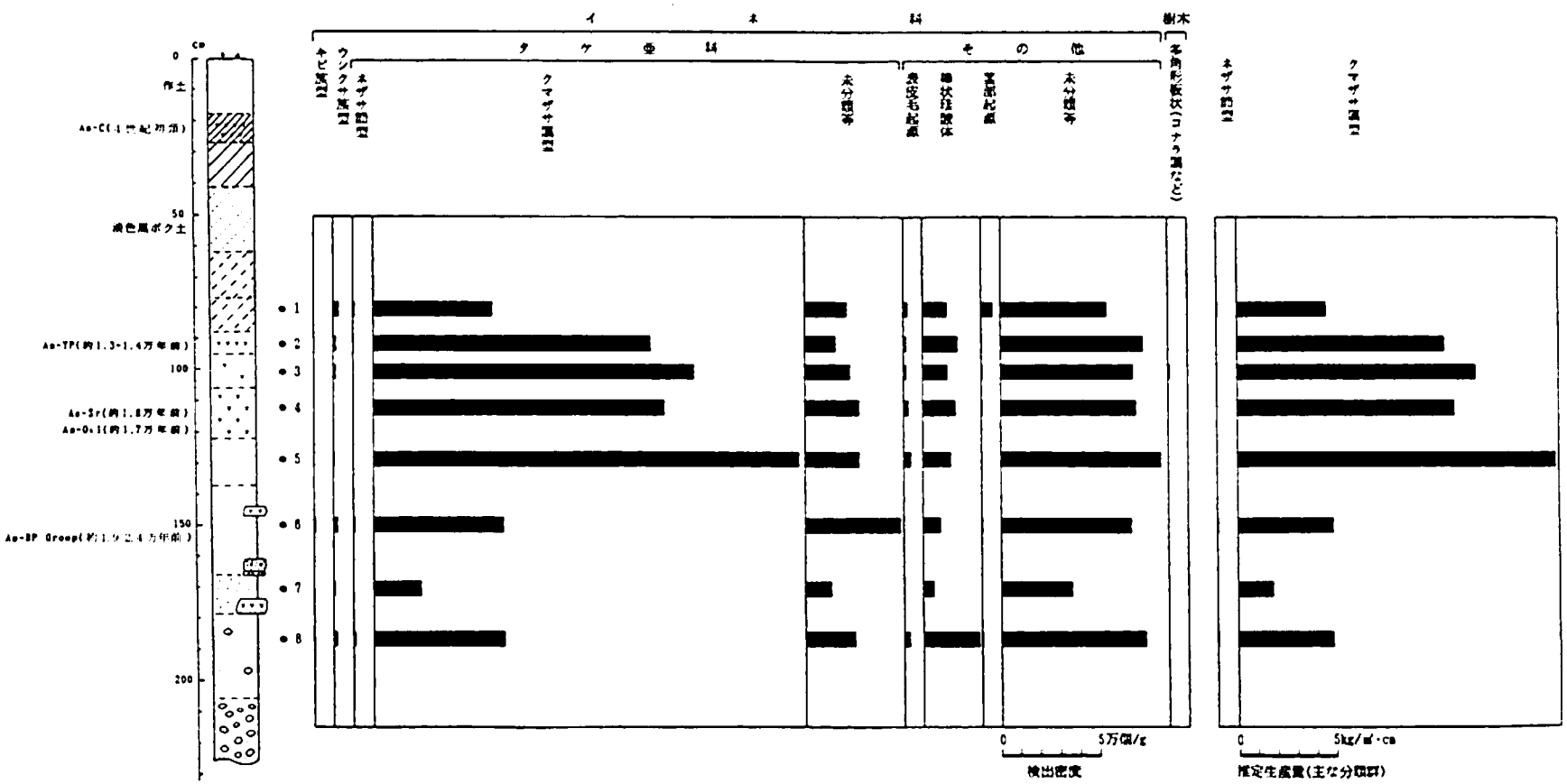
検出密度（単位：×100個/g）

分類群＼試料	地点(1) 1	2	3	4	5	6	7	8	地点(2) 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
イネ科																					
キビ族(ヒエ属など)									7	7											
ヨシ属									7	15			7			15	14	15			
ウシクサ族(ススキ属など)									76	51	95	69	14	44	23	37	49	38			7
シバ属									14		7										
キビ族型						8			48	15	29	21	14	7	8		14	8	7		
ウシクサ族型	30	15	15		7	23	8	15	291	247	220	365	214	318	236	284	247	196	89		
ウシクサ族型(大型)									7	15			7				14				
Aタイプ										36		14	14	15	15	30	49				
タケ亜科																					
ネザサ節型	7					8		7	277	240	227	530	336	414	335	75					22
クマザサ属型	601	1409	1633	1475	2173	656	241	659	21	22	29	48	157	96	213	142	134	369	231	1198	218
未分類等	215	154	231	273	272	483	143	252	173	138	205	317	465	407	434	292	113	120	89	89	145
その他のイネ科																					
表皮毛起源	22	15	15	22	37			30	21	29	15	34	14	7	8	45	49	53	37	37	44
棒状珪酸体	126	184	127	170	147	98	53	289	485	458	572	805	557	628	761	621	664	775	491	149	406
茎部起源	67		7	7		8		7			7		7	7					7		7
未分類等	541	719	678	686	807	664	361	733	824	778	748	929	850	939	829	942	890	918	692	610	581
樹木起源																					
多角形板状(コナラ属など)			7												8		7				7
植物珪酸体総数	1610	2496	2714	2633	3443	1945	805	1991	2251	2051	2155	3132	2658	2883	2869	2483	2246	2490	1643	2084	1437

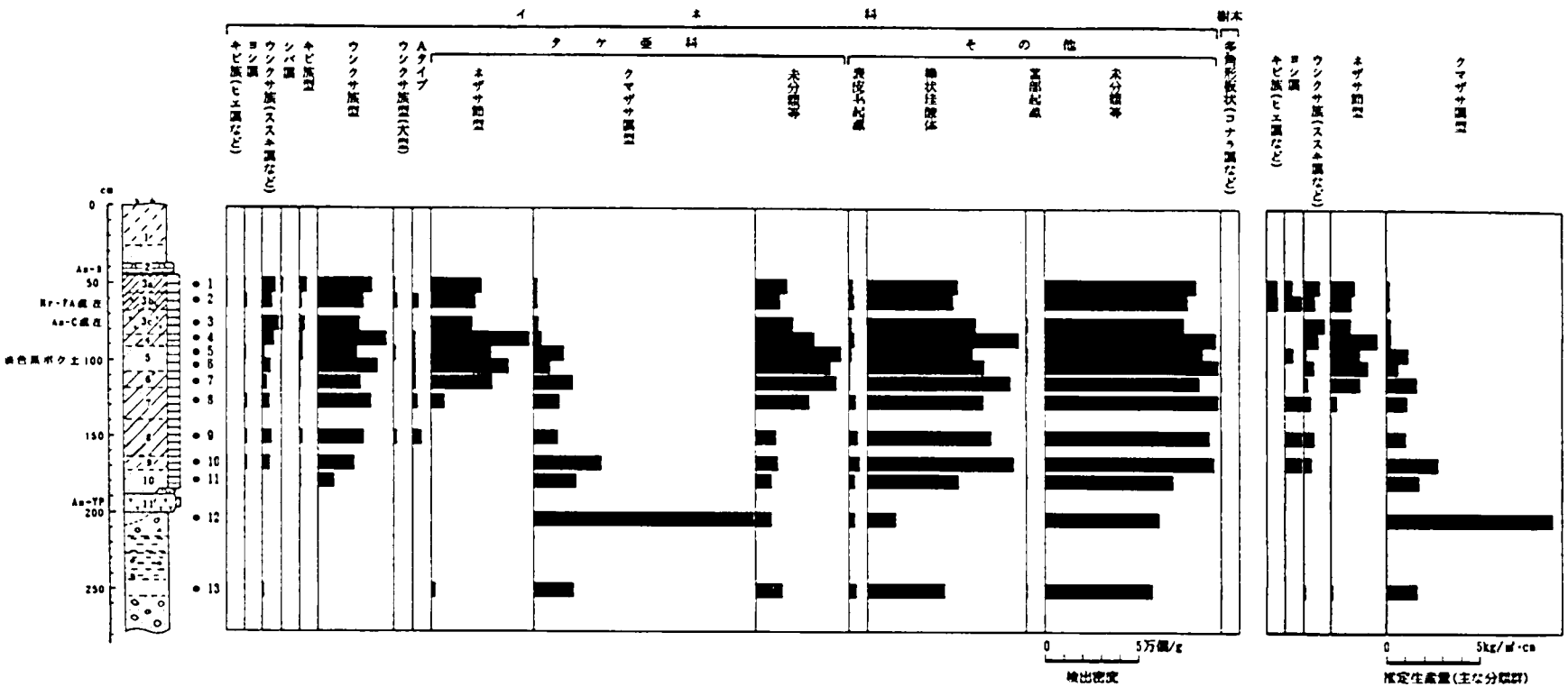
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²·cm）

キビ族(ヒエ属など)									0.58	0.61											
ヨシ属									0.44	0.92			0.45			0.94	0.89	0.95			
ウシクサ族(ススキ属など)									0.94	0.63	1.18	0.85	0.18	0.55	0.28	0.46	0.61	0.47			0.09
ネザサ節型	0.04					0.04		0.04	1.33	1.15	1.09	2.54	1.61	1.99	1.61	0.36					0.10
クマザサ属型	4.51	10.57	12.24	11.06	16.30	4.92	1.81	4.94	0.16	0.16	0.22	0.36	1.18	0.72	1.60	1.07	1.01	2.76	1.73	8.99	1.63

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



第31図　地点①の植物珪酸体分析結果



第32図　地点②の植物珪酸体分析結果

写　真　図　版

1．A区完掘状況（矢印がB区）

2．B区完掘状況

1．第2号土坑土層観察状況

2．第2号土坑完掘状況

3．第6号土坑土層観察状況

4．第6号土坑完掘状況

5．第7号土坑土層観察状況

6．第7号土坑完掘状況

7．第10号土坑土層観察状況

8．第10号土坑完掘状況

1．第11号土坑土層観察状況

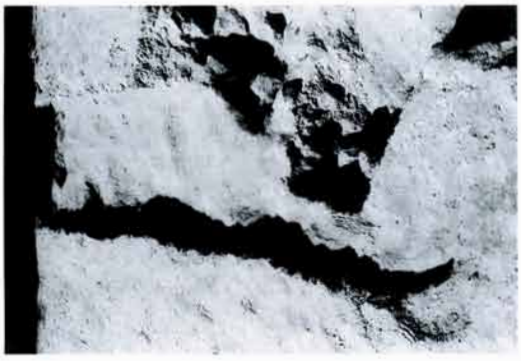
2．第11号土坑完掘状況

3．第21号土坑完掘状況

4．第3号土坑完掘状況

5．第4号土坑完掘状況

6．第5号土坑完掘状況



7．第13号土坑完掘状況

8．第1号土坑完掘状況

鼻毛石赤坂Ⅰ遺跡

1．第12号土坑土層観察状況

2．第12号土坑完掘状況

鼻毛石赤坂Ⅱ遺跡

3．第1号溝完掘状況

4．第2・3号溝完掘状況

1．第1号住居址完掘状況

2．第1号住居址土層観察状況

3．第1号住居址炉址完掘状況

4．第1号土坑完掘状況

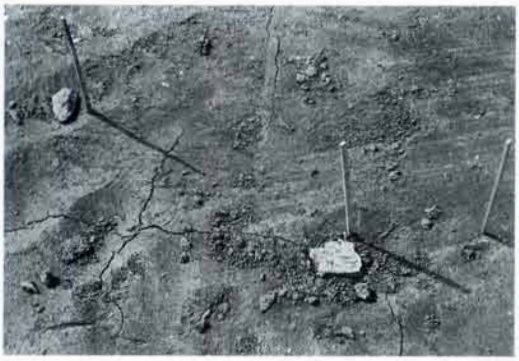
5．第1号埋甕遺物出土状況

1．遺物出土状況①

2．遺物出土状況②

3．遺物出土状況③

4．遺物出土状況④

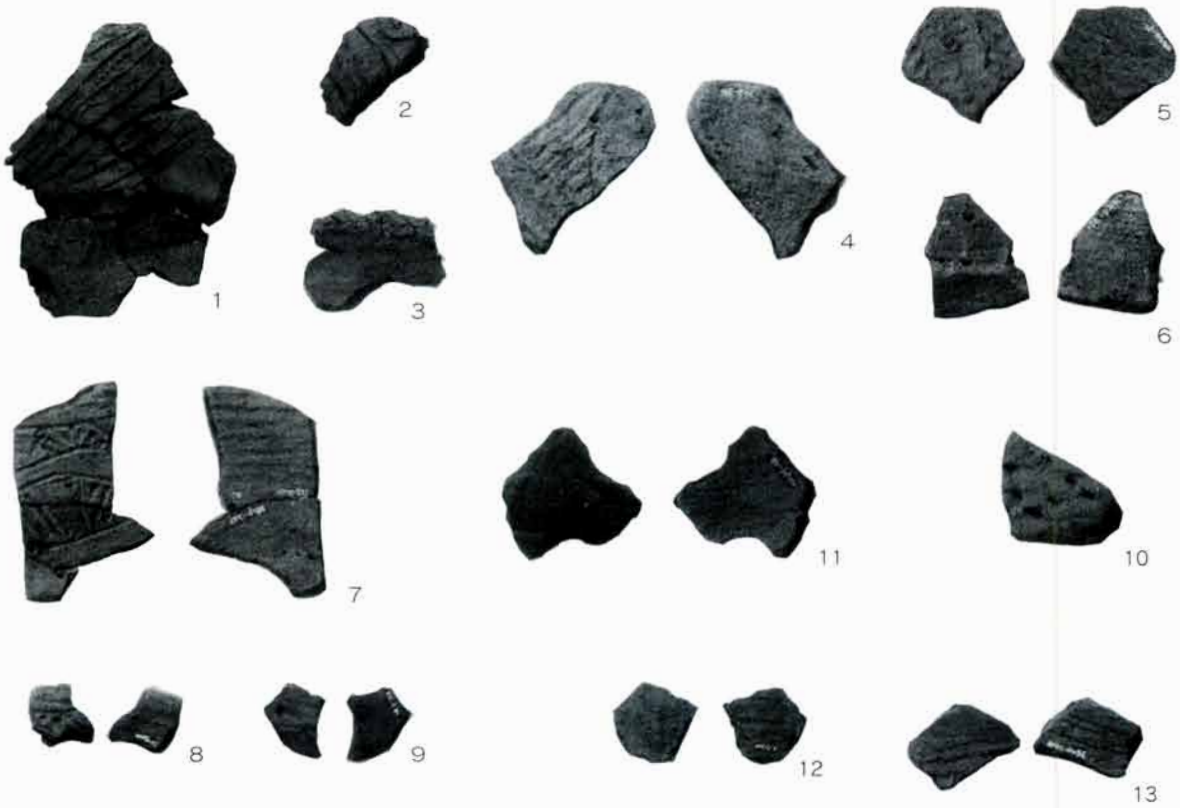


5．遺物出土状況⑤

6．遺物出土状況⑥

7．遺物出土状況⑦

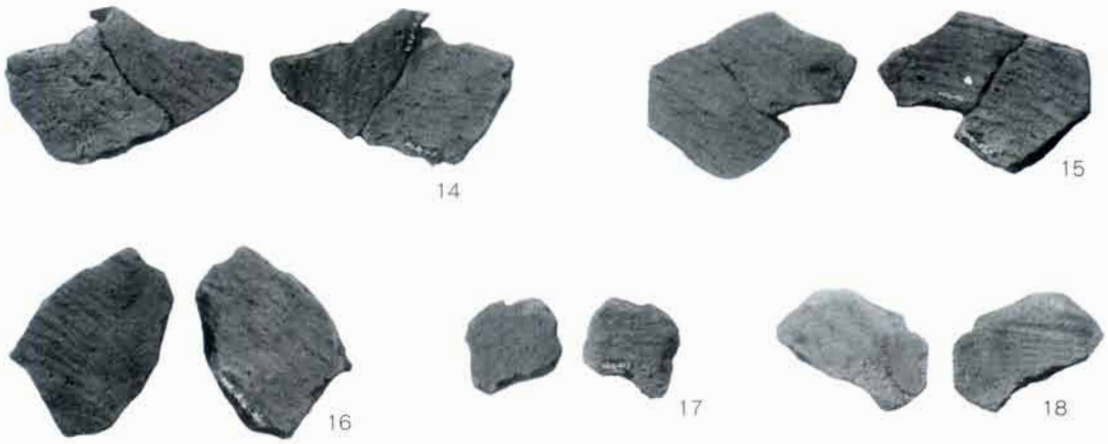
第１号住居址出土遺物　　第１号土坑出土遺物



包含層出土土器①

1埋1

第1号埋甕出土遺物



包含層出土土器②

包含層出土土器③

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

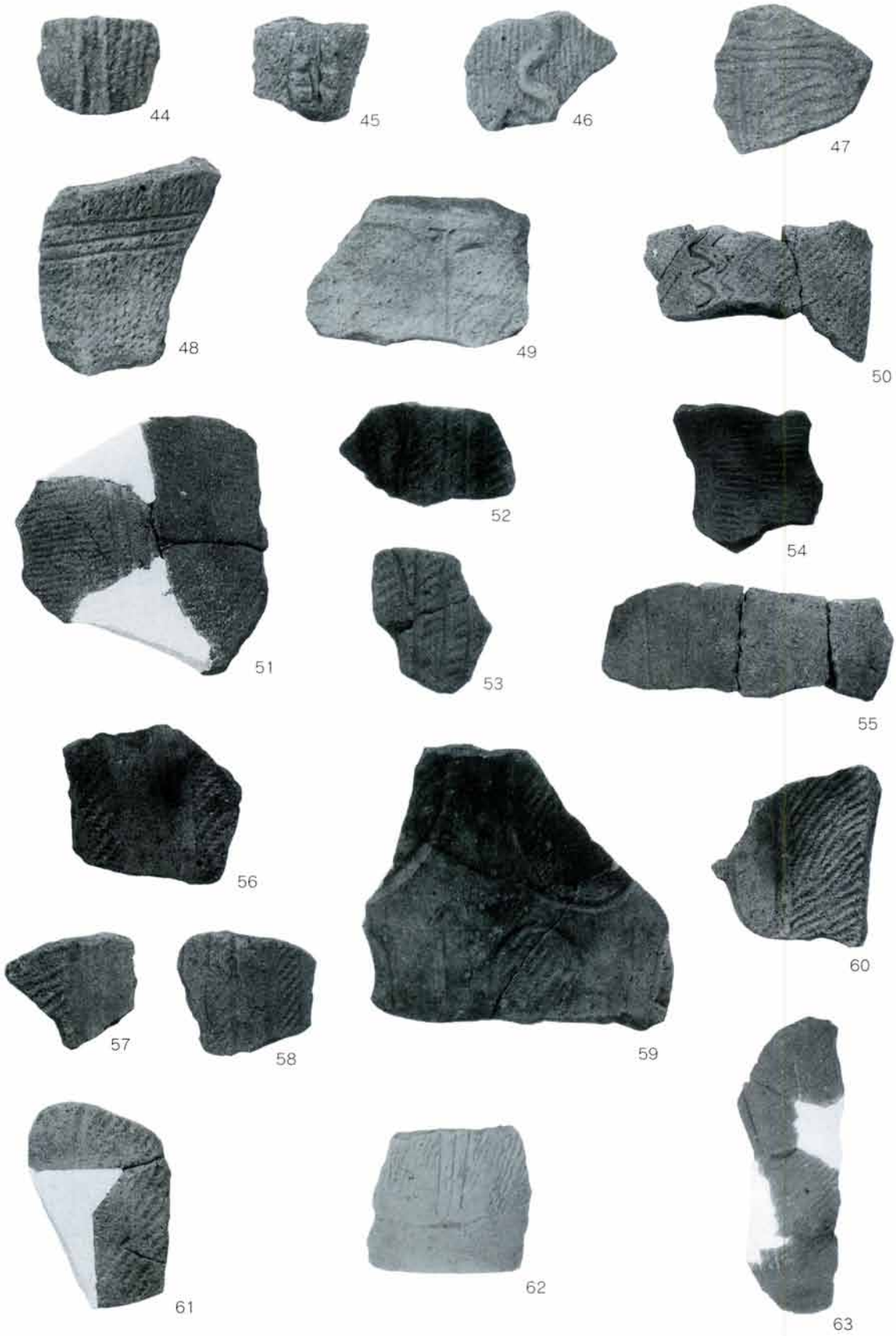
40

41

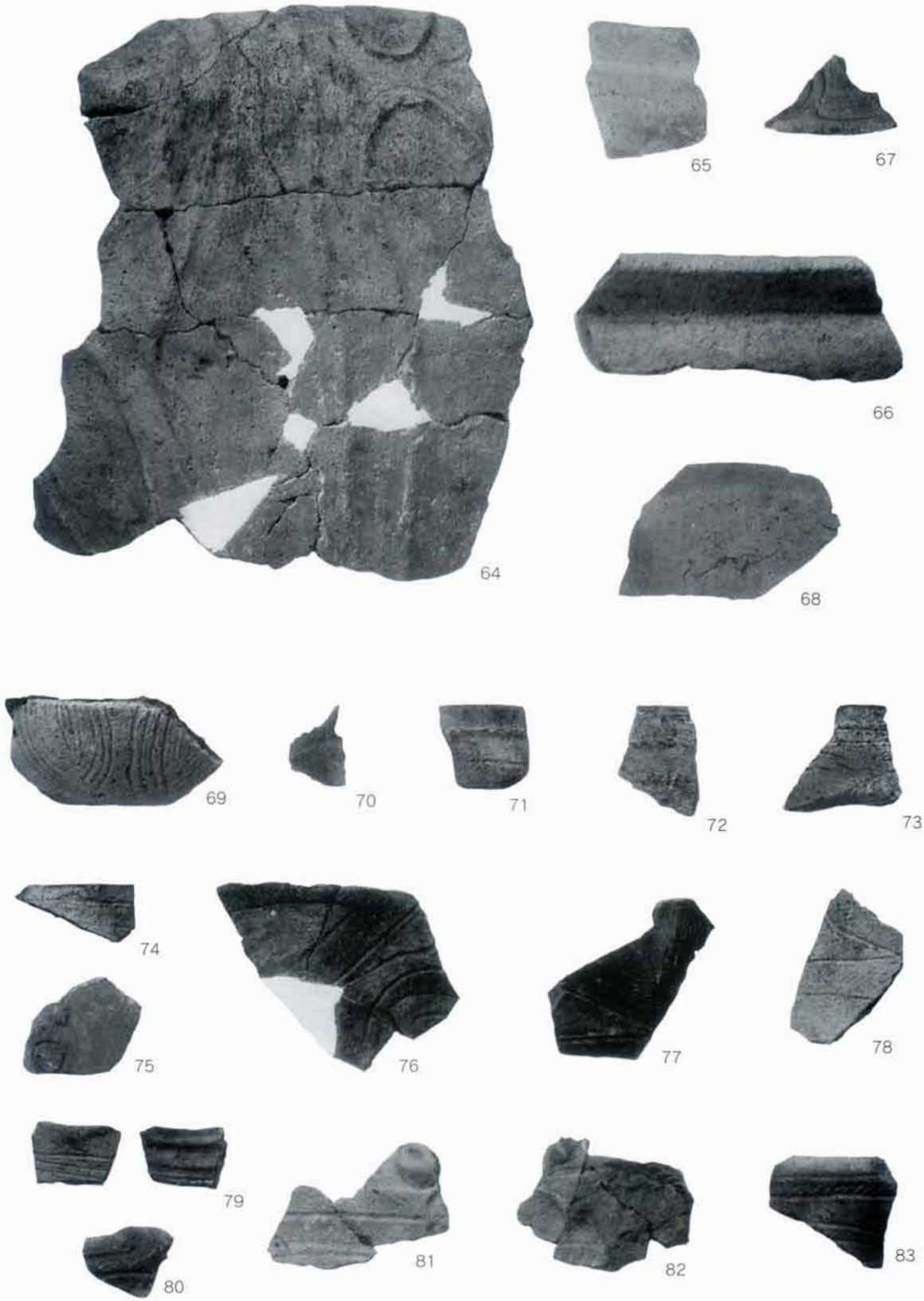
42

43

包含層出土土器④



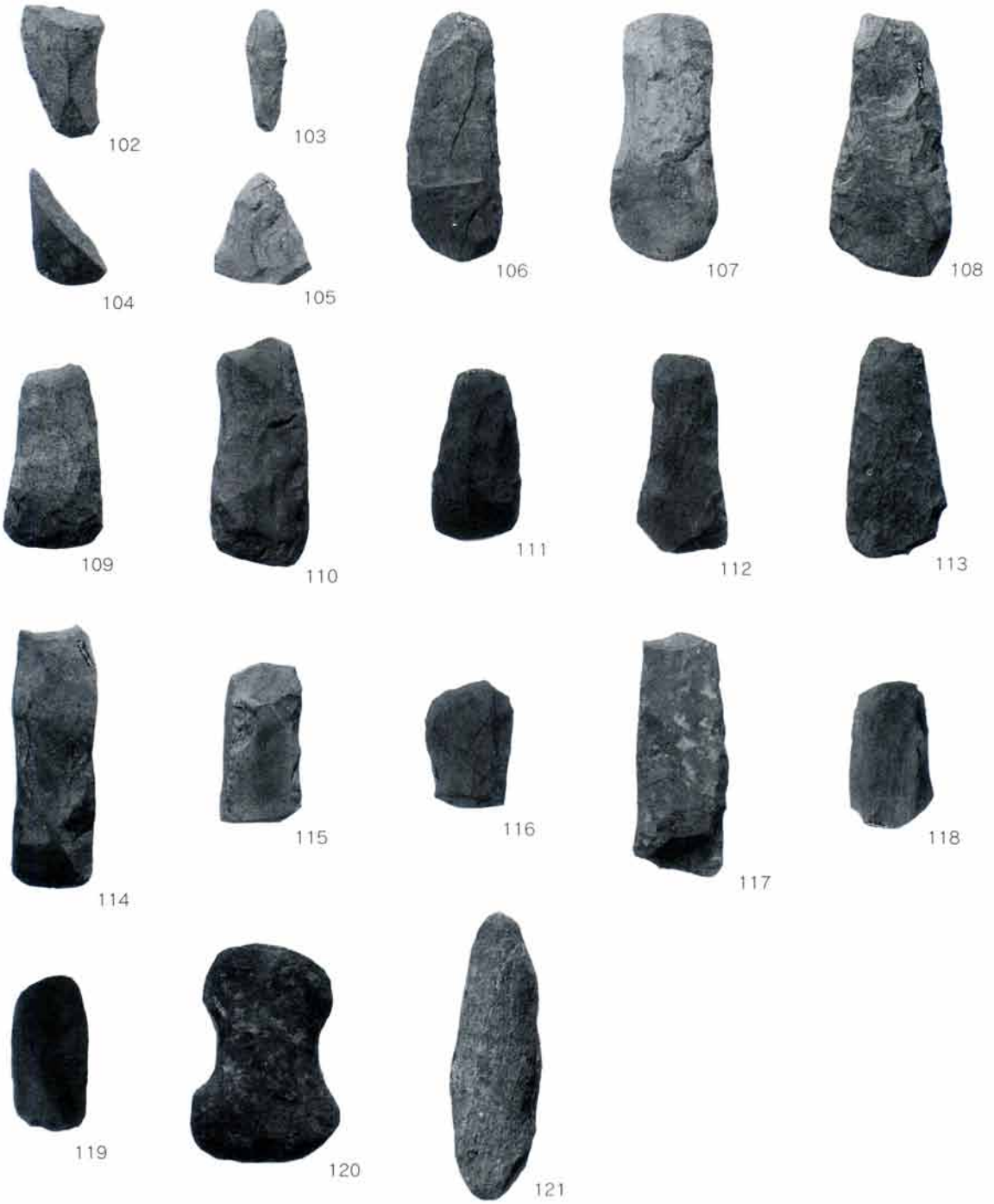
包含層出土土器⑤



包含層出土土器⑥

包含層出土土器⑦

包含層出土土製品


102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121

包含層出土石器

1．第1号竪穴状遺構完掘状況

2．第2号土坑土層観察状況

3．第2号土坑完掘状況

4．第3号土坑土層観察状況

5．第3号土坑完掘状況

6．第4号土坑土層観察状況

7．第4号土坑完掘状況

1．第7号土坑土層観察状況

2．第7号土坑完掘状況

3．第16号土坑完掘状況

4．第21号土坑土層観察状況

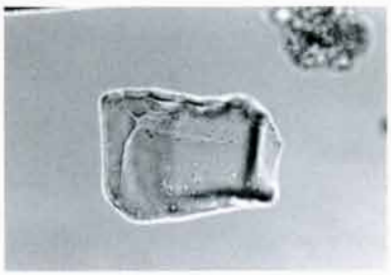
5．第21号土坑完掘状況

地割れ痕調査風景・同完掘状況

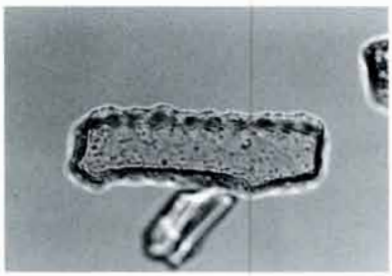
植物珪酸体の顕微鏡写真

No.	分　類　群	地　点	試料名
1	キビ族（ヒエ属など）	②	2
2	キビ族（ヒエ属など）	②	2
3	ヨシ属	②	10
4	ウシクサ族（ススキ属など）	②	10
5	シバ属	②	1
6	キビ族型	②	1
7	ウシクサ族型（大型）	②	5
8	イネ科Aタイプ	②	2
9	ネザサ節型	②	3
10	クマザサ属型	②	1
11	クマザサ属型	②	6
12	表皮毛起源	②	2
13	棒状珪酸体	②	5
14	イネ科（ヨシ属？）の茎部起源	①	1
15	多角形板状（コナラ属など）	②	7

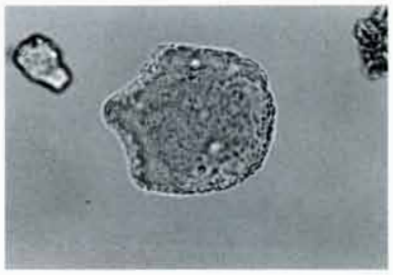
No. 1



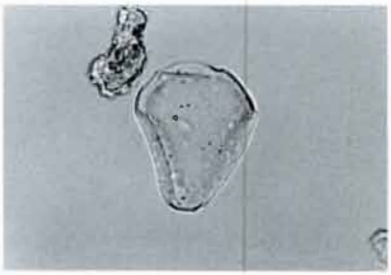
No. 2



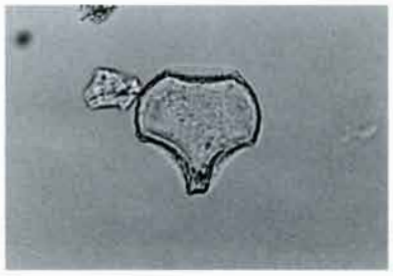
No. 3



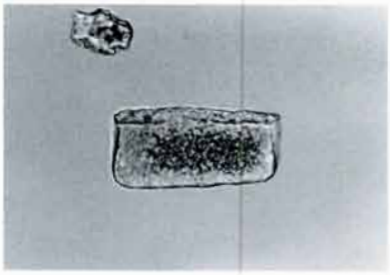
No. 4



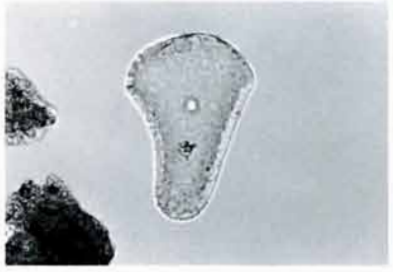
No. 5



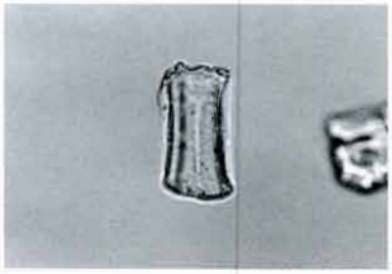
No. 6



No. 7



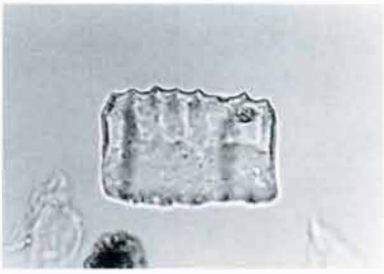
No. 8



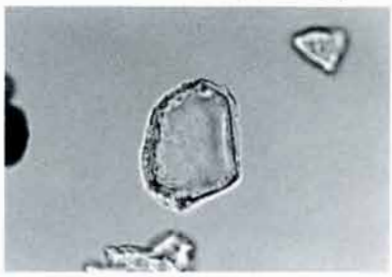
0　50　100μm

植物珪酸体の顕微鏡写真①

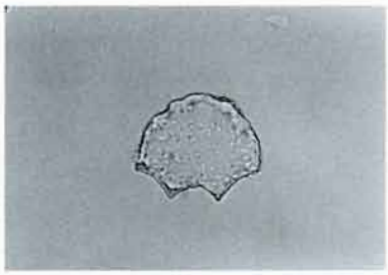
No.9



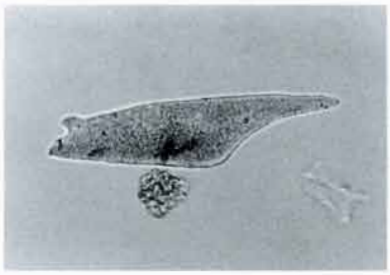
No.10



No.11

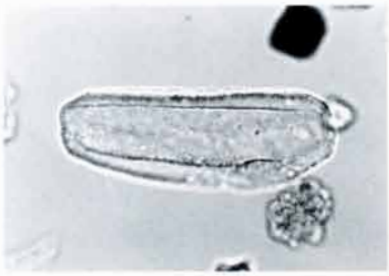


No.12

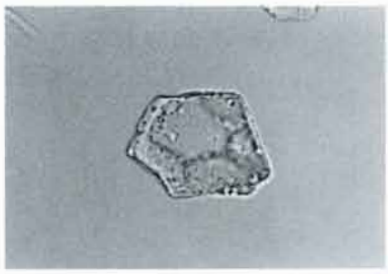


No.13

No.14



No.15



0　50　100μm

植物珪酸体の顕微鏡写真②

鼻毛石赤坂遺跡

2004年3月17日印刷
2004年3月22日発行

編集発行　宮城村教育委員会
群馬県勢多郡宮城村鼻毛石1711－8
〒371-0244　電話　027－283－6886

印刷　朝日印刷工業株式会社